制度が新に組織せられる時、はじめて、學生はすべて學校なり學科なりに興趣を感じるやうになるであらう。

然らば、現在の日本の青少年に對し、最も必要な高い理想とは何であるかといふと、それは、日本が、東洋の、ひいては世界の、指導者たるべき地位にあり、さういふ地位に立つ責任が、彼らに負はされてゐるといふ自覺を與へる事である。その爲めに、あらゆる文化の領域において、日本が多くの飛躍をしなければならない必要があり、その飛躍の爲めには、又多大の犧牲を必要とし、困苦窮乏を凌いで行くだけの覺悟がなければならないのである。さういふ決意を、彼らに促す事が、これらの教育のあらゆる分科にわたる根本的指導理念とせられなければならない。

此所において、世界を指導すべき日本的文化の確立といふ事が現代の教育に與へられた重大なる使命なのである。かゝる文化の建設の爲めに、東西文化の融合といふ事が刻下の題目となる。所が、東西文化の融合は、わが日本において最も可能であるといふ事について、それが一面の眞實を持つ意見であるといふ事は確かであるが、なほやはり、それだけでは十分な結果を得られまいと考へられるのである。

一體、二つのものが融合して、一つのものを作り上げるといふ事は、その二つのものが解體して、それとは、全然別個の性質の異物が出來上るといふ意味なのであつて、東西文化の融合のもとに、新しい文化が建設せられるといふ事は、從來の日本文化とは全く異なる、異質文化が出來上るといふ意味に他ならない。われわれは、さうした無國籍の異邦人的文化では、世界を指導する文化にはなり得ないと考へる。それでは、どうすればよいかといふと、右の如き、東西文化の融合といふ解釋が誤つてゐるのであつて、これは、二つの文化の融合ではなく、長い傳統のもとに存在してゐるわが日本の文化に、外國文化を溶解させるといふ意味に他ならないのである。既に生きてゐる、又、現に生きてゐるわが國の文化に、外國の文化が溶け込むのである。

言葉にしても、日本語の長所と外國語の長所とを取つて、エスペラントのやうな新らしい言葉を作らうといふやうな事では勿論なく、文字にしても、日本の國字を、ローマ字式の如きものにしてしまふといふのではなく、長い傳統のもとに生きてゐるわが國の純正なる國語や、假名文字の中に、西洋文化の輸入に伴ふ、新らしい言葉を溶け込ませて、これによつて、日本語の內容を豐富にしようとするやうな事である。

さういふ事では、世界を指導すべき文化の確立は覺束ないといふものがあるかも知れない。併し、個人の場合においても、世の指導者となるべき人物は、最も個性的な人物が多いのであるが、その如く、世界の指導者となるべき日本は、最も個性的なものを、文化のあらゆる分野に於て持たなければならない。日本文化を世界に擴充する爲めには、假名よりもローマ字の方が早くてよからうといふのは、短見も甚だしき見解であつて、遲くても最も確實な勝利を最後に得る爲めには日本獨特の假名による方が、よろしいのである。假名を失へば、それだけ日本獨特の個性を失つた事になる。從つなるのであるから、世界が眞實の日本文化に觸れる部面は、それだけ狹小になつた事になる。從つて、それだけ、世界を指導すべき强大なる力を失ふといふ結果にもなるのである。

かやうに見て來ると、外國文化を溶解せしめるべき基調となるものは、もとより日本文化であり、その日本の傳統文化の中で、最も著しいものは、藝術の分野におけるものでなければならない。國語・國文學が、此の際、重要な意義を持つものである事も亦當然であるべきであらう。

かくして、日本の教育の理想は、國語・國文學の教育と結びついて來るのである。日本の理想の達成の爲めの情熱を學生に與へる時、彼らは教育の各科目に、眞實の興味を感じ、尊敬の情を抱くべきである。さうして、かゝる日本の理想が、國語教育を基底に置く事の必然性を自ら理解する時、國語教育の重大なる意義も亦、理解せられる所となるであらう。これは、學生自身の問題であるとともに、又、國語教師自身の問題でもある。これを、學生に云ひ聞かせて、その反省を促し、その理解を求めるとともに、又、國語教育にも、同樣の理解と反省とを希望したいと熱心に考へてゐる。

以上の所論は、日本の理想と、國語・國文學とのつながり方の點において、殆ど何らのいふ所もなくて、甚だ不十分なものとなつてゐるが、要は、漫然たる古典的知識の注入や、形式的文法の授與に國語・國文教育の目的があるのではなく（從來の教育では、さういふやうに考へられる所があつた）、將來における日本の理想の達成の爲めに、その基底となる所に、國語・國文教育の重大なる意義があるのであり、同時にこれは、かゝる理想の實現に對する學生の生活に、行動的に結びついてゐなければならないといふ點において、それが生きた力を、學生に與へる所の生命を持つて來るべきであるといふ事を力說したいのである。

古典文學の教育的意義

國語科において古典を取扱ふといふことは、現代の國語教育における著しき特色であらう。中等學校において國文學史を教授することも、教授要目の改正によつて確立せられた。初等教育の讀本においても亦、古典的な教材が多く挿入せられることになつた。此の事は又、一般に、自國の文學、就中、古典文學に對する認識を深めようとする狀勢があるのと相應するものである。

中等學校の國語教育における古典の教材の重視は、最近までの現代文學偏重に對する反動と見なされ得る。それと同樣に、初等教育における古典的教材の重加は、やはり初等教育における現代文學思潮の重視に對する反駁と見る事が出來る。

初等教育者の、現代文學より受ける影響は、種々な點に於いて著しいものがあつた。併しさういふ目まぐるしいジヤーナリズムの波に奔弄せられる、種々の外來思潮の去來に、送迎にいとまのない影響を受けて、不完全な消化に自分の頭腦を疲らせるよりも、むしろ動きなき自國の古典の研究によつて、自己の學識教養を豐かにする方が、國語教育を擔當する人々にとつて望ましいことなのである。初等教育における古典の教材の取扱ひについて、まづ希望すべき事は、教授法とか、又は當面する教材だけの研究ではなくして、自國の古典文學に對して、靜かに落着いた研究を深く堀り下げ、根柢的な理解を持つやうにしたい事、これである。かういふ根を下した修養を缺く以上は、幾ら古典的教材を取扱ふとしても、それがうはすべりなものになりがちであるのは、免れる事が出來ない所である。

古典文學を初等教育に取入れる意義は、どういふ所にあるのであらうか。國語教育は、單に言語の知識を與へる事が目的であるわけでは勿論ない。文學を知り、言語の意義を知ることだけが、國語科の目的ではない。その文の持つ精神、情趣を、明確に把握せしめる事である。更にそれによつて、各人の人間性を伸長せしめるとともに、將來における生活力の發展に寄與させ、國民としての心構へを錬成させることが最も必要な意義である。

國語教育のかゝる終局的意義を考へる時、此の意義を考へる時此の意義を有効に果す爲めには、いかなる教材が適當してゐるかと云へば、それは、不滅の價値ある古典を教材に取る時、その効果

を最も有効に發揮することが出來ると、躊躇なく答へる事が出來るであらう。それで、高等教育においては、早く國語教育の中心が古典に置かれてゐた。更に、それが中等教育においても重視せられる傾向になつた。さうして、又、初等教育においても、同じ傾向が顯著となつたのである。

最近までの狀態では、初等教育の義務だけを終へた大部分の國民は、自國の古典について何らの知る所なくて過さなければならなかつた。中等教育を受けた人々も、同じやうに、極くその小部分の、まとまりなき知識より得られずして終るのやむなき狀態であつた。併し、今や、初等教育において、古典文學の陰影が幼い人々の頭腦にさし、中等教育において、稍確實なその原形が認められるやうになり、更に高等教育において、最も明瞭な姿において、その全形が知られるやうに、國語教育の系統が組織づけられて來たのである。義務教育を受けただけの國民でも、古典文學のほのかな印象を殘される事になる。さうして、此の印象は、上級になるほど、確實な形象に形作られてゆくのである。しかも、第一印象こそは、最も確かな、最も忘れられざる記憶である。此の意味で初等教育における古典的教材は、最も重要な意義を有するものと云はなければならない。

古典文學は、それによつて國民的な精神と情操を養ふとともに、自國の文學的傳統に、信念と矜持とを持たしめるものでなければならない。さうして、わが國の文學的榮譽を兒童に感ぜしめるやうにしたい。つまり、そこに出てゐる文章なり歌なりが、他の普通の教材と異なる意義を持つことを明かにしなければならない。その點が、古典からの教材の取扱ひに、異なる修養を必要とし、特別の氣魄を必要とする所以である。卽ち、それは、單に、語句や文の解明、その精神の理解だけにとどまらずして、その背後にあるものが必要となつて來るのである。現在の國語教育では、當面の文章の理解の深到を主なる目的として、どうかすれば、瑣末的なと思はれる解釋主義が多く行はれてゐるやうであるが、さうして、もとよりそれも必要な意義が認められはするが、一面、文を全體として理解する方法と、就中、文の背後にあるものの認知が缺けてゐるやうである。文の局少部に眼と心とが注がれるのみで、廣く大觀して理解し、鑑賞し、研究する方法が多く考へられてゐないやうであるが、古典文學を取扱ふに當つては、是非、さうした瑣末主義に拘泥しない精神が必要であると思ふ。

併し、さうは云つても、萬葉集以下から出てゐる和歌・俳句の如き詩歌に至つては、全體の趣意の通釋とともに、一語一句の丁寧な解釋も亦甚だ必要であるが、何よりも希望したいことは、それ

らの名歌名句の暗記である。さうして、さうした有名な詩歌、代表的作品の如きに至つては、讀本に出てゐるもののみならず、それに連關する若干の教材をも補習することによつて、同じやうに、出來るだけこれを兒童に暗誦せしめたい。それは、かつて古く行はれた漢文の素讀の如きものであつてもよい。それは一つには、自ら記憶する習性をも與へる事にもなるであらうし、又、自分自身深く理解しなくても、その暗誦の結果が、成長した後に有力な効果を發揮し得る事は、敢へて斷言する事が出來る。暗誦教育は、不滅の古典である時に、最も効力があるのである。讀本に賴らないで、それらの名歌佳句が、折にふれて兒童の頭腦から自然に出て來るやうにしたい。此の意味で、補習的な教材の準備が出來るやうにしたいと思ふ。さういふ書を當局に編纂してもらつてもよい。

古典文學と云つても種々の性質のものがある。和歌の如きは、短小の獨立した作品であるから、初等教育に適當したものを抽出することも可能である。併し、長篇の散文文學になるとさういふ事が不可能で、(隨筆文學の如き短文の集合したものは別として)、その一部分を、しかも兒童にも分り易いやうに書き改めて與へる事も必要となつて來る。此の場合、源氏物語の如き、長篇の物語小說から出てゐるものの如きは、他のものと違つて、取扱ひ上に種々の注意が必要となるのである。殊に源氏物語の如き人情小說においては、その全體の梗概を話す事は、中等學校においても不可能である。併し此の場合にも大切なのは、讀本に出てゐる內容よりも、源氏物語といふ不滅の古典について、强く印象づける事である。もとより、かゝる印象を與へる爲めには、又、讀本に出てゐる文を通して行ふより外はなく、從つて、その意味で、その內容は重要なのであるが、その目的は、そこに出てゐる文の味讀そのものにあるのではなくて、文の背後にあるもの、卽ち、源氏物語自身と、かゝる偉大なる古典の作者の名とを、强く兒童の腦裡に印象づける事にあるのである。此の目的を見失つて、源氏物語の名を忘れ、紫式部の名を忘れて、たゞ讀本の文にのみ執する事は、必ずしも最善の方法ではあるまい。そのためには、此の教材に關聯して、紫式部の幼い時の逸話や、源氏物語の書き初められた時の美しい情景(それは傳說に過ぎないが)などについて、興味深く語り添へる事なども無益ではあるまい。此の作品が、光源氏君といふすぐれた方の一生を描いたものであるといふやうな說明を加へる事も不必要ではあるまい。さうして、それに附加すべき源氏君の善行の一二例も、兒童に話して差支へない範圍のものがないと云へまい。勿論、その爲めには、若干のアレンヂを必要とするが。さうして何よりも、かゝるすぐれた作品の作者をわれわれの先祖に持つ事

の誇りを植ゑつけるやうに努力する事が必要であらう。

此處に一言加へておきたい事は、源氏物語の如き頽廢文學を取扱ふのは教育上不可であるとする、說のある事である。源氏物語をもつて頽廢文學とするのは一知半解の考であらう。幾多の誘惑、試錬を經て、弱い人間が、次第に全圓的な完成された人間性にまで高められて行く過程を描いたのが源氏物語であつて、その根柢には主人公の「まごころ」主義が横はつてゐる。此の誠の精神こそ、源氏物語の根柢となるのであつて、それが女性の作者なるが故に女性的な現れ方をし、又、平安時代の雰圍氣を纒うてゐるに過ぎないのである。此の意味で、源氏物語は永遠の作であり、此の故に、多くの知識階級に愛讀されて今日に至り、それは、最も價値ある國民的古典としての搖ぎなき價値を持つてゐる。これが國語國文の教育において取扱はれる事は極めて當然であり、此の作品の價値について、幼き人々の頭腦に印象づけようとするのは甚だ必要な事と考へる。(なほ、さういふ意味で源氏物語を排擊する人々は、あらゆる古典を貶し、現代文學の、しかも階級思想を含む文學を最も價値ありとし、此の立場から國語教育をも批判しようとしてゐる、ある種の思想を隱した人々に多い事を一言しておく。)

もし源氏物語を頽廢文學と認める立場から考へれば、わが國の古典文學は、皆何らかの意味で頽廢的であり不健全であるといふ事にもなるのであつて、それは古典文學の、殆ど全面的な斥非となる。(それは古事記以下、方丈記や徒然草の如き作品についても云はれる事になるのである。)故に、さういふ言說は殆ど問題にならないから、われわれは、さういふ古典文學の國民的教養の上における重要性を正しく確信してよいのである。古典的教材の進出を否定するやうな論議があるとするなら、それは全く謂れなき事である。

更に、古事記の如き國民的古典の意義について、その誤まらざる觀念を兒童に植ゑつける事は、一層教育上必要とする所である。さうして、此の際此の古典の成立事情と、その內容の他の教材として出てゐるものや、歷史で取扱はれる方面との連關を失はないやうに心がけたいものと思ふ。つまり、上古の生活が、此の書から出てゐて、それが現代の我々の精神の中に生きてゐるといふ事を理解させなければならない。あの話も古事記の中にある。此の事も、古事記から出てゐるといふやうに、兒童の生活において、古事記と連關せしめられるべき事は、これを引き出して來て、記憶を新にさせるといふ事も、必要であらう。或は大黑神と大國主命との關係についてさへも(大黑神が印

度神に出てゐるといふ事は云ふまでもないが、さういふくだくだしい說明は兒童の頭腦を混亂せしめるであらうから、可能な範圍で明快な差別を與へておく事は必要であるとしても)、說明を加へて、此の古典に親しみの情を與へるやうな方法も、必ずしも有害ではあるまい。

それにしても、古事記のわが國體、國家に關する重要性の認識と、これを尊重すべき信念の涵養とは、此の教材の內容を通して必ず與へられなければならぬ事で、それは單なる文學鑑賞の心持とは違ふ迫力がなければならない。總じて古典文學においては、當面の文の文學鑑賞よりも、その背後にある國民的精神、國家の誇るべき傳統文化に對する正しい理解を與へて、その印象が兒童の成長後も、國民の一人としての生活に、生きて働くやうな礎地を作つておく事が最も必要なのである。古典文學は、單に辭句の修練・文章の記憶に資すべきだけでなく、又、さういふ教育上の方便に役立てば、あとはその內容が忘れ去られてもよいといふやうな性質のものではなく、いつまでも強い記憶が全面的に讀者の腦裡に燒きつけられて、成長に伴ひ、いよ〳〵ます〳〵強くその印象が精神を鼓舞するといふ種類のものでなければならない。かくて、教育が上に上れば上るほど、同じ古典が繰り返し說かれるといふ事にも、甚だ重要な意義が認められるのである。

最後に注意しておきたい事は、古典教材の取扱ひには、教師に古典の教養が甚だ必要であるが、併し、兒童にこれを示すに當つては、決して專門に走り過ぎたり、難解に傾いたりしてはならない事である。常に平易にかつ興趣深くして、古典に對する特別の興味を失はないやうに心がける事が必要である。さうして、古典に對する研究的な沈潛と根柢ある修練は、むしろ、かゝる古典的教材において、豐富なる興趣を集める事が容易であると考へてゐる。とにかく、ある古典、ある作家の取扱ひは、その古典や作家の、教材として出てゐる以外の他のすべての部面について、適宜に、必要に應じて直ちに兒童に語り得るだけの教養を準備しておく事が、最も必要なのである。

なほ付け加へておきたいが、讀本の中には、枕草紙や方丈記や徒然草の如き隨筆文學からも教材が取られたく、その中の、文章の平易で、內容の價値あるものは、一文くらゐ原文で出されたいものと思ふ。

次に、現今の國語教育に、實用的便利化のみを主眼とする一派の運動があるが、それは、私見をもつてすれば、その人々の云ふ如く、國民文化を高める所以ではなくて、むしろ、文化を低くする所以であると考へてゐる。教養の基礎となるのに必要な種々なる種目の放逐とか、(漢字使用の廢止

の如き意見もその一例)、全體の就學年限の極度な短縮等の意見は皆さうである。併しさういふ論者としても、今日の國語教育における古典重視の傾向を、正面から非難するものはゐないと考へるが、併し、さういふ人々の意見の行き方から見ると、これを否定するやうな議論も出ないとは限らないと思はれるので、敢へて、自分の意見を一言しておくのである。古典的教材は、國民文化を高める素地として、重要な意義を有し、國家的精神を養ひ育てる基礎として、甚だ必要なものであるといふ事を强調しておく。更に文學精神の理解においても、かゝる古典文學の教養の上に立つべき事、此の古典的精神から新しい文學の出發があるといふ事をも、(必ずしも初等教育と密接な關聯はないが、かゝる精神が兒童の成長後に開花結實する事を豫想して)、一言しておく。

古事記の國民教育的意義

小學國語讀本卷十一に出てゐる「古事記の話」は、同じ卷の「源氏物語」や、卷十二の「萬葉集」に比べると、その表現力が劣つてゐるやうに思はれる。卷十二の「萬葉集」は壓卷で、私は、新讀本に始めて出た古典の取扱ひの中では、あの課が最もすぐれてゐると思ふ。說明のし方も、例のあげ方も、至極適當してゐて、あの短い分量の中に、必要なだけの內容を十分につくしてゐる。少くとも、われわれ國文學者の欲するだけの說明が、甚だ行き屆いた用意を以て、あそこには行はれてゐるのである。

さういふすぐれた課に比すると、此の「古事記の話」は、一層格段の見劣りがするのである。どういふ所に、その原因があるかといふと、第一に、此の課の文章が、情熟を缺いて、單に、表面的な說明に終始してゐる所にあると思ふ。成程、稗田阿禮が、勅命を承つて、古傳を殘す光榮に喜ぶ情は、「勅命の下つたことを承つた阿禮は、今や天にも上る心地であつたらう」といふやうな表現で

記されてゐるが、これは又、何といふ空疎な云ひ方であらう。私の求めてゐる情熱といふのは、かういふ事ではない。此の課は、片假名や平假名がない場合、漢字のみを以て、國語をいかに表出すべきかといふ苦心を知らしめる所に、主要點が置かれてゐるやうであつて、これは、いかにも、わが國の文化的發展や國民の創造生成力を理解させる上に、甚だ重要な意義がある事は勿論であるから、小學校の教師は、可能な範圍で、この點を、兒童に十分に知悉させる事は必要であり、更に、萬葉集の場合にも、萬葉假名に觸れて、もう一度此の方面の進歩につき、理解させる事も必要であると思ふのだが、さういふ立場から見た場合の「古事記の話」の内容には、ある點まで贊成の意を表する事が出來るとしても、他に最も大切な點を闕落する所があるにおいては、私は未だ此の課に十分滿足の意を表する事が出來ない。

それはどういふ點であるかといふと、古事記の國家的意義を宣揚し、神典としての價値を賦與する事を差控へてゐる事である。始に情熱を缺くと云つたのも、これに連關があるのである。單に古事記を「尊い歴史であり、文學である」と云つてゐるが、それ以上に、宗教的道義的意義を認める事を全く缺除してゐる點が、此の課を物足らなく思はせる有力な原因である。もとより古事記の意義については、學者の間に、種々の說があり、又、古事記成立の由來についても、學者の解釋が一定してゐるといふわけではない。さういふ中にあつて、比較的穩當な、どこからもあまり行き過ぎを非難せられる事のないやうに意を用ひて、これを記すといふ所には、編纂者の並々ならぬ苦心も拂はれてゐる事であらう。併し、肇國の來由は、國體の本源に關する重大事で、それは既に國民的信念であり、此の點の資料は、日本書紀と並んで、最もまとまつた具體的なものとしては、古事記に求めるの他はないとすれば、古事記の意義につき、國家的定見があるべきはずである。さうして此の課の中には、さうした國家的定見の發表に、乏しいものを感じさせる所があるとすれば、われわれは、それを以て、信念と情熱の缺除に、その原因を求めるの他はないのである。

第二に、此の課の中には、具體性において缺ける所があるやうである。それは、源氏物語や萬葉集には、例歌や、その内容の具體的な例が呈示せられてゐるのに對し、此の課の中には、それが全く缺けてゐる事を意味してゐるのである。たゞ、その内容に關しては、「天の岩屋、八岐のをろち云々」とて、あげられた所があり、又、それは、讀本の他の卷において記された、古傳と照應して考へるべき事であらう。例へば、卷五の「天の岩屋」や「八岐のをろち」「少彦名のみこと」「天孫」

「二つの玉」或は卷六の「神武天皇」や「日本武尊」の課は、此の「古事記の話」の實例たるべきもので、それが意識せられてゐる事は、此の「古事記の話」にあげられてゐる內容の項目が、それらの課の題名とも、殆ど全部一致するものである事によつて見ても明かである。それにもかゝはらず、私は、此處に、なほ、古事記の具體的內容の例示を必要とすると考へるのである。何となれば、卷五・卷六に出てゐるものは、それが、三學年生に課されるのであるから、その幼なさに相應するだけの手ごゝろが加へてあつて、その意味では、それよりも智能の發達した六學年生に古事記そのものを具體的に知らせるものとしては、不十分たるを免れないのである。まして、それらの敍述は、どうかすれば、惡くすると、神話、或はお伽噺として、たゞ兒童に興味的な理解しか與へないおそれがあるのであるから、それよりも可成り程度の高い、此の課においては、國家的觀念の表出と伴つて、古事記の具體的な內容の理解へ導くやうな文例の呈示がほしかつたと思はれるのである。とにかく、「古事記の話」は、源氏物語や萬葉集の如き、文學的理解にとゞまらず、或は又、歷史の書といふにとゞまらず、又、上代人の國家觀念の表出といふだけではなく、永遠の書として、わが日本と共に永久に傳へられて、今日の國民的信念の涵養に必要な素地となる所以を、明かにする事が、此の課の最も根本的な主要課題であると思ひ、その點に、稍不滿な箇所の存する事を述べたのであるが、全體として、此の課の有益な指導が、兒童に重要な效果を與へるべき必要な要素を備へてゐる事は信じて疑はない所である。

萬葉集の教育的意義

萬葉集の中には、歌謠的口誦的の作品と、個人的文藝作品との二種が混在してをり、前者は全體の約三分の一にも及ぶほどに、なかなかその數が多いのである。さうして、前者は、文藝の故郷として、國民的合唱の歌として、かつは又、素朴とか明朗とか健康とかいふ上代の文學を特性づける基調になるものとして、甚だ重要な要素を持つものであるから、此の點の特徴は、萬葉集を、他の歌集から區別する重要なる點として忘れられてはならないのである。(但し、古今集などには、さういふ歌謠的性質の歌も相當出てゐるが、萬葉集とは比較にならない。)

小學讀本に出てゐる歌の中、「海行かば」の歌は、さういふ性質の作品で、單なる個人的作品と同一視する事の出來ぬ民族的共感がある。私どもとしては、此の種の歌をもう一二首あげて貰へばよいといふ心持もあるが、實は、その方面の作品には、異性の間の交情に關するものが甚だ多いので、さうした歌は、小學生の教材としては、もとより適當ではないから、此の一首をもつて代表させて、その點の深切な說明を忘れなければ、それでも結構であると思ふ。

次に、萬葉集の個人的作品について見ても、その作者には、專門的な歌人と、非專門的歌人との二つの區別があるやうで、此の點も、後の歌集が、殊に時代が下れば下るほど、專門歌人の色彩が濃厚となつて、その表現技巧、內容情趣、いづれも、歌人の專門家としての、特殊の修練から生じたと思はれる色彩が强いのであるが、萬葉集のある種の歌人には、さうした專門家的傾向を見得るとともに、又非專門家の作品も多く入つてゐる點に、萬葉集の特色がある。さうして、萬葉集が、ある一部の專門歌人達の集ではなく、讀本に述べてある如く、「上は　天皇の御製を始め奉り、當時の殆どあらゆる階級の人々の作」を集めてゐる所に、國民的歌集としての、本集の特色があるのであり、さういふ意味で、此の課の最初に出てゐる防人の歌は、本集の重要な特性の一部を示すものとして、是非揭げる必要のある歌である。此の兵士は、下野國の火長で、火長といふのは、兵士十人を一火とし、その長の事であるから、今日の軍隊で云へば、班長とか、分隊長とかに當るものであらう。それにしても、これらの兵士は、元來東國の農民であつて、それが防人に出で立つ事は、今日の兵士が應召する事と、さう大した相違がなかつたのであるから、かやうに考へると、此の歌

は、農民が應召出征する氣慨にも當るものを持つてゐるのである。

此の課の中に書いてない事で、重要な點は、萬葉集自身が、歴史的變遷を持つた和歌史的意義を持つものである事である。その古きは仁德天皇の皇后の御歌や雄略天皇の御製がある。それから集中の最も新しい作なる天平寶字三年正月一日の大伴家持の歌まで、三百六十年乃至二百八十年の時間的距離がある。併し、眞實の萬葉集的な古い歌は、此の課にも出された舒明天皇の御製であらう。これからが眞の萬葉時代と云へる。然らば、萬葉集の含む年時は、百三十年に短縮せられるわけであるが、此の期間に、和歌は急激な歴史的發展を遂げて遂には爛熟の域に到達してゐる。少くとも、舒明天皇、乃至、天智天皇時代(約四十年間)と、人麿の出た天武天皇、持統天皇、文武天皇時代(約三十年間)と、憶良、赤人の出た元明天皇、元正天皇時代、並びに、聖武天皇の天平時代の前半(約三十年間)と、及び、家持の出た天平時代の後半から、孝謙天皇、淳仁天皇時代(約三十年間)の四つの時期は、區別せられなければならないのである。さうして、そこに歌風の顯著な推移が認められ、家持の時代に至つては、既に古今風に甚だ近づいてゐるのである。

此の課で、作者の名を明かにしてゐる人麿、憶良、赤人などは、むしろ當時の專門歌人的な色彩を有する作家であるとすべく、しかもいづれも、眞に萬葉集的古歌風の發揮せられた萬葉歌史上第二期、第三期に出た人であり、小野老も亦第三期に屬する人であるが、作者名の明かに記されてゐない防人の兵士の歌は、實は第四期の作である。所が、此の期の代表的專門歌人家持の歌が、既に萬葉歌風を爛熟せしめ、古今風への過渡的傾向さへ示してゐるに對し、非專門歌人である此の兵士の作は、かくも萬葉的であり、國民的特色を持つ。もとより、家持の作にも、上記の「海行かば」の歌を挿入した作や、その他に國民的決意、武士的精神を示した作品も見え、防人の歌を集錄したのも、實は家持の功績であるが、一方では、人麿の充實した雄大や、憶良の苦悶や思索の深さから轉じて、赤人の清澄とも亦異なるものがあつた。同じ第四期の作でも、此の兩者の對照が意味を持つ。

萬葉集のかゝる和歌史的な處理をも、年時的間隔の明確な概念を伴つて、此の課を取扱ふ時に、忘れないやうにして貰ひたいと思ふ。

平安文學史概說

平安時代は、京都に奠都せられた延暦十三年（一四五四年）から頼朝が鎌倉幕府を建てた前年の建久二年（一八五一年）まで、約四百年間で、これを文學史の見地から四つの時期にわけるのが普通である。

第一期は、弘仁から貞觀、寛平といふ年號の時代まで、約百年間である。この時代の初は國文學が行はれず、漢文學が全盛であつた。嵯峨天皇の弘仁から淳和天皇の天長にかけて、凌雲集・文華秀麗集・經國集といふ漢詩漢文の勅撰集が相次いで出た。これが後に和歌の勅興するにいたり、和歌の勅撰集の出現する礎地を作つてゐる。又、この後の和歌には、漢詩漢文の題材や表現法が影響を與へて、上代の和歌の直情的なのに對し、理智的傾向を導く要素が、かくて養はれたのである。

弘仁、天長についで承和頃から、再び和歌が起つて來た。一時漢詩文に心醉する時代があつたとしても、それの反動として、再び自國の文學に立ち返つて、これが勃興するのは當然である。承和から貞觀、天慶にかけて在原業平、僧正遍照、小野小町らの歌人が出て和歌の歴史の上で、六歌仙時代といふ一時期を劃した。歌合もこの頃から次第に行はれるやうになり、又、伊勢物語のごとき、和歌の詞書から發展した歌物語も、この頃に現れたものではないかと思はれて、文學の興隆する勢を示してゐた。第一期は、平安時代の文學を盛んならしめるための準備時代、その溫床を調へてゐた時代だと云つてよい。

併し、業平のごときは、歌人として、情熱の奔放と、表現の駈馳の自在とをもつて、女流歌人の小町とともに、當代を代表する一流の歌人である。神樂催馬樂東遊風俗歌のごとき歌謠の勃興したのもこの時期であつた。

第二期は、延喜天暦時代と云はれて、この年號の時代を中心とする、前後約八十年間を含む。前の時代を承けて、平安時代的な和歌が完成せられ、所謂古今風の歌風の顯示せられた時代である。平安時代の文學の理念である、物のあはれの精神も、この時代に至つて、明瞭に認められる事となつた。それは野性的な熱情の奔出に任せるのではなくて、適當な理智的反省を加へる事により、著しく平明で且優美典雅な傾向を馴致（じゅんち）したものである。古今風と云はれる歌風はこの物のあはれの精

神を中心とする歌風であつた。

醍醐天皇の延喜五年に始めて和歌の勅撰集、古今集が紀貫之ら四人の歌人によつて撰ばれ、それより約五十年おくれて、村上天皇の天暦五年には源順ら梨壺の五人と云はれる歌人たちに、後撰集撰定の宣下があつた。この兩集によつて、古今風は確立したのである。それとともに、この兩集の撰者の中心人物であつた貫之や順が、一方では立派な學術的業績を示してゐることも注意せられなければならない。古今集の序文は、歌學、歌論の記述としても立派に、統一あり組織ある內容を持つものとして、後のこの方面の研究の規範となり、順は又倭名類聚抄といふ百科辭典的な性質の書を、始めて作つた。かういふ理智的な頭腦の人々によつて、國文學が指導せられたのが、古今集の歌風の方向を定めたし、又、平安時代の文學の性質をも限定して來たのである。

かやうにして、反省的心情が强くなり、日記文學の如きもやがて起るやうになつた。貫之の土佐日記が出でて日記文學の範を示したのも亦この時期である。物語文學も漸く起らうとしてゐた。竹取物語はこの時期の產物であらう。

そもそも、假名文字の普及を見るやうになつたことが、平安時代の文學を大いに盛んならしめた、最も有力な原因であつたが、この假名を用ひて文章を書くといふことは、婦女の業とせられ、男子はやはり漢字を用ひて漢文を書くことが普通に行はれてゐた。たゞ和歌と、その詞書とだけは例外であつた。ついで假名文字の普及により、漸く散文の方面も起つて來たが、これは多く婦人によつて書かれたのである。併し、假名の文章も、始めは男子によつて模範が與へられ、婦人がこれに習つて、遂にその文權を掌中に握るにいたつたもので、土佐日記も、貫之は女子が書いた文章としてこれを記してをり、竹取物語も漢文直譯風の文章で、恐らく男子が書いたものであらう。就中貫之のごときは、假名の文章の普及に力をつくした先覺者であつた。

第三期は、圓融天皇、花山天皇の御代から始まつて、後一條天皇の御代まで、一條天皇の御代を中心とする、約七十年間で、平安時代の文學の黃金時代である。

この時代には物語文學が大いに發達して殆どその中心となつてゐる。歌物語としては、伊勢物語の後を受けて、大和物語が出たが、それよりも、一般的な作り物語卽ち小說的作品が長足の進步を見せたのである。宇津保物語・落窪物語と相續いて出でた後に、源氏物語の最高峯がその偉大な姿を聳立させた。

源氏物語の現れた時代が、わが文學史の中でも、最も傑作とせられる作品の輩出した一條天皇の御代で、才媛が宮中に多く集へられてゐた。源氏物語より少し先立つて、清少納言は、隨筆文學として古今に獨歩の位置を占める枕草子を著してをり、源氏物語と時を同じくして、和泉式部日記が書かれ、又、源氏物語の著者も紫式部日記を殘してゐるのである。その他、赤染衛門や伊勢大輔や、すぐれた女流歌人が多かつたが、和泉式部の右に出る者はなかつた。情熱的な女性和泉式部は、天性の歌人であつた。これと隨筆の清少納言と物語の紫式部とが、それぞれの方面を代表する文豪であつた。

日記文學では既に早く、この時期の始、圓融天皇の御代に蜻蛉日記が出て、悲痛な女性の人生記錄を永遠に殘した自敍傳文學の最もすぐれた典型を、この作品は示してゐるのであつて、新しい日記文學の方向が此所に指示せられた。

見來たれば、女性が文學のあらゆる領域にわたつて活躍し、しかもそのすべての部面において當代の代表的傑作を出してゐる。假名の文學は、男子の逡巡してゐる間にこれを後に取り殘して完全に女子が完成させたのである。

一條天皇の御代には、古今、後撰とともに、三代集と呼ばれる拾遺集が出でたが、和歌はもう完全に、古今風を舊派化した保守的傾向の中に捉はれてゐて、生氣がなく、たゞその間に、和泉式部や、又、新派歌人の先驅者と云はれる曾根好忠が現れて、大いに氣を吐いてゐた。歌謠では、朗詠や今樣が行はれた。

第四期は、右の殘りの約百五十年を包括する。總體的に第三期の黃金時代の後を受けて、次第に文學の衰へて行つた時代であるとともに、一方では、次の時代の新しい文學をも成長させてゐた。物語文學は、狹衣物語、濱松中納言物語、夜半の寢覺、取りかへばや物語等が出でたが、多くは源氏物語の影響作品でなければ、末期的な官能と不自然な作爲に滿ちた作品であつた。たゞその間に、堤中納言物語の諸篇が、短篇小說としての新しい領域を開拓して、素晴らしい効果を收めた。

歷史文學の勃興は、この時期に文學の種類を增加したが、それとても、一條天皇の御代の文化を追慕回想する心持より生れ出でたものである。物語文學の模倣的傾向の强い榮華物語と、新しいスタイルを創始した大鏡とが、その代表作品で、就中、大鏡はすぐれた作品である。傳說文學の今昔物語も、この時期に出でて、鎌倉時代の文學の萠芽を早く示してゐる。

日記文學の更級日記も、蜻蛉日記に次ぐ佳作と云はれるが、蜻蛉日記ほどの突きつめたものが認められない。たゞ夢を描き憧憬の情を述べて、當代の一般の追憶的傾向と現象を同じうするものに過ぎない。濱松中納言物語や夜半の寢覺は、この日記の作者の作と云はれるが、女流では、この人のごときを代表的な作家として、漸く衰へ、代りに男性の作家が起つて來た。大鏡や今昔物語のごときも男性の手に出でたものであらう。

和歌の方面では、漸く新風が動き始めた。當代に出た後拾遺集に至つて、古今風から一轉しようとする傾向が認められ、金葉、詞花と續いて、その傾向は顯著となり、千載集に至つては、もう新古今風の基礎が築き上げられてゐたのである。金葉集の撰者の源俊頼や千載集の撰者の藤原俊成が、その傾向を進歩助長せしめた新派の歌人で、西行は悠々自適した自然の歌人として、獨特の地位を占めてゐた。その他、六條家の人々も活躍して、この時代の末は和歌が非常に盛んとなり、歌學、歌論も非常な發展を遂げた。

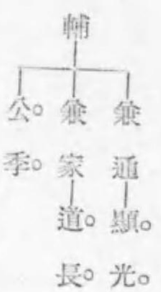
歌謠では雜藝が甚だ盛んとなつて、後白河天皇の御撰の梁塵祕抄は、當代流行の歌謠を集めさせられたものである。かくて次の時代を迎へる事となる。

源氏物語の日本的性格

一

源氏物語の主人公が、光源氏君であるといふ事が、此の作品の日本的性格を理解する上に最も大切な事である。

此の物語の書かれた、一條天皇寛弘初年の、左大臣は藤原道長、右大臣は藤原顯光、內大臣は藤原公季で、內閣の重臣は、いづれも藤原氏で固められてゐた。しかも、此の三人は、近親の間からにあるのであつて、



といふ關係になる。さうして、道長が自己の競爭者と認めた相手を、陰險な手段で斃つた事は、「大

鏡」の中にも、詳しく記されてゐる所、道長の兄、道隆の一家は、此の道長の野心の犠牲となつたのである。かやうにして、自派のみで固めた、寛弘初年に、道長の年齢は、四十前後の壮年、まさに働き盛りの年頃であつた。

これだけの背景を考へて、さういふ時代に、源氏物語が作り出された事を思ふ時、その主人公を光源氏君とした事が重要な意義を持つ事となるのである。

藤原氏が、政権を自己の掌中に握る爲め、藤原氏以外の者が、政治の重要な位置に昇つた時、悪辣な方法で、これを放逐した例は、早く、左大臣藤原時平の爲めに犠牲となつた右大臣菅原道眞があつた。右大臣藤原師尹の爲めに、同じ目にあつた左大臣源高明があつた。

一條天皇の初には、源雅信が左大臣であつたが、雅信の妻は藤原時平の女であり、雅信の女は道長の室として、その腹に上東門院彰子が生れて居られる。かやうに雅信は、藤原氏と密接な關係があつたから、左大臣の榮位を長く保つ事が出來たが、もしさうでなければ、いつかは、道眞や高明と同じ憂き目を見てゐた事であらう。

源氏と藤原氏との政治上の爭ひは、源氏物語の中にも、既に描かれてゐる所である。主人公の源氏君が、須磨明石へ流寓したのは、自己の過ちも、もとより大きい原因となつてゐるが、その他に、源氏君を保護されてゐた御父君桐壺帝の崩御により、源氏君を政治上の有力な地位から追はうとした右大臣の政治的な劃策も、有力な原因の一つである。さうして、源氏君の味方としては左大臣家があつて、左大臣家が藤原氏である事は、その一族に藤侍從、藤宰相の如き人物の出て來る事でも明かである。此の左大臣家と爭つて、光源氏君を陷れ、並びに左大臣家を失意に追ひ込む、右大臣家も亦、藤原氏であるかどうか明確でないが、種々の事情を考へて見ると、やはり藤原氏の一支族であつて、藤原氏の中でも、種々の勢力の對立抗爭があつた事は、歴史上の事實でもあるから、左大臣家、右大臣家ともに藤原氏であり、たま〳〵、その一方の勢力なる左大臣家と結んだが爲めに、源氏君は右大臣家の爲めに敵視せられ、遂に都を追はれる事にもなつたと解せられるのである。

かうした當時の貴族社會を念頭に置いて、此の物語を考へれば、道長を首班とする藤原氏の政權下の宮廷に於いて、敢へていふならば、大膽不敵にも、紫式部が、源氏君を主人公とする源氏物語を書いたといふ事に重要な意味が生じるのである。

源氏君は、當代貴族の理想的男子として登場し、その一生が描かれてゐる。當時、上層部に生活してゐた人々が、理想的人物として、ひそかに心の中に描き求めてゐたあこがれが、源氏君によつて滿たされたのである。もとより、此の理想的人物は、單に空想的な存在として、現實の生活や社會から遠く絶緣せられたやうな人間であつてはならない。現代的な人物として、身近い親しみを感じさせる、暖い血の通つた人間であつて、しかも十分に宮廷に生活する人々のあこがれを滿足させる、理想的人物でなければならない。さうであつて始めて、源氏物語が、當時の社會に大きい存在となる事が出來、非常な普及力を持つやうにもなつたのである。

此の理想的人物は、藤原氏の人ではなかつた。少くとも、左大臣家、右大臣家の出ではなかつた。左大臣家の頭中將の如き、光源氏君の相手役として活躍するが、しかも、これは種々の點で、理想的人物からは遠いものとして描かれてゐる。

理想的人物は、皇族であらせられる事を必要としたのである。桐壺帝の御子であつて、はじめて理想的人物である資格を有したのである。しかも、その方が、皇族の御身分のまゝでは、やはり臣下よりは遠い所に居られて、作品の中の、實際の活躍上にも不便であり、又、當時の實際の社會生活においても、それは御位置を狹める事となるから「無品親王の外戚の寄なきにては漂はさじ」といふ事情で、臣下に降られる事となつた。かくて、源氏君となり、貴い御血筋をひかれるとともに、國民の一人であられる所に、その理想的人物の意義を認め、その資格を認めようとしたのである。此所に、作者の理想が求められるべきである。それは、天兒屋根命以來、臣下としての位置の定められてゐた藤原氏の人であつてはならなかつた。たとへ當代の政權を握つて、權勢上の實力を持つてゐたからと云つても、藤原氏の中に、これが求められるべきではなかつた。

初に述べたやうな、藤原氏、殊に道長の支配下にある當時の社會的背景を考へて、此の紫式部の理想に思ひを致す時、作者、並に、此の作者によつて著はされた源氏物語の日本的性格は明白となるであらう。それは、無言の、藤原氏の重壓に對する抗議でもあつたらう。もとより、それは、源氏君と、藤原氏なる左大臣家とを結び合せる事により、巧妙に、藤原氏から睨まれる事から、身を外してはゐるが、作者の求める所は、確かにこれを考へる事が出來る。

同じ事は、登場人物の女性の側についても云ふ事が出來る。源氏君に對する女主人公としては、紫上があげられる。これ又、當代の婦人の理想的人物として、源氏君に配せられ、その寵愛を一身

に集める事となつて、一生伉儷の交りが變らなかつた。此の紫上の素姓はどうかといふと、やはり皇族の出である。先帝の御孫、式部卿宮の御子といふ事になつてゐる。さうして、源氏君の北の方葵上の如きは、左大臣家卽ち藤原氏の人であつたが、缺點のある女性として、源氏君にも氣に入らない人のやうに描かれてゐる。

かやうに、此の物語の主人公、女主人公ともに、藤原氏以外の人で、しかも貴い御血筋を引かれてゐるといふ所に、理想的人物の資格が決定せられてゐるのであつて、これが、日本人の理想でもあつた。此の作者が、執拗な藤原道長の誘惑を斥けて、宮中に寡居する身の潔白を保ち、情愛の純一を希求したのも、源氏物語のかういふ理想に一致するものを見る。實に、源氏物語、紫式部日記を通じて、作者の日本的性格が、かゝる所に認められるべきである。

たゞ、右のやうな理解を通して、源氏物語の後半なる、宇治十帖を見る時、そこには異なる相貌が現はされてゐるやうに思はれる。

宇治十帖の主人公は薫君で、相手役として匂宮がある。此の薫君は、表面源氏君の子といふ事になつてゐるが、實は藤原氏なる柏木衞門督の子である。さうして、匂宮の方が、皇族であらせられるとともに、その御母は、源氏君の女となつてゐる。宇治十帖においては、匂宮よりも、薫君の方を、理想的人物とは云はれないまでも、人格のすぐれた立派な人物として描いてゐるが、此の兩者の對比は、源氏物語の本篇における理解と逆になつてゐるのである。此の點から云へば、宇治十帖は、紫式部と別人の筆になつたものといふことも出來るかも知れない。たゞ、源氏物語の本篇が、理想的人物の一生を描くといふ中心構想であつたのに對して、宇治十帖の目的は、全くさういふ事とは別の所にあつた。從つて、主人公の素姓や身分といふやうな事は、宇治十帖においては、本篇におけるほどの重要性を持たず、それは別の解釋を許す事の出來るものであつた。かう考へれば、宇治十帖における此の點の問題は、さほど困難な事もないかと思はれるのである。

二

源氏物語の日本的性格は、主人公源氏君の身分とともに、その眞實なる性格を貫いて、これが妻現せられてゐる。源氏君を以て、浮薄な放蕩兒、漁色漢の如く解してゐるものがあるなら、それは源氏物語を理解したものではなく、未だ源氏物語を眞に讀解してゐない事を示すものである。

なるほど、源氏物語の初の方だけを讀むものには、或はさう誤解せられる所もあるであらう。併

し、源氏物語全體としては、全くさういふ所に目的があるのではない。それは若き日の源氏君の生活の一面を寫したに過ぎないのであつて、平安時代の貴族達、殊に上流の貴公子として、普通の事と解されてゐた生活を、作者は、源氏君の若い時代の描寫に取り上げただけである。然も、かゝる生活を描いた理由として、少くとも作者には次の二つの大きい問題があつたはずである。

第一に、若い源氏君と交渉のあつた女性を、源氏君がいつまでも見捨てる事なく、その世話をする事によつて、各の身の振方を定め、それ〴〵の生活の安定とともに、心身に不平逢和のないやうに計つてやつてゐる。さうして、中年以後の源氏君は、若い時代の夢を追ふ無謀な生活から生じた女性との關係以外には殆ど全く、婦人關係がなく、たゞ、若い時から交渉のあつた婦人だけを愛し、その世話を見る事が、源氏君の樂しみであるやうであつた。此所に、源氏君が眞實性に富んだ男性である事を明かにするとともに、若き日の戯れを、單に一時の戯れ、浮氣として過してしまふ事の出來ない、源氏君の責任感を描き出して、さういふ一般の男性と異なる源氏君の誠實な資性の中に、理想的な男性を認めようとしてゐる。源氏君が當時の人々に親しみ易い感じを與へる事が出來るのも、此の若き日の生活があるためであり、しかも、源氏君が信頼の出來る人物として、理想的男性たり得るのも、中年以後の源氏君の心情や生活が、若い時代のそれと對照せられる所にある。

なき夕顔と頭中將との間に生れた玉鬘が、美しく成長したのを、源氏君は引き取つて、夕顔の忘れ形身として愛するとともに、玉鬘の中に夕顔の面影を認めた源氏君は、此の美しい少女を人のものとする事に、一抹の寂寥を感じたが、しかも、養ひ親としての埒外に踏み出さなかつたのが、三十六歳の時の源氏君であつた。六條御息所の御女に對しても、源氏君は同じ情を感じるが、やはり宮中に差出して、潔らかに、その世話をするのである。かうした、所謂酢いも甘いも嚙みわけた源氏君の中年以後の圓熟した人間性とその生活を、しかも、それは婦人關係においても、殆ど何の非難をする點も見られないほどに謹直となつたその生活を考へて見る事なしに、此の作品を浮薄なものとする批評は、全く源氏物語を知らざるものと云つてよい。

源氏君が若い女三宮との結婚を、固く斷つたのも、愛する紫上とのひそやかな併し暖い家庭生活を破らない爲めであつて、それは遂に源氏君の思ふ通りにならず、その晩年を不幸なものとするが、とにかく、さういふ所にも現された源氏君の質實な性格を思ふべきである。

第二には、一部の大事と云はれる源氏君の行爲についてである。もし、それが何らの反省もなく取り扱はれてゐるなら、此の作品は不道德な物語として指彈せられなければならない。併し、源氏君が勢力を失墜し、須磨明石に流寓する寂しい生活は、朧月夜内侍との事件から齎らされた外面的懲罰である。しかも、かゝる外面的な苦痛は、まだ淩ぐ事が出來る。より一層源氏君を苦しめたものは、良心の苛責であり、眼に見えざる業罰の笞である。かゝる苦痛は、その原因が苦だしければ甚だしいほど、その度合は一層まさるものである。それで、作者は、最も重大な過失を、若い源氏君が、自省し切れない一時的な興奮狀態のもとに犯すことによつて、源氏君の一生涯に附き纏ふ暗い影を描かうとしたのである。此の暗い影は、源氏君が榮華と顯貴を極めれば極めるほど、それと對照的に濃厚となるのである。此の源氏君の良心の苛責と暗影とによつて齎される苦惱が、源氏君の中年以後の生活を、表面上華やかなるが如くにして、實は寂しいものとしてゐる。さうして、遂には女三宮の過失によつて、源氏君は拭ふ事の出來ない運命的な恥辱を蒙り、見えざる復讐の宿命を負はされるのである。此の源氏物語の構想が與へる命題に、作者の意圖を知らなければならない。さうして、此處にも亦、此の作品を貫く、眞面目な苦惱が認められる。

かくて、かゝる一見浮藻、不道德に見える事がらが、實は、作者の誠實を示す一つの階段に過ぎないのであつて、さういふ入口を通して、此の物語は、奥深く、眞實な人間性を描き出してゐるのである。

三

大和魂なる語の最も古く見えるものは、源氏物語乙女の卷である。尤も、それより以前に、菅原道眞の著と云はれる菅家遺誡にも、和魂漢才といふ語が見えてゐるが、此の書は僞書(少くともこの語の見える箇條は僞作)と云はれてゐるから、源氏物語の用例がその最も古きものの一つである。

勿論、大和魂といふ語の意味も時代によつて變化があつて、平安時代の概念と、後代におけるそれとは必ずしも同一ではない。當時の大和魂といふのは大和心といふのと同樣の意味で、日本人としての心の働き、思慮分別、卽ち日本的精神をいふのであつて、それは漢才と連ね云はれる場合が多い。外國の學問を學ぶとともに、それを、日本的精神において消化する事を意味してゐるのである。後に、此の語は日本人たる性格を代表する勇猛果敢の精神を意味する語となつたが、源氏物語の時代では、もつと廣く一般的な精神として用ひられてゐる。

此の大和魂なる語の用ひられてゐる源氏物語の乙女の卷の、その箇所は、作者の教育上の意見を、源氏君の言葉を通して、吐露させたものとして古來名高い所であり、且、それ故に、重要な意味を有する箇所である。

貴顯の源氏君の子息であるから、夕霧は、早く四位にも敍され、高い官職にも就くべきであつた。周圍の人々は、勿論それを期待してゐたが、併し、父の源氏君の考は違つてゐた。夕霧を、身分の低い者と一しよに、大學に入れて、同樣の教育を施し、その位も、六位といふ低い位を與へる事によつて、一般の人と同じ取扱ひをし、父の顯職によらず、一個の人間として、これを鍛へ上げようとしたのである。かくてこそ、生活上の實力がつく事も、源氏君はよく知つてゐた。さうして、一般の貴族の子弟が、遊び戯れながら、父のおかげで、思ひのまゝの官爵に昇進するが、實は世人は、さういふ人々に對して、表面追從しながら、心中では輕蔑してゐる事多きを說き、學問こそは人間を厲く根柢たるべきを述べて、此の根柢の上に立つ時、はじめて大和魂も發揮せられる事を斷じてゐるのである。

此の教育論を通して、作者は學問的鍛錬の道を示してゐる。今日から見ればまだ甚だ生ぬるい此の意見も、當時の貴族社會の實狀に照す時、實に進步的な卓見と云はなければならないのである。

かくて、夕霧は、初め、その地位が低かつた爲めに、藤原氏の人々から侮辱せられ、雲井雁との戀も、その父の頭中將が、夕霧の地位の低い事を嫌つて邪魔をする爲めに、幼馴染の二人は生木を裂かれる悲しみに遭遇する。これらを通して、作者の人間的な鍛錬の理想が、作中に現されてゐる事を理解すべきで、そこに、此の作品の日本的性格が存在するのである。しかも、それが源氏君の意見とせられてゐる所にも、理想的人物としての源氏君の性格に、日本的な素質の與へられてゐる事を認めなければならない。

日本的性格としては、上記の、皇室中心、誠實心、鍛錬道の他、優美（柔弱とは違ふ）の一面があつて、これは源氏物語で縱橫に表現せられてゐる日本的性格である。日本人の持つ優美な心情、生活、日本人の造る優美な社會は、源氏物語の全體に溢れてゐる重要な性質であるが、今は敢へて、それについてのくだ〳〵しい說明を必要としないであらう。

源氏物語の價値

源氏物語は果して頽廢文學であらうか。

なるほど、源氏物語の一部分を讀めば、さう受け取られる所もある。併し、一部分で全體を推すのは、もとより誤つてをり、又、任意の一部分を取り上げる時は、全體の本旨とは、全く反對の特色趣旨にさへ、解釋出來るやうな箇所を掲げる事も不可能ではない。さういふ事を以てしては、源氏物語の本質を理解する事は決して出來ないであらう。或は又、源氏物語が女性的であり、全體にめゝしい情調の漂うてゐるやうな點をさして、頽廢文學といふのであらうか。男性的で雄壯なものが健全であり、頽廢的ではないといふのなら、それに反對するものを、不健全、頽廢と稱する事も出來よう。だが併し、源氏物語は、決してさういふ意味の不健全な頽廢文學でもない。

一體、頽廢文學とはどういふものをさして稱するのであらうか。その作品が汚濁に滿ち、誠實さに缺けて、これを讀んだが爲めに人間の品位を傷つけ、その性情を墮落せしめるやうなものであるなら、それこそは眞實の頽廢文學といふ事も出來るであらう。源氏物語は、果して、さういふ意味の頽廢文學であらうか。

私は、源氏物語をもつて、眞實に貫かれた作品であると考へてゐる。源氏物語の主人公は、「まことと」の精神に溢れた人物である。それは、源氏君が一度接した女性に對しては、あくまでも眞實を盡くすばかりでなく、その子供に對しても、やはり變らぬ親切をもつて世話をするやうな所にも、見られるのである。源氏君は單なる遊蕩兒ではない。

併し、更により以上大切な事は、源氏物語の作者は、あの大作を通じて、人間性の成長を示さうとしてゐる事である。源氏君は最も理想的な人間として描かれてゐる。併し、その理想的といふのは、人間性を超越した、神性に近いものとして、これを描出しようといふのではない。一個の人間が、種々の試練にあひ、多くの惱み苦しみを經驗しながら、しかも、喜び樂しみにも奢らずして、次第に、人生の體驗を豐富に加へ、人間性の完成に近づいて行く過程を描いたものが此の作品である。種々の誘惑も、所謂一部の大事と稱される物の紛れも、此の人生途上における、最も大切な試練の一つであつたのである。

更に、浮薄な人物の點出は、これに對照される人物の質實さを一層明かに浮彫にする爲めの、手段であつたといふ事も出來る。その浮薄な人物の一人であると思はれる匂宮にしても、宇治の中君に對する愛情を思へば、やはり、眞實の情愛を失つた人ではなかつた。此の愛によつて繋がれる人生を描かうとするのが、源氏物語の眞實の意義であると考へてゐる。かやうにして、作者は、作中のすべての人物に暖い愛情を注ぎ、醜い婦人も、六條御息所のやうな物の怪となつて現れる女性に對しても、作者は、決して嘲笑の眼を以て見、或は憎しみの感情をもつてこれを取扱つてゐるのではない。かくて、此の物語を通じて、しみ〴〵と人生の寂しさと、それを慰めてくれる暖い愛情を感じる事が出來る。

かういふ作品がどうして、讀者を墮落させるやうな頽廢文學であらうか。讀者は、此の物語を讀む時、切實に「まごゝろ」の尊さを感じるであらう。人生の永遠の寂しさを感じるであらう。併し又、それを救つてくれる愛の手をも、その中に認める事が出來るであらう。かくして、讀者の心は清められ、高められ、さうして深められる。

須磨の卷にしても、あそこの一部分を取れば、めゝしく泣きくづほれてゐる源氏君の姿に、卑屈な頽廢しか感じられない事もあるであらう。そこには失望から立ち上る何らの發展的氣慨が存しない事を指摘する人もあるであらう。併し、靜かに悲しむ源氏君は友人の頭中將の訪れにあつては、泣きみ笑ひみ快談しては、

雲近く飛びかふたづも空に見よ我は春日のくもりなき身ぞ

といふ力强い歌を云ひ放つてゐる源氏君であつた。發展的でない、積極的でないといふやうな概念的な考へでのみ、源氏物語は決して律しられるべき作品ではないのである。此の物語の基調となつてゐる、悲哀、憂苦を通しての作者の愛に觸れる時、その眞實の價値を、はつきりと讀み取る事が出來るであらう。さうして、此所に描き出された作者のさういふ人生觀こそは、われ〳〵に十分生きがひを感じさせるものであつて、これにより、讀者は人生の眞實の相に打たれて大いなる驚きを感じるであらうとともに、これにより、その歩み行くべき道をも、自から反省せしめられるに違ひない。此の作品は、これを讀む事によつて、虛無、絶望、墮落の中に、頽廢、沈淪せしめて行くやうなものでは勿論ないが、併し又、他の作品でも、讀者に救はれがたい强い虛無の感を起させ、それによつて、眞實の生き方を考へさせるやうなものであつたなら、その作品は、それだけでも十分

價値あるものとする事が出來る。眞實をもつて、作者が人生に對してゐるか否かが、最も重要な點であるが、源氏物語は、此の點において、暖い愛に生きる「まごゝろ」を基調としてゐる事は勿論であつて、少しも興味的な所のない（作品の構成上の技巧は別として）、作者の誠實な態度が、此の作品を、最も價値あらしめてゐる所以である。さういふ點が、他の平安時代の作品、殊に、取りかへばや物語の如きものと、眞實の價値を分つ所以でもある。

橋純一氏は、その精緻な研究態度と、誠實な日本的主張とにおいて、私の最も尊敬してゐる學者の一人である。その主宰して居られる雜誌に、「源氏物語は日本人の文化的素質が、世界のいづれの民族に比しても劣るものでないことを證するに足る文藝作品たることはたしかであらう。しかし、やむを得ぬことながら、それは決して國民的作品ではなくして、階級的作品である。しかも貴族文化の衰亡が明日に迫つてゐる事を露呈した作品である。源氏物語は文學として美であるかもしれない。しかし人生批評として不健全であることはたしかである。そこには全國民として全人間として人生を諦觀する眼は見られない。衰亡の豫感にをのゝく宮廷貴族の嗟嘆が聽かれるのみと言つても過言ではあるまい。」（國語解釋第二十九號）と記してをられる。さうして、此の見地から源氏物語をわが國語教育界から排擊しようとしてをられる。（氏の意見は文藝春秋にも掲載せられた事がある）。

橋氏は、源氏物語が、一應すぐれた作品である事を認められた上で、「人生批評として不健全である」と言つてをられる。私の考へは以上に記した如くで、此の點の詳しい所論は、今は記す餘裕がないが、私の結論は、源氏物語に對して誤らざる事を確信してゐる。たゞ、源氏物語の眞實の理解は、その全面的な解讀による他は徹底しやうがないのであるから、此の意味で、此の物語の一部分が教科書などに登載せられ、不十分なる教師の解明をもつて生徒に臨む時は、誤解を生じる事もあるであらう。併し、それは教師の教養如何による事が多大なのであつて、源氏物語が「人生批評として不健全」な事とは別の性質のものである。さうして、橋氏の意見は、私に言はせると、源氏物語の全面的な否定であるやうに思はれる。たとへ、源氏物語の美を許容せられるとしても、さういふ不健全な美なら、極めて低級なもので、「日本人の文化的素質が、世界のいづれの民族に比しても劣るものでないことを證するに足る文藝作品」でも何でもないのである。

橋氏は「それは決して國民的作品ではなくして、階級的作品である」と言はれる。私は、淺薄なる歴史主義的論者が、頽廢貴族文化の産物であるから、源氏物語は、頽廢文學であるといふやうな

考へ方をしてゐるのに接した事がある。併し、貴族時代が頽廢してゐるといふ事と、それ故に源氏物語も頽廢してゐるといふ事は、何の必然的な因果關係もない事なのである。頽廢貴族の所産である作品に、頽廢的な傾向のものもある事であらうが、又、それとは反對に頽廢に反撥する作品もある事であらう。又、それらの頽廢に煩はされない作品もある事であらう。貴族時代の所産といふ事は、その時代の作品の、あるものの性質を考へる際には役立つても、全部的規定とは決してならないのである。私は、以上のやうな單純な考へ方をするものがあるなら、それをもつて、歴史主義の公式的機械論となすのである。

橘氏は、源氏物語をもつて、階級的作品であつて、國民的作品ではないと云はれる。なるほどそれは、貴族階級の作品であるかも知れない。又、ある時代では、貴族階級だけが讀者であつたかも知れない。併し、その後の源氏物語の歴史は、あらゆる階層にわたつて發展してをり、現代では、源氏物語は、立派に、全國民の持つ國民文學なのである。さうして、さういふ國民文學にまで成長した歴史の跡を顧みる時に、此の作品が、どんなに眞實の價値を、生れながらにして備へてゐたかが、明かに觀取せられるであらう。

それに附け加へるに、これだけの雄大な長篇を完成せしめた、作者の積極的意慾や、作品の中に滿ち滿ちてゐる愛情を通して輝く光明等を考へれば、此の作品が、後代の文化に多大の影響を與へた國民文學たる所以は一層明かとなる。貴族階級の所産とか町人階級の所産とかいふ事は、その作品の價値の評價に、何らの關係も有しないものである事を、知られたいと思ふ。

源氏物語と小學讀本

昭和十三年の新學期から用ひられた小學國語讀本の卷十一には、古事記などの章とともに、「源氏物語」といふ章が、第四課に置かれてゐる。此の新定の國語讀本には、枕草子や萬葉集などの古典が教材として多く取られてゐる所に一つの特色があつて、これは教師の側にも學者の側にも賛成の聲が甚だ多かつた。作家としても、かういふ文學的教材の採用に對して勿論反對はなかつたが、たゞ編輯の實際に作家を關與させるべきで、さういふ用意の拂はれてない所に不滿の聲が洩らされてゐるに過ぎなかつた。

さて源氏物語は、かやうにして、小學讀本に登場する事となつたが、俄然これには反對の運動が持ち上つた。その理由は、源氏物語自身の內容が小學讀本の教材とするにふさはしくないといふ點にあつたが、更にそれは、現在の國體觀念に反するものがあるといふ點において、政治問題にも連關を持つてゐた。むしろ、かゝる政治的意義を背景において、攻擊の矢が小學讀本に向けられたのであると云つてもよい。

それが雜誌等で論じられてゐる間はまだよかつたが、いよいよ實行運動に移る事となつて、議會の問題にでもなると甚だ困るのである。それはひとり文部當事者の間に當面の責任者を出すといふだけですまされる事ではなく、惡くすると、わが國の誇るべき世界的古典源氏物語を、わが國自身が否定し、抹殺しなければならないやうな悲しむべき運命に到達する。そんな事があつては、世界の物笑ひになるだけである。これはどうにかしなければならない。

そこで仲裁者が入つて、兩者の間に一つの妥協案がまとまつた。かくして、その妥協案の實現されたものが、昭和十四年度から用ひられてゐる修正版なのである。

それでは源氏物語のどういふ點が修正されてゐるかといふと、大體此の課ではまづ初に概論的に、源氏物語の價値について記し、次に、源氏物語の內容から二ヶ所を拔いて意譯的に話が記してあるのだが、昭和十三年版では、若紫の卷から、犬君が雀を逃がしたのを紫上が怒る場面（古典の歷史の平安時代、物語文學の項、源氏物語の引例參照）と、末摘花の卷から、源氏君が自分の鼻の先に紅をつけて、それが取れないと云つて紫上をからかふ場面と二箇所、いづれも幼い紫上の無邪

氣な生活を描いてゐるのは、小學讀本として、當然の處置であらう。

所が、昭和十四年版では、此の第二の末摘花の卷からの部分を除き、その代りに、紅葉賀の卷から取つた、紫上が元日の朝人形を相手にして遊んでゐる場面が書かれてゐる。それはつまり、前の末摘花の卷の場面は、源氏君が末摘花の所から歸つて來ての戯れで、男女の交情を暗示し、殊に鼻の頭に紅をつけたり拭いたりして、源氏君が紫上とふざけてゐるのは、一種の戀愛遊戯で、甚だいやらしい。こんな不健全な場面は特に除くべきだといふ、反對論者の意見を、此所だけ認めて、漸く妥協する事となつたからである。それでは、昭和十四年版に出てゐる新しい部分は、どうかといふと、前のと同じ意味でやはり反對論者の顰蹙を買ひさうな點があるのだが、今度はさういふ反對意見も出てゐない。此の新しく入れられた部分では、紫上が源氏君に「豆まきをするつて、此のお人形さんを犬君がこはしました。私がつくろつたのよ、おにいさん」などと云ひ、「さう〳〵。此のおにいさんにもよい着物を着せて上げなければ」と云つて人形に着物を着せたりするが、勿論それは源氏君に當てた人形なのであつて、前の末摘花の卷のが戀愛遊戯なら、これも立派に戀愛の潜在が意識されるのである。(尤も、色眼鏡で見て、わざわざこれを戀愛的表現として小學生に説明する必要などは勿論ないが、かりに反對論者の意見を用ひると、かういふ事になる)。

實をいふと、妙な意見の出ない方が、私などとしても、大變結構だと思つてゐるが、併し、昭和十三年版より昭和十四年版で取り換へたものの方が改善でなく、むしろ改惡であるとしたなら、これは悲しむべき結果を見た事になる。さうして、私をして云はせるなら、疑もなくそれは改惡なのだ。反對論者の横鎗の爲めに、低劣なものに代つてゐるのは、何とも情ない事である。「おにいさん」といふ言葉は、前の版には一つも使つてないが、此の新しい版に出て來る紫上の言葉の「おにいさん」は媚を含んでゐて、ある種の女性の使ふそれを思ひ出させる。

附記　以上の初等教育に觸れた文章では、小學讀本とか兒童とかいふ言葉を用ひたが、今日では國民學校の讀本であり、又、少國民といふ語を用ひなければいけないはずである。併し、これらの文章は少し以前に書いたもので、殊に、小學讀本は今日もなほ使はれてゐる關係上、それらの用語も元のまゝにしておいて、あへて改めない事にした。讀者はこれを諒とせられたい。

曾我物語と復讐精神

一

復讐精神といふことと道德との關係、これは、私の以前から考へてゐることであり、又今日あらためて考へて見なければならぬ問題である。復讐は、武士道においては必ず行はなければならぬ一つの實踐道德であつた。單に武士道ばかりではなくて、町人の間でも、所謂町奴の俠客道などでは、やはり復讐をその實踐道德の一つとしてゐたのである。總じて云へば、封建道德として、それが存してゐたのであつて、封建時代の道德として復讐精神があつたと云はれるであらう。

ところが、明治時代以後、すべての封建時代の習慣が打破せられたとき、封建道德も亦その桎梏から解放せられることとなり、復讐精神も、封建時代の陋習として斥けられることとなつた。つまり舊時代の道德も、新しい時代の道德ではあり得なくなつた。かくて、舊時代の復讐、より適切に云へば敵討なるものも、道德として存在しないやうになつたのみではなく、むしろ不道德とさへ考

へられ、取り扱はれるやうになつた。

尤も、外國でも、案外に、封建時代の習慣を今日の所謂文明國が繼續してゐるものもあるのであつて、その著しい例には決鬪が今も行はれてゐることがあげられる。決鬪は罪惡ではなく、その結果は、必ずしも法律上の罪人とはならない。勝負ごとをも殆んど公然と認めてゐる歐米などとは違つて、物ごとに潔癖なわが國のことであるから、外國の法律に準據して、勝負ごとを强壓するやうになつても、いい加減では放任せず、今日では、大方あとを絶つやうになつたが、そのごとく敵討の方も全く世には認められなくなつた。つまり、封建時代と今日では、道德の考へ方や解釋にも全く違つたものが生じて來たので、敵討の方もこれを私鬪として禁壓せられることになつたのである。

併し、又一方では、さうも云つてしまはれないものがあることも、私は感じてゐる。復讐を單なる私鬪として、斥けてしまふことの出來ない性質のものが、封建時代の敵討にはあつた。そのことはあらためて考へて見なければならぬことである。恰度西洋の決鬪でも立會人があり、事がらを終始見まもつて、結果を判斷するものが必要とせられ、それのないもの、さういふ手續をふまないも

のは私闘であるが、決して決闘そのものは、純然たる私闘と見なさない公的の性質も具へてゐるものがあつた。つまり、それは傳統的習俗と近代的法治精神との重なりあつた一つの慣行として默認せられてゐる有樣であるが、わが國の敵討のごときも決して私闘として片づけられる性質のものではなかつた。武士にあつては藩主の公然の許可を得て、敵討に出で、敵討の場所においては又、役人の臨場のもとに行はれるのである。かくて、公の看視のもとに敵討は行はれたものであつて、その結果の判定は一に衆人の判斷の上にかかつてゐる。國家の法律のもとに行はれる裁判であつても、必ずしもすべてが公正であるとは云へず、そこには暗い蔭のさす場面もあることがある。敵討によつて代表せられる封建時代の復讐精神は、事の正邪善惡、是非の判斷を、むしろ公衆に訴へようとする意味も含まれてゐたのであつて、單に私憤を晴らすといふ性質のものとは、やゝ異なる心持があつたのではなからうかと思はれる。それゆゑ、敵討の中でも、公衆を感動させたものは、やがて世に廣く傳へられ、後に語りつがれて、その名を長くとどめるといふことにもなつたのであつて、そのやうに社會に傳播した敵討は、どこかに世人の心を打つところを持つてゐたに違ひない。それが取りも直さず公衆の判決に俟つ點であつて、つまり、敵討は、最も廣い社會の陪審裁判にかけられて判決せられた結果を持つものであつた。

たゞ一つ、これは敵討の根本の缺點ではないかと思ふ點、それは西洋の決闘などにも認められて、封建時代共通の弊害ではないかと思はれることであるが、敵討では勝つたものが正しいと認められる思想、少くとも返り討を認めてゐることが、力を卽ち正義としてゐるらしい點をあげなければならない。併しこれとても、さういふ强者の立場は、種々の事情や態度や行動から判斷して、社會の指彈をも、反對に支持をも受けることが可能なのであつて、つまり、敵討は、世に隱れてひそかに處置せられる性質のものではなく、公衆の面前で決行せられ、その結果はひとへに社會の判定に俟つといふところに意義があるのであつて、行爲そのものは力をもつて事を決する、卽ち强者が正しいといふ思想のやうに考へられても、結果から見れば、やはりさうではなく、正義の觀念を公衆の正しい判斷に訴へてゐたのである。

二

敵討の意義を、このやうに考へて、さて、曾我物語は、どういふ復讐精神を持つものであらうか。

昔から、曾我兄弟と伊賀上野の荒木又右衛門と、赤穂義士の三復讐事件を、三大敵討と云つてゐる。尤も、荒木又右衛門の場合は助太刀であつて、復讐の當事者ではないが、これらを三大敵討といふ理由は、それらの事件が、身分の高い者に關係し多勢の關係者を擁した華やかな背景を持つ復讐であつたからであらう。殊に、曾我兄弟と赤穂義士が世に喧傳せられてゐるが、時代の上では、曾我兄弟のそれが飛び離れて古いのである。さうして、赤穂義士が主君の復讐といふ點で多分に正義的な感じを與へるのに對し、曾我兄弟の方は、公正に見て、甚だ私情に似たものがその中に横たはつてゐる。

曾我物語によつて、この復讐事件の原因を考へて見ると、曾我兄弟の父の死は、必ずしも、祐經の側から、不當な處置をとられたものではないといふことが明かである。工藤祐隆は、男子をあまた持つてゐたが、皆早世したので嫡孫を立てて次男とし、河津の地を讓つて、河津次郎祐親と稱した。又、工藤祐隆が、ひそかに通つてゐた繼娘が男子を生んだので、これを嫡子として伊東の地を讓り、工藤祐繼と稱した。この嫡子と嫡孫の爭ひが、やがて曾我兄弟の復讐事件の遠因となるのであるが、嫡孫の河津祐親が、嫡子の工藤祐繼の所領を奪はうと企てたことが、工藤祐繼の子祐經をして、祐親の子祐重を討たしめる原因となるのである。それゆゑ、曾我兄弟の祖父に當る祐親の、さうした所業を、曾我物語では「これ誠に神慮にもそむき、子孫も絶えぬべき惡事なるをや。たとへ他人なりと云ふとも、親養じて讓る上は違亂の義あるべからず。ましてこれは寂心（祐隆のこと）内々ままむすめのもとに通ひてまうけたる子なり、まことには兄なり。讓りたる上爭ふこと無益のよし、よそよそにも申しあひけり」と評してゐるやうに、祐親の行爲は理義を缺くものであつた。祐繼の死は、祐親の呪詛によるものと記され、祐繼の死後、その子の祐經が未だ幼少であつたのを理由として、叔父に當る祐親が、「その土地をあづかつて支配するやうになつた。祐經の妻は、祐親が心あつて、その娘萬劫御前をめあはせたものであつたが、後祐經が、自分に屬する所領を、叔父祐親が渡さないので怒り、祐親を討たうとさへ企てたので、祐親も祐經を長く伊豆の地へ入れないやうに取り計らつて、かつその妻、即ち自分の娘を離緣させ、他へ嫁さしめてゐるのである。祐親のために、自分の所領を横領せられて、遂には、全く收入の道を絶たれた上、妻まで奪はれた工藤祐經の憤激は當然であらう。遂に、祐經は祐親を討たうとして、誤まつて、その子祐重を殺すこととなるのであるが、その顚末は詳しく、曾我物語に記されてゐる。わが子を殺された父祐親の

悲歎は、まことに見る眼も哀れなほどで、このことは、却つて、祐親に對する復讐としては、豫期しない効果を持つものであつたと、いふことも出來るであらう。

併し、祐重自身は、思はぬ災害にあつて、云はば父の身代りに立つたやうなものであつた。ましてて、この祐重の子なる幼い曾我兄弟にとつては、父の死は、すべての事情を離れて、悲痛極まりない事實であるに相違なかつた。その後、源頼朝の時代となつて、祐親は頼朝の伊豆に流寓してゐた時、これを罪人として、冷遇したために、祐親の子孫は頼朝から睨まれて、大いに困厄することになつたが、反對に工藤の方は用ひられて、祐親の所領も工藤の方に讓られ、兩者の位置は顚倒して、祐經の方が得意の時代を迎へ、曾我兄弟は甚だ窮乏の生活を送ることとなつたのである。

曾我兄弟に對する同情は、兄弟が終始困苦窮乏の生活の中にあつて、復讐精神を貫徹するために一貫した行動をとつた點に注がれてゐた。さうして兄弟の復讐精神は、自然に胸中に涌いて來た感情であつて、人から敎へられたものではないやうに書かれてゐる。つまり復讐は、武士の子としての一つの本能的な感情として描かれてゐるのである。そのことを、曾我物語では「良竹は生ひ出づれば直なり。梅檀は二葉より香ばしとは、かやうの事に知られたり。されば遂に敵を思ふまきに討ち、名を萬天の雲にあげ、威勢一天に餘れり」と形容してゐる。

この物語においては、曾我兄弟の復讐は極めて當然なこととして書いてゐて、その復讐の動機や行爲に關して、特別に說明をも批評をも加へるところはなかつた。兄弟の行爲が母の意に反して行はれたこと、又、祐經に對する復讐が、兄弟の祖父の惡行と矛盾するものではないかといふやうな反省、さういふ點に何らの觸れるところもなかつたのである。つまり、封建時代において、復讐は、最早當然の行爲として是認せられてゐたから、これに對して、その原因や動機を追求する上から何らかの批評を試みる必要はなかつた。それはむしろ一つの道德として、當然行はなければならないことを行つたまでのことである。それ故、頼朝は五郎に向つて「汝が申す所一々に聞き開きぬ。されば死罪をなだめて、召使ふべけれども、傍輩これを嫉み、自今以後狼藉絕ゆべからず。その上祐經が親類多ければ、その意趣遁れがたし。然れば向後のために汝を誅すべし。怨みを殘すべからず。母が事をぞ思ひおくらん、不便なるべし。心安く思ひ候へ」と五郎一身の申し開きは立つたのであるが、結局社會秩序のために罪されることとなる。

つまり、復讐そのものは是認しても、廣く社會を調へてゆくためには、結局これを罪しなければ

ならないことも亦、一方では認めてゐるのである。赤穂義士に關する處置に關しても、同樣の意見が既にあつた。封建時代にあつても、復讐精神と社會生活との連關に關しては、問題の解決は早く行はれてゐたのである。卽ち、かういふ社會秩序を認めた上での復讐精神の是認なのであつた。さういふ意味なら、この封建道德はなほ、今日においても存在する可能性がないわけではない。

最後に、かういふ事件に關しては、しばしば、これを生かしておくよりも、早く適當な死場所を得させた方が、むしろ有終の美をかざる所以であると說く意見もある。併し、曾我物語では、さういふ意味での兄弟の最後は說かなかつたやうである。ただ兄十郎が討たれたため、五郎は全く生きのびる心はなく、ひとへに死を急いでゐる。これ又當然の人間的感情であつて、死期を得ることによつて、美名を全うするといふやうな功利的な考とは、遙ふやうである。

結局、曾我兄弟の復讐精神は、是非善惡等の理由を離れて、復讐に徹底することにあつた。しかも、一方においてその根柢には父君のために自己の身命を犧牲にするといふ道義精神が横たはつてゐた。だから、五郎が刑場にひかれてゆくとき「某(それがし)が姿を見ん人々は、いかに烏滸(をこ)がましく思ふらん。さりながら親のために棄つる命、天神地祇も納受し給ふべし。附けたる縄は孝行の善の綱ぞ。おのおの寄つて手をかけ結緣し給へ」と云つてゐるのである。ただ、復讐そのものは始から當然の行爲として問題にはせられず、むしろ、人間の本能性のごとくにさへ、これを取り扱つてゐる。併し、これが、私鬪たるにとどまつて、公衆の是認しない行爲であるかぎり、社會秩序上から制止せられるべきは「內外の亂れを制し、私曲の諍をやめて、歸伏せざるはなかりけり」と、この物語の始に總論的に述べてゐるのによつても明かで、「私曲の諍」は當然否定せられなければならない。しかも、この社會秩序の中にあつて、復讐精神を生かすことは、社會正義を公衆の陪審に委ねる一つの方法であつたのである。このことは、そもそもの古い復讐事件である曾我物語においても認められ、爾後、江戸時代の社會の慣習として、この封建道德が定まつたのである。

第三章　詩歌に就いて

和歌史上の革新時代

一

先づ、和歌の革新といふことについて、始に考へて見たいが、和歌の革新については、二つの性質の存することが認められる。一は、純粋に藝術的な立場からこれを行ふもので、他は政治性を帶びた和歌の革新である。此の政治性といふことの意義については、後述する所によつて、次第にその内容が明かになるであらうと思ふが、藝術性の側における革新も、やはり當代社會の一般的な政治上の狀勢に聯關して、生じたものであることは否定出來ないと思ふ。さうして、さういふ社會の狀勢を肯定するか否定するかといふ藝術家の態度の相違よりして政治性が濃厚になつたり、藝術性が濃厚になつたりするのであるが、いづれにしても、一般の社會狀勢に對する關心よりして此の結果を生じたのであるから、藝術性を主とする立場においても、消極的な意味において、一種の政治性を有するものといふことも出來るかと思ふ。併しもとよりさういふのは逆說的な云ひ方であつて、純粋には、藝術に對する態度、精神において、おのづからに然るものがあつたと云ふべきであらう。いづれにしても、一般社會の革新的風潮、革新の時代的蕩搖に勵まされ促がされて、いづれの方面においても、革新の運命が盛り上つて來たものであることは明かに考へられることである。

さうして、和歌史の上で、革新といふことを考察するについても、此の政治性、藝術性の兩方面から考へて見る必要があると思ふ。此の點から、和歌の革新時代を考へるのに最も好適な時期は、新古今時代と云はれる時代である。新古今時代は、まさに、藝術的な和歌の革新と、政治性を帶びた和歌の革新との兩方面を、その特色を發揮して有してゐた時代なのである。

二

和歌史の上で新古今時代と云はれる時代は、源平の爭亂のあとで、公卿の政治的な權威が失はれ、武家が政權を握つた時代である。さうして、此の時代には平安時代の政治體制の代りに、新しい武家の政治體制が組織せられて行つた。元久二年に新古今集が一先づ撰成つたが、その後十五年にして、承久元年に源實朝が殺された。その後、承久の亂が起り、承久三年には、後鳥羽上皇は隱岐に遷幸あそばされ、此所において、隱岐本新古今集を撰し給うてゐる。一方武家方においては、

その後十二年を經た貞永元年に、貞永式目を撰定して、いよいよ武家の體制が、成文としての確立を見るにいたつたのである。その中には、「承久兵亂の時の沒收地の事」に關して、「關東御恩の輩の中、京方の合戰に交りし事、罪科殊に重し。仍つて卽ち其身を誅せられ、所帶を沒收せられ畢んぬ。」と云ひ、又、「同じ時の合戰の罪過は父子各別なる事」については、「右、京方に交ると雖も其の子關東に候じ、子は京方に交ると雖も其の父關東に候ずるの輩は、賞罰已に異り、罪科何ぞ混からん。又西國の住人等は父たりと雖も子たりと雖も、一人京方に參ぜし者は、住國の父子其の咎を遁るべからず。同道せずと雖も、同意せしむるに依つて也。但し行程境遙にして、音信通じ難く、其の子細を知らざる者は、互に罪科に處せられ難からん歟」とも規定せられてゐる。この明記によつて、公家と武家との差別を明かにし、武家の公家に對する自主的精神の確立が認められるのである。

かやうにして、公家からは全く離れた存在として武家の政治體制が出來上つたのである。かういふ一見和歌などからは緣遠い事がらが實は、新古今時代における、和歌の革新的意義に重要な關係を持つてゐる。それは、上述のごとく、和歌の革新の性質を、藝術性と政治性との二方面の觀點から考察しようとするに當つて、藝術性の側は、政治性を全く否定する所にその立場があるのであるから、その政治性の否定といふ所に、やはり、一種の政治的なものの聯關が認められ、そこから、此の兩方面の考察に關しても、當代社會の、右のごとき政治的狀勢が重要な聯關を持つこととなるのである。

新古今時代において「和歌に熱心な志を寄せてゐた人々で、時代の歌風の革新的な傾向に關心を持たないものはなく、その影響を受けるとともに、みづからも、何らかの革新的な歌風を創造しようと考へないものはなかつたであらう。少くとも、此の時代のすぐれた歌人、代表的な歌人の作品や言說を通して、さういふことが明かに知られるのである。例へば、鴨長明はその著の無名抄において、「或人問て云、此の頃の人の歌ざまは二面にわかれたり。中頃の人の歌の體を執する人は、今の世の歌をばすゞろ事のやうに思ひて、やゝ遠靡宗など云ふ異名をつけて毀りあざける。又此の頃やうを好む人は中頃の體をば俗に近し見所なしと嫌ふ。やゝ宗論のたぐひにて事きるべくもあらず、末學のため是非をまどひぬべし、いかゞ得べき」といふ、宗舊派、革新派の兩歌風の優劣に關する質問に對して、その答には、「和歌の歷史的變遷を說明し、當代の守舊派の歌風について、昔はたゞ

花を雲にまがへ、月を氷によせ、紅葉を錦に思ひよするたぐひを、をかしき事にせしかど、今はその心云ひつくして、雲の中にさま〳〵の雲を求め、氷にとりて珍らしき心をそへ、錦に異なるふしを尋ぬ、かやうにやすからずたしなみて思ひ得れば、珍らしき風情も難くなりゆく。まれ〳〵得たれども、昔をへつらへる心どもなれば、卑しく碎けたるさまなり。いはんや言葉に至りては言ひつくしてければ、珍らしき言葉もなく目とまるふしもなし。殊なる秀逸ならねば、五七五をよみて七々の句は空におしはからるるやうなり。」と論じ、「こゝに今の人、歌のさまの世々によみふるされにける事を知りて、更に古風にかへりて、幽玄體を學ぶ事の出で來たるなり」と新風の現れ來たる所以を說いてゐる。さうして、「この二つの體いづれかよみ易く、又秀歌をも得つべき」といふ質問に對しては、「答て云、中古の歌の體は學び易くしてしかも秀歌は難かるべし。詞舊りて風情ばかりを詮とすべきゆゑなり。今の體習ひがたくて、よく心得つればよみやすし、そのさま珍らしきによりて、姿と心とにわたりて奥あるべき故なり。」とも答へてゐるのである。

此の鴨長明の說明は、一應、守舊派と革新派との由來や歷史的意義にも觸れ、古風と新風との性質についても明かにしてゐる。たゞ此の說明は、歌人としての立場から、藝術的な態度のもとに、和歌の革新の傾向や新風の勃興について述べてゐるにとゞまり、より廣い立場から、政治的な意義の、和歌の革新については、何ら考へるところがなかつた。併しそれは當時の歌人として、むしろ當然の考へ方であつたらうし、右のやうな說明のし方も極めて自然な取扱ひなのである。

鴨長明の云つたやうに、幽玄の歌風が、當時の藝術的な歌人の、革新の風潮の中心をなすものであつた。これはいふまでもなく、俊成、定家父子を中心とし、新古今集の主なる歌人の主流をなす歌風である。さうして、それらの歌人は、いづれも身分から言へば公卿と稱される人々であり、京都に住み、京都で生活してゐた人々であつた。貞永式目で、京方と、關東に對し、特に區別して稱された、その京方の人々の歌風がそれであつた。すなはち一口に言へば、京都の公卿の革新の歌風は、藝術性を中心とするそれであつた。

さういふ京方の歌風に對して、別に新しい歌風を以て獨步した歌人が、少くとも代表的な歌人として、二人はある。一人は源實朝であり、他の一人は西行である。西行は元來京方の人であつたが、その僧侶の生活において、京都を脫し、京域よりは遠く離れて住んでゐた人である。又それは、所謂幽玄の歌風が有力となる時代に少し先んじて世に現れた歌人であつたから、京方の革新の

歌風とは異なるものがあつたとも言へる。併しいづれにしても、西行の傾向を以て革新の歌風の先驅者とすることは可能であらう。源實朝に至つては、多くいふ必要を見ない。それは明かに、京方に對する關東の武家の代表者であり、此の人によつて別個の新しい歌風が詠み出だされたのである。

京方と此の人々の歌風の最も著しい相違は、前者が社會的な現實性から遊離してゐるといふ所にあつた。これをその代表者であつた藤原定家の家集、拾遺愚草によつて檢して見ると、此の尨大な家集を埋めてゐる殆どすべての作品が、題詠の歌のみである。それは或は百首歌であつたり、五十首歌であつたり、さうした歌數を限定せられた制作にかゝる歌である。さういふ場合以外の作品にしても、西行が殘したのを悲しんだ歌などの個人的な事情における感懷の作も若干あるにはあるが、此の種の作品でも小數にしか發見出來ない。さうして、大きい社會的な事件に關する定家の感懷は、遂に一首も發見出來ないのである。定家の長い生涯は、大きい變動の時代に、住んでゐて、それより種々の感動を得たであらうことは、決して少くはなかつたと思はれる。その事は、彼の日記を通しても考へられることである。それにもかゝはらず、彼の日記は多く個人的な事情の叙述に終始してゐて、廣く社會的な事件に對する展望に乏しく、視野も狹くして感情も亦甚だ個人的である。彼の記述には個人的な毀譽褒貶に關することが、しばしば出て來る。さうして、社會的な事件に對する彼の態度は、早く源平の爭亂に對しても、「世上亂逆追討、雖滿耳不注之、紅旗征戎非吾事」と述べて、武家の興廢のごとき、わが關することにあらず、その事は、全く記さないとさへ云つてゐるのである。かういふ所にも、定家の性格は窺はれるが、かうした傾向は晩年まで變らないのであつて、その一生を通して、彼の歌人としての立場は、純粹に藝術性を守持して行くとともに、社會の變動擾亂から、和歌を保護しようとするところにあつた。勿論それは、全く社會的關心に無意識であり無智無能であるといふことは甚だ事情が違ふのである。それは「紅旗征戎非吾事」と云つてゐるところにも、はつきりと根據の示されてゐるやうに、公家としての立場を墨守するところより出たものであり、むしろ社會的關心の烈しさからもたらされた、自己の位置の自覺に、その根本があつたのである。それ故「紅旗征戎非吾事」といふことは、一種の政治性を持つた彼の意見と云つてよろしく、此の考へ方が反映してゐる彼の和歌における革新性は、藝術性を持つ立場にあるとしても、やはり、一種の政治意識に關聯を持つと云へないことはないと思ふ。とにか

くかやうにして、社會の變動期に住した彼の生活、廣く云へば京方の公卿の生活が、その作品に反映して、革新的な方向に導いたものであるとともに、その自己の位置の自覺が、反武家的な態度を示すにいたつて、和歌の革新的傾向が純粹に藝術性を持つ性質となつて來たのである。

さういふ定家を主とする京方の人々の傾向に比すれば、西行の傾向は甚だ違ふ。第一、その作品の中には「世の中に武者おこりて、西東北南いくさならぬ處なし、打續き人の死ぬる數おびたゞし。まことども覺えぬ程なり。こは何事の爭ひぞや、哀なることのさまかなと覺えて」といふ社會的事件を視野に入れた歌、「木曾と申す武者死に侍りにけりな」といふ、時の英雄の最後を詠んだ歌、福原の遷都を詠じた歌、さういふ作品は、彼の家集に種々見えてゐるのである。これだけの眼界の廣まりだけでも、西行の態度は、京都の公卿たちとは違つてゐる。

此の西行が、讃岐に至り、崇德上皇の御遺跡を尋ねて、「讃岐にまうでて松山と申す所に院おはしましけむ御跡尋ねけれども、かたもなかりければ」と記した、

松山の波のけしきは變らじをかたなく君はなりましにけり

のごとき歌を詠み、又白峰の御陵に詣うでて、弔ひ奉る歌を詠んでゐるのは、保元、平治の亂の後に、西行の關心の奈邊にあつたかを察することが出來るもので、少くとも定家の「紅旗征戎非吾事」の態度とは根本的な相違があつた。此の異なるものの根本に眼を注いで、私はこれを政治性、乃至政治意識の有無の點にあると云はうと思ふ。それは通俗な意味での政治でもなければ、卑俗な現代的意義においての政治でもない。それは人間の個人生活が、公の生活に關聯する所に生じる精神である。國家と國民との聯關に關して自覺せられた意識である。私は、西行の作品においては、その點の現れは十分ではないと思ふが、その家集を通して見る時、京方の公家のそれとは甚だ異なる相貌を呈してゐることを認める。これを一種の政治性に基づくものと解釋しようと思ふのである。

此の西行の態度は、源實朝に至つて、甚だ强烈になつたのを見る。それは、西行が、元來京方の出であつたのに比して、實朝は全く關東の人として成長したといふ、環境や教養の差のほか、新古今時代といふ革新の時代に稍先んじた西行と、その革新の時代のさ中に出た實朝との、時代の差にもよる所が大きいと思ふ。

實朝の歌については今多くいふまでもないが、かの、

山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心我あらめやも

を含む三首の歌は、實朝の精神を最も端的に表現したものとして、そこに認められる政治性は、定家の作品における藝術性ときびしく對立するものである。

三

かうした革新時代の、藝術性と政治性との對立は、所謂新古今風と云はれる歌風と、萬葉風と云はれる歌風との對立となつても示される。實朝の場合はいふまでもない。西行も、その自然歌人としての面においては、萬葉集の赤人の系列に立つ歌人であると解釋せられてゐる。さうして、政治性といふ意味が、社會の現實面に、直面してゐるといふ點で、赤人や西行の自然歌人としての位置は、現實の自然に直面した所より歌ひ出されてゐるといふ性質にも、これがつながりを持つて來るのであつて、いづれにしても、それが、上代風の現實性の種々なる方面における現れとして、平安時代の歌風が成熟した結果より生じ、古今集的平明、現實の歌風に對して興つた新古今風の新風とは、萬葉歌風は明かに對立するものである。その萬葉風が、革新時代の歌風に、常に有力な作用を及ぼして、新風の興起には、必ず力強い原動力となつてゐるのであるが、萬葉集を檢討して見る時、その內部に、現實歌風の一面には政治性が働いてゐるといふことも、見逃すことの出來ない事實である。それは、當時の社會的事象を反映して、國民としての意識が昂揚せられ、高度の政治性を帶びた作品をも數々見出だすことも出來るのである。純粹の日本の精神は上代においてその眞實の姿を見ることが出來、それの詩歌としての發現が萬葉集において認められる時、その萬葉集の中に、私の意味する政治性の濃厚な存在が見出だされるのは當然の現象と云はなければならない。

かくて、萬葉集の歌風の影響は、此の政治性といふ特徴を反映して、何らかの意味で、その性質の現れを見るのである。それは又、上代的な純粹の國民精神の發露となつて現れ國家意識の昂揚となつても現れる。萬葉集の後代の和歌に與へる革新的な原動力には、必ず此の點の作用が認められるのであり、新しく起る萬葉歌風の根本には、此の性質の働きが存在することを忘れてはならない。

さういふ萬葉集の影響に對して、平安時代の歌風の最後に結果した、新歌風は、純粹に藝術性を目標としたものであつた。云はば王朝精神の醇熟が、此の藝術性の歌風を獲得して新古今風といふ、一つの革新的意義を持つ、時代の歌風たり得たのである。此の意味において、上代精神と王朝精神の二つの存在が和歌史的意義、廣く云へば文學史的意義をもつて存在するのであり、その進歩

發達が、常に、文學革新の中樞を貫いてゐるともいふことが出來る。それは同時に、政治性と藝術性との對立となつても現れてゐるといふ解釋が成り立つのである。

その事情は、近世の和歌史における革新的意義に移して見ても同じであつた。

近世の革新歌風は、國學者によつて指導せられた萬葉歌風にあるが、その國學者の一派からは新古今歌風が現れてゐる。少くとも理論的に新古今歌風を意識して、これを主張した有力な一派が存在する。本居宣長はその主たるものであつた。その宣長の和歌に對する思想は、早く、あしわけを舟の中にも現れてゐる。彼は「歌は天下の政道をたすくる道也。いたづらにもてあそび物と思ふべからず」といふ問に對して、「答曰、非也。歌の本體、政治をたすくるためにもあらず、身を修むる爲にもあらず、たゞ心に思ふことをいふより外なし。」と云ひ、「世人の情、樂しみをば願ひ、苦しみをばいとひ、面白きことは誰も面白く悲しきことは誰も悲しきものなれば、只その意に從うてよむが歌の道也」とも云つてゐる。さうして此所から、詞をかざり、美しい表現をもつてするのが和歌を詠む上に最も大切であるとして、新古今風の歌風を理想とし、和歌の藝術性を重んずる傾向に傾くとともに、その政治性を否定する態度を取つてゐるのである。此の點において、宣長は師眞淵と反對の立場にあつた。田安宗武と荷田在滿との對立も、根本的には此の點の意見の相違にあつた。併し、いづれも、守舊派たる堂上歌風に對して、革新歌風を指導する立場にあつたことはいふまでもない。

宣長が、文學を政治性より解放して、その藝術性を重んじる文學の獨立性、自律性の主張に傾いてゐたことは、和歌における新古今風の主張にも、又、物語文學における物のあはれの主張にも共通してゐる考へ方であり、その點の意見は宣長の一生を通じて變らなかつた。かうして、新古今風は、近世の短歌の革新時代においても、やはり同樣に藝術性を主とする立場に立つこととなつてゐるのである。

これに對して萬葉派の革新運動は、鎌倉時代の初頭における事情よりも遙かに越えて、遂に維新の大業遂行の一翼をなし、その藝術的方面の最も力强い現れとして、これが認められるやうになつてゐる。維新志士の作品が、その表現において、その精神において、遙かに萬葉集に連なるものがあることはいふまでもなく、その歌風も亦、純粹に萬葉調と云へる作品であつた。近世和歌における萬葉調の純粹の現れは、これを維新志士の作品に求めるべきである。平賀元義、佐久良東雄、平

野國臣、橘曙覽等の名をあげただけでもそれは明かであらう。これらの人々の作品に認められる政治性についても亦、多く述べる必要はあるまい。それは國家を憂へ、國家を危くするものを慨し、その實行運動に伴ふ政治的精神の表現としてこれを解釋することの出來るものであつた。かくして、近世和歌の革新時代においても亦、藝術性を主とするものと、政治性を主とする立場の兩方が存在したが、それは、鎌倉時代初頭のそれと反對に、前者は甚だ實力が薄く、存在の跡が稀薄であつたが、鎌倉時代の初頭においては、むしろ新古今風による、藝術性の立場が、絶對的に優位性を占めてゐたのである。それは、教養ある公家の立場と、教養に乏しい武家の位置との相違から生じた差等でもあつた。併し近世においては、革新的な歌人の間の教養はそれほど多くの間隔を伴はないからして、一般に歌を詠む人々は古代の和歌の學問を身にしめてゐたが、その中、むしろ學者的な立場の人々が藝術性の側に走り、維新志士のごとき實踐運動に携はつた行動派は又政治性の側に屬してゐたのも當然であつた。かつての公家の立場を、當代の學者派が襲ひ、かつての武家の位置を、當代の志士が襲うてゐる。公家とか學者とかは概ね常に藝術派であつて政治性から離れ、それに對して武家のごとき實踐的行動に富む人々は大低常に政治性の側に走つてゐる。併し、いづれも和歌の革新時代に平行した存在として、此の兩派が現れて、それぞれの立場から、革新の効果をあげるために努力してゐたことには間違ひはない。

五

さて、最後に一言、此の問題の現代的意義に關して述べなければならない。現代の新風に關しては、私は多くこれを藝術性を主とする側であると考へてゐる。併しその他に政治性を主とする革新の風潮もあるべきであらう。たゞ現代において新古今時代のごとく、その一方が優勢であるか、又は、近世幕末時代におけるごとく、他の一方の側が優勢であるか、それは未だ明かにいふことは出來ないが、いづれにしても、革新の時代には、此の兩者の性格をもつて、それぞれの主張なり運動なりが現れるのは自然な又當然の現象である。それが現代の一般社會の革新の時代性に對應してどれだけの意義や價値を有するものであり、更に、藝術性、政治性の兩者において、そのいづれの優位性を期待することが、現代の風潮に卽して、甚だ當然の結果であるといふべきかについては、更に、今後考へられるべき問題であらう。又、政治性を貫いて、藝術性があふれてゐる作品こそ、最も完成した又眞實の歌として、望ましいものであるといふことも附け加へておきたい。

和歌史上に於ける現歌壇

一

新派、舊派といふ考は、嚴密に云へば、萬葉時代にも現れてゐるかも知れない。たとへば、萬葉集の卷十六に、古歌に曰くとして、

橘の寺の長屋にわが率宿し童女放髮は髮上げつらむか

と出てゐる歌を、椎野長年が、さまざまの理由によつて改作し、

橘の光れる長屋にわが率宿し童女放髮に髮上げつらむか

とした。これは歌風の相違といふのとは違つて、寺に俗人が寢るわけはないから、「寺の長屋」を「光れる長屋」と改めたり、放髮は既に髮上をした女をいふのであるから、放髮が髮上をするといふのはをかしいとして、これを「放髮に髮上」をすると改めたりした類であるゆゑ、餘程、理屈が入つて來てゐるのであるが、しかも、「橘の寺の長屋」といふやうな表現に比べると、「橘の光れる長屋」の方が、ずつと近代的な感じがして、少くともこの改作により、古風と近代風との相違した感じが與へられることは確かである。

かういふ所に、古い歌風との相違が感じられるとすれば、既に、古い、新しいの相違があつたわけで、派といふほどではなくとも、さういふ區別が早く生じてゐたかも知れないのである。とにかくさういつた可能性を、ここから受けとることは出來るであらう。

併し、この程度の態度の相違なら、もう少し進んだ意識を持つてではあるが、平安時代にも存在してゐた。古今風のごとき三代集の歌風に對し、曾根好忠や源俊頼らに、新しい歌風の動きを認めやうとすることは、和歌の歴史の方では、昔から云はれてゐたところである。

かういふ動きは、歴史の上では、いつの時代でもあるであらうし、そこに進歩も見られるわけであるが、たゞ、それが一つの派を形成するほどの勢力を持つやうになり、更に派閥を固くするほどの集團的な結成が認められるやうになると、もうそれを單に新しい歌風の動きといふやうな樂しい希望をもつて見てゐることは出來ないのである。それは肩の凝りのやうな、或は大きい肉腫、瘤をくつつけたやうな煩はしさと、厭はしさとをさへ感ぜずには居られなくなる。もはや進歩の線に添

うて、ひたすらなる期待を未來につなぐといふ美しい心は消え失せて、殘るものは、無益な爭ひ、醜い擠排、でなければ恥かしい無關心と默殺の態度、さういふもろもろの暗い影がさしてゐる、汚れ果てた姿である。

かういふ現象が顯著になつて來たのは、定家時代以後のことである。恰も、源氏の幕府が三代で終り、北條氏が實權を掌握した、その頃から、新派と舊派との烈しい角つきあひが始まつた。つまり、公卿に代つて武家の時代が出現し、所謂封建時代が、新しい支配的勢力のもとに發達しつつあつたとき、和歌の世界では、かういふ派閥の爭ひが、顯著になつて來た。それは、武家社會が、一たびある勢力のもとに統一せられるとしても、又直ぐに別個の勢力が起り、覇權の攫得を爭つて、自己の勢力の擴張に專念する、彼らの生活が、和歌の方面にも反映したものと云ふべきであらうか。封建時代とは、およそ、さう云つた性質を持つてゐる時代である。ひとり、かういふ生活態度に終始した武家のみならず、さういふ社會の一般狀勢が、公卿の間から、藝術の世界にまでも及んでゐるのである。

かやうな封建社會の精神が、あらゆる方面に根强くはびこるとき、もはや藝術の世界においても、眞摯な藝術の追求のみを目的とするやうなことは行はれなくなる。さうして、いたづらなる否定と、不當な抹殺と、高壓的な威伏と、人心の收攬と、さまざまの、藝術からは緣遠い手段が、或は露骨に、或は陰險に取られるやうにもなる。武家時代の當初に、和歌の方では、派閥的な爭が、その歷史の上に顯著に見えて來たといふのも偶然ではない。しかも、この爭は、江戸時代にいたつても、ますます烈しく續けられたのである。

江戸時代の新派、舊派の爭は、一面において、封建的な藝術の世界の閉塞を、開拓するところに、當初の目標は置かれてゐたと云つてもよいであらうが、併し結局、當時の社會の封建性は、この兩派の對立を、そのまゝ武家時代的な勢力のための抗爭の中に、投じ去るのやむなきにいたつた。さうして、淸純な藝術の道を和歌の中に見出したのは、實に當時の歌壇の內部の人ではなくして、歌壇の外に優悠してゐた隱士や志士の人びとであつた。

同じ事情は移してもつて、明治時代から現代にいたるまでの歌壇の歷史に見ることが出來る。明治時代の和歌の革新と新しい短歌の興隆とは、やはり短歌の世界における封建性から、これを救ひ出すところに目的はあつたであらう。けれども、かくして進んで來た現代の歌壇は、旣に牢固とし

て抜くことの出來ない、割據的勢力を植えつけて、封建的分立の中に埋沒し去つてゐるのである。これは結局、幕府時代の始から、派閥的な勢力觀念を養はれて來た潜在意識の、おのづからなる現れとも見ることが出來るであらう。

それのみならず、大きい對立は、舊派、新派のそれが、今日もなほ認められることである。しかも、その兩者が全く無緣のものであるかのごとく、事もなげに、それぞれの垣の内に閉ぢ籠つてゐる。かういふ狀勢は、江戸時代の歌壇そのまゝであり、更に溯のぼつては、鎌倉時代の二條派、京極冷泉派對立時代の姿そのまゝである。少しく異なるところは、周圍の社會が、既に幕府時代を脱してゐるにかゝはらず、歌壇ではなほ封建時代の舊套を襲うてゐるといふ點にある。

わが國が、明治の維新によつて、攝關時代、幕府時代以後失はれてゐた上古の親政の御代に復古したといふことは、歴史の上で最も重大な事件であつた。そこで始めて、政治の意識も、文化の性質も、長い間歪められてゐた封建の遺制を取り除かれることとなつたのである。併し、さういふ概論的な規制は與へられたとしても、眞に久しい間浸み込んだ、舊來の封建的な觀念は、精神上の遺傳とさへもなつて、なほ今日に受けつがれてゐる。今日の社會に於ける革新の意義は、明治時代以後、維新の御代を迎へても、なほ根深く心の底に巣くつてゐる、このもろもろの陋習に對する強固な信條を打破して、明治維新の意義を、あらゆる方面に徹底させるところにあるであらう。それは、明治時代以後、西洋の文化を輸入したために生じる弊風を一新するといふところにあるのみでなく、むしろ他の重要な意義は、明治の大御代の、そもそもの初に志された革新の目的を、今日もなほ埋沒させられてゐるところにまで、十分に掘り下げて、根本から一掃せられた清らかな新しさに立ち歸るところに認められなければならない。さうして見れば、なほ一續きの維新の時代が、今日にまで繼續してゐたのだと觀ずることも出來る。かやうにして、古代の純粹の日本に立ち返ることが要望せられなければならなくなつてゐる。

かうした社會的意義の中に、日本的な文化の一翼を占めて存在する歌壇のみが、舊態依然たる封建的遺制に甘んじてゐるわけには行かないであらう。どうしても新しい姿に脱皮しなければならないのである。それには封建的な觀念に、未だ根深く捉へられてゐる古老たちよりも、むしろ澄刺たる青年の精神によつて、改革が行動せられなければならない。

しかも一方には、舊派と稱する、大きい怪物さへも存在してゐる。これを無視し默殺すること

は、結局、歌壇の權威を縮少し、抑壓し、一新の効果を少しもあげ得ない所以である。この對立ある限りは、武家時代の歌壇の狀態と、少しも變らない現象を今日もなほ呈してゐるものと云つても誤ではない。この對立の上に出でる時に、始めて、古代の日本的な社會に、歌壇も置かれたものと云ふことが出來よう。かうした對立は、なほ俳句の側にも認めることが出來る。併し、俳句における新舊の對立は必ずしも歌壇におけるほどの困難な問題ではない。なぜなら、歌壇の舊派は、俳句の月並派とは違つた意味を持ち、それとは比較にならぬ强い勢力に覆はれてゐるからである。

二

和歌は、柿本人麿の時代に成立を見たものである。その時に、一應の完成は見たが、併しこの時以後、和歌が發展を止めたと思ふのは大へんな誤である。この時以後、和歌が常に墮落し、落ちぶれて行つたと解するのは、又甚だしい見當違ひでもある。和歌はなほ進歩し續け、發展してやまなかつた。その究極が新古今集の時代であつたと見てよい。さういふよりも、柿本人麿の時代に和歌としての完成を見た此の藝術が、それ以後新古今集の時代まで、絶えず前進の歩みをやめなかつたその軌道の中に、一つの歴史としての和歌が存在するし、そこに、和歌の全き意義が見出されるのだと云つた方がよい。

從つて、和歌は、萬葉集とか古今集とかいふ秀麗な頂上を、この連峯の中に聳え立たせてゐる、一つの山脈なのである。この山續きの全體が卽ち、和歌の性質である。それは、北アルプスや南アルプスがそれぞれの山脈の性格を持つごとく、和歌は、これらの長い歴史が時間としてではなく、空間を限つてゐるところに、その性格が見出されなければならないのである。

さうして、われわれは、そこに共通する一つの著しい性質を見出すことが出來る。人麿は最初の宮廷歌人と云つてよいであらう。從駕應詔の性質を持つ歌も亦、その作の中に始めて認められるのである。人麿こそは、民間の歌誦にまかせたうたを、宮廷の文學に高めた最初の人物であつた。かくて、和歌の文學性は、宮廷の風雅な生活に伴つて、その成立を見るにいたつたのである。その後、新古今集の時代まで、和歌の歴史に一貫した性質は、實に、宮廷の藝術として、それが存在してゐたといふ事實である。和歌はその形式と發想の方法とにおいて、歌謠に類似してをり、歌謠と祖先を同じうする血統は、爭はれないものであつたが、たゞこれを歌謠から分つ最後の一線は、和歌が宮廷の藝術であるといふところに引かれてゐた。

和歌は風雅の藝術であり、「みやび」の文學であり、宮ぶりは、つひに和歌を、他のすべての文學から辨別する本質であつたと云つてよい。和歌の發展は、この線に添うてのみ、その洗煉と練磨とを加へて、進歩發展して行つたのである。人麿と家持と貫之と定家とは、かくて、その間の和歌の歴史に強いカーブを描かせた練達の士であつたには違ひないが、結局この人々を通じて、相互に目指したところは宮廷の文學としての和歌の完成といふ點にあつた。人麿は人麿らしく、貫之は又貫之らしく、和歌の文學性を高める方法を見出し、家持も、定家も、和歌が文學として取り得る最も深い詠嘆を與へることに成功したが、しかもこれらの人々に共通する歌人としての性質は、宮廷の藝術家であるといふことであつた。風雅は、「みやび」は、遂に文學としての和歌の道に一貫した本質であつた。芭蕉が、民衆藝術としての俳諧より出でて、和歌の故郷を思慕し、風雅の誠を說いたのも、結局高き所にある宮廷の藝術に、深い憧憬を感じたからに他ならぬ。しかも、俳句は遂にこの域に至ることは出來なかつたのである。

今日においても、歌壇に論じられるところ、又歌學者の取り扱ふところは、萬葉集であり、古今集であり、新古今集であつた。又、人麿であり、貫之であり、定家であつた。武家時代、幕府時代の和歌にいたつては、宮廷の文學としての和歌に對するほどの尊敬を示さないのは、今日でもやはり同一であつた。萬葉集、古今集、新古今集をもつて、歌道の軌範としたのは、既に鎌倉室町時代からの歌壇の習慣であり、この三集の權威によつて、和歌の在り方を正す鏡としたのは、その當時から取られてゐた歌壇の掟でもあつた。それがなほ今日まで一貫した一つの道筋ともなつてゐる。新古今集以後、いかなる集が、これに匹敵するものとして取り上げられたであらう。定家以後、いかなる歌人が、それ以上の尊崇をもつて、乃至は議論や研究として、取り上げられたであらう。わづかに近世にして眞淵があり、近代にして子規があるとは云へ、眞淵に景樹が殿擊を加へ、子規に明星派が烈しく對立したやうな相手を、人麿や貫之や定家は決して持たなかつたのである。これは、子規の系統の勢力について云つてゐるのではない。もつと廣い視野から歌壇を眺めての論である。人麿から定家までのこれらの代表作家は、眞に完成した作家であつた。それ以後の歌人は、反對派から殿擊を加へられるとき、粉微塵に碎け散る歌人であつた。

なぜ定家の時代まで、さうしたことがなかつたのか、それは和歌が宮廷の權威によつて保たれてゐたのみならず、和歌の、「みやび」の藝術としての本質が、その宮廷の文學にふさはしく、宮廷の

世界と一致したものを持つてゐたがためでもあつた。それゆゑに、一層、和歌の進歩をはかり、その發展を志すことが出來たのである。もし何々すればと推測するやり方は、おろかな論者のとる方法ではあるが、宮廷の世界が、社會の實質的勢力を握つて君臨せられること、なほ定家の時代以後の久しき期間に下ることを得れば、和歌の進歩は、たゞに定家の時代の、新古今歌風にとどまらなかつたかも知れない。併し、平安時代が院政時代から鎌倉武家時代に一轉したのも、さうならずには居られなかつた運命であつたであらうし、しからば、和歌が、この宮廷の世界の轉退と運命を共にして、顚落して行つたのも、避けることの出來ない時代の成行ではあつたらう。

とにかく、かやうに、和歌が宮廷の權威から離れた時、乃至は、宮廷の世界さへも、武家の社會の前に、その鄙かしかつた光が影薄れゆくとき、和歌はどうしても、その高い位置から搖り落されて、宮廷の文學として與へられてゐた王座が動搖するのも、やむを得ない犧牲ではあつたと云へる。かくて、和歌そのものの進歩發展は止まつて、連歌や俳諧やへ轉じて行つた。前進の方向は、それら新しい藝術の緒口へと開かれて行つたのである。かくて、和歌の世界では、舊派、新派の對立が起り、無限の抗爭が繼起して行つた。

今日この歴史をもう一度ふり返るとき、和歌がその本質を取りもどす道は、唯一つよりないことが明かである。しかも有り難い御心は、その道を開き給うてゐたのである。すべては、武家時代の以前に歸らうとしてゐる。封建時代を現出しない、親政の大御代に、社會のすべてのものが復することを、今日の理想としなければならない時代である。その上で、わが國の新しい進路の開かれることが期待せられる時代である。文化も文學も、さうして歌壇も、この道にはづれ、或はこの道に逆行するのでは、何の意味もない存在となることであらう。

附け加へていふが、ここに述べて來たことは、あくまでも歌壇に卽しての問題であつて、短歌そのものを直接の對照にして論じたわけではない。歌壇の體制が問題なのであつて、文學としての短歌、その題材とか表現、發想の方法とかについて云つてゐるのではない。この點を明かにしておかないと、一見類似した議論が、以前にも出てゐることとて、それと混同せられては、この文章の趣旨も、論者の意見も全く違ふこととなつてしまふのであるから、そのことを、おことわりしておきたい。藝術としての短歌について考へるところは、又別にあるのであつて、それについては、他のところでも述べたことがある。右のやうな意見をもつて、題材も表現も、常に古代風の趣味の中に

閉ぢこめてしまふものと考へてはならない。それはあくまでも、歌壇といふものの在り方について、それが廣く今日の國家社會の中に、いかに存在すべきかを論じて見たまでのことである。このことは誤解せられてはならない。

轉換期の歌人

一

時代も、轉換期に當り、歌風も亦一新の時期に當つてゐた、最初の時代は、奈良時代末から平安時代初にかけてである。此の時期に、大伴家持や六歌仙が出た。

大伴家持を轉換期の歌人にあげるのは、必ずしも妥當でないかも知れない。むしろ、轉換期以前の、末期的歌人として說くことが常識となつてゐる。併し、家持の歌風には、平安時代の古今的な歌風の萌芽が認められるのであつて、その優美典雅な傾向や、又可成り理智的、或は道德的要素を加へた表現や內容は、やはり轉換期の歌人にふさはしい、新しいものを示してゐるのである。家持の歌風を以て、纖細平弱且類型的として、一段下つた歌人の如く取扱はれるのは、彼が萬葉歌人の一人であるからである。萬葉歌人として見る時には、萬葉歌風の黃金時代に比して、下り坂になるのみならず、末期的歌人とさへも認められる事もあるであらう。併し、萬葉集の終の時代は、家持

一人が支へてゐる輝かしい存在であつたし、更に、萬葉集といふ書物の羈絆から脱して、これを一個の歌人として獨立させる時、家持の和歌史上の面目は、もつと著しい相貌を現すであらう。

ある意味で家持は業平の祖であつた。美貌と情熱とをもつて、若き日の家持の作に、業平の面影を認める事は困難ではない。又、家持は貫之の祖でもあつた。その道義的態度や理智的傾向に、中年後の家持は、老年の貫之を髣髴とさせるものがある。まことに、家持は萬葉歌人であるよりも、平安歌人の先驅者であるといふべきである。折から、時代も一つの轉換期に當つてゐた。平城京から平安京へと、都遷りのみならず、時代思潮にも大きな變動があつた。さうして、家持は、歌人としては、さういふ轉換期の先驅者であるとともに、政治家としては、時代の犠牲者でもあつた。

家持の後を受けて、六歌仙の時代となつた。所謂六歌仙時代は、歌風は未だ動搖してゐて、完成の時期に至らない。家持以來の新しい歌風への動搖が、まだ繼續してゐた時代である。たゞ、さうした轉換期には、感情の沈靜といふよりも、むしろ情熱的な興奮が、新しい方向を求めて、作者を駈り立てるのである。業平と云ひ、小町と云ひ、遍照と云ひ、それぞれ個性の著しさもあるが、全體として、歌風が定格に押し籠めることの出來ない奔放と自由の性質を持ち、眞率、誠實の精神が、理想を求め、憧憬の情を滋へてゐるのである。業平に發した轉換期の萌芽は、此所に於て著しく力强さを加へて來た。さうして、此の情熱の沈靜が、更に、優美典雅の趣を濃くする事によつて、新しい歌風の完成期へと向ふのである。家持の持つ優雅の歌風が、一面、家持は忠誠の精神にも滿たされてゐた歌人であつたが、これに反立するかの如き、六歌仙時代の情熱によつて、實はその内容を著しく洗煉せられて、新しい歌風の完成へと、拍車がかけられたのである。

二

第二の轉換期は、平安時代末から、鎌倉時代にかけてである。此の時代の特色は、轉換期が、既に完成した歌風の時代と一致してゐた事である。卽ち、新古今風の幽玄の歌風は、平安時代に至り、俊成の出現によつて提唱せられたもので、それは、鎌倉時代初に至り、新古今風として完成せられたのである。しかも、それと時代を同じくして、轉換期の歌人にふさはしいすぐれた作家を出してゐる。その著しきものとして、西行や實朝の如きをあげる事が出來る。

私は、西行や實朝を以て、新古今風歌人と、安易に云つてしまふ事が出來ないのを覺える。此の人々は、その歌風に動搖があつた、又、自由奔放でもあつた。自然に備はる誠實さがあつた。それ

は完成した技巧を以て、獨特の歌風を顯示した、所謂新古今風の歌人と異なるのである。

轉換期の歌人である事は、實朝に於て著しい。實朝が以前に考へられてゐた如く、はじめ新古今風であつたのが、後萬葉集を學ぶに至つて、萬葉風の歌人に變つたのであるといふのは、事實を誤つてゐた事は、今日明白となつてゐる。彼は、反對に、はじめ萬葉風歌人として歌作し、やがて時代の歌風に移つたのである。その萬葉風から新古今風への推移が彼をして、轉換期の歌人たらしめる所以でもある。さういふ烈しい變化が、實朝の作に起つたのは、その歌作に對する信念の動搖を物語るものである。萬葉風に對して安住する事が出來ないで、遂に時代の風に移つたのであるから、實朝は、自から轉換期を作るとともに、又、完成の時期にも到達したのである。卽ち、新古今風に辿りついて、此の藝術境に漸く安住の所を見出した時、實朝の作品は、結局、その歌風に於ての完成の域に到達したものと見る事が出來る。さうすれば、その萬葉風の時代は、實朝としては、未だ、歌風の動搖してゐた時代となるのである。彼は、何かの方向を求めて、歌風の轉換を期待してゐたのである。さうして、それは、同時に、新古今風の完成に至るまでの、時代の惱みを、自身身を以て體驗してゐた事になるのである。萬葉風の淺薄な影響は、早く、新しい歌風の萌芽を示した好忠や俊賴あたりにも認められる所であるが、さういふ和歌を新しくする理想の方向を萬葉集に見出すといふ試みの、最も強い現れが、實朝に於て認められるのである。俊賴以後、新しい和歌の流れが、新古今風の完成にまで到達したのであるが、その經驗を、實朝はもう一度、自から經驗した。完成した新古今風への追隨ではなくして、先輩の苦心のあとを、自己の體驗として通過して見ようとしたのである。實朝が轉換期の歌人たる理由が此處にある。さうして、さういふ良心的な作歌の體驗が、彼をして、すぐれた作品を生むに至らしめたのである。それ故、實朝の萬葉調は、その力强い素朴、且誠實な精神と、奔放な詠みぶりとを以て、萬葉集に通ふ特色を持つてゐるとしても、むしろ、その奔放自由なるが故に、必ずしも、純然たる萬葉調ではなくして、むしろ、實朝自身が、動搖期にあるのにふさはしい情熱を、生一本に表出してゐるものと考へられる。實際「物云はぬよものけだものすらだにも」の歌の如く、實朝の作品で人口に膾炙してゐるものは、所謂萬葉調といふよりも、自由にして素朴な詠みぶりが、自然かくの如き風格をとらしめたものなのである。さうして、鎌倉武士らしい、さういふ生一本の自由な表出が、漸く藝術的訓練を經て、藝術至上主義の公卿的な、新古今風の歌風に同化せられるやうになつたといふ事が出來るであらう。

西行も亦決して、新古今風の歌人ではない。そののびのびとした詠嘆、感情の率直な表出は、むしろ新古今風ではないものがある。しかも一方に於て、彼は定家の追隨者でもあつた。西行、實朝の如きは、まことに、轉換期の歌人としてあげるのにふさはしい不羈の詠風を持つてゐたのである。

三

第三の轉換期は、戰國時代から江戸時代の初にかけて見る事が出來る。社會狀勢の變化も著しかつたが、文學藝術に於ても、又、獨特の風格を發揮した。所謂桃山風の雄大豪華な藝術は、今までの優美典雅な藝術に見られない、日本的發展を示すものであつた。さうして、かういふ雄大豪華は、秀吉の氣風もさる事ながら、戰國の武人がつちかつた武士藝術の精華でもあつた。此の桃山藝術は、一つの完成期を示すものであらうが、和歌の世界においては、全く轉換期の藝術に他ならなかつた。

轉換期の歌人としてふさはしい作者は、むしろ專門歌人らしい人に、見出されない所に、その特色がある。奈良時代末から平安時代初にかけては、未だ專門歌人といふべき人の定まらない時代であつたからして、家持や六歌仙の如き、もとより、專門歌人といふべき人でもなく、その點は、憶良、旅人の如きと同じであるから省くとしても、併し、人麿、赤人らが、從駕して和歌を奉つてゐる專門歌人らしさの面影がある事に比すれば、やはり、此の轉換期の歌人は、もつと素人らしい性質が濃く感じられる。素人らしいか否かは、決して歌作の多少にあるのではなく、世間からいかやうに待遇せられたかの點に見出されるのであつて見ると、微官でありながら、歌作にすぐれた理由を以て召し出された人麿や赤人に比べる時、地方官の本職を以て、たゞ自から歌作を樂しんでゐたに過ぎない、憶良や旅人と並んで、家持も亦、素人らしい點が著しく感じられるのである。六歌仙も亦、貫之などに比べると、もつと專門歌人らしい所が少くなるのではなからうか。貫之も地方官ではあつたが、特に御書所預として、古今集編纂の衝に當つたのは、專門歌人らしい面影を濃くする所以である。その他屏風和歌など召されて歌を奉つた事も多く、ますます專門歌人の面目が著しい。まして、和歌所につとめる事になつた梨壺の五人の如きに至つては、いよいよ專門歌人としての地位が明瞭になつて來るのであつて、かくて、玄人素人の差別も、はつきりして來るとともに、歌人の地位も定まるやうな事になつた。

同様にして、俊成、定家などの専門歌人に對して、西行、實朝の如きは、明かに素人である。決して、專門歌人ではない。此の素人らしい人々の方に、むしろ轉換期の作家としての力强い存在が認められるのであつて、歌風の完成が、むしろ專門歌人を作り出す、或は、專門歌人が定まる前に、一つの歌風が完成せられるともいふ事が出來るのであるが、それに反して、獨自の歌風による新しい傾向の馴致と、自由奔放の詠風は、むしろ捉はれない素人歌人、乃至は、素人らしさを餘計に滲へてゐる歌人によつて、作り出され、これが轉換期の歌人としての地位を作つてゆくのである。

さういふ意味で見て來ると、此の戰國時代から、江戸時代にかけての作家には、武士が多く、その作品には、素人らしい稚拙さが見えて、むしろ、平凡な詠風が多いのであるが、その間、間々武人らしい豪快な趣の現されてゐるものもある。連歌師の和歌に至つては、既に專門歌人に類するものとして、一つの完成した歌風といふよりも、むしろ、此の當時としては、既にある型に閉ざされた因襲の中に墮してゐて、多くの未來性を持つものではなく、それよりも、さういふ武人の作品に轉換期の歌人にふさはしい方向を持つものも認められるのであつた。尤も、同じ轉換期と云つても、此の時期には、平安時代末から、鎌倉時代初にかけての如く、すぐれた作家を出さなかつたが、併し、木下長嘯子などは、さういふ轉換期の歌人として代表作家に押す事が出來るであらうし、その他、豐臣秀吉以下の武人に、これを求める事が必ずしも不可能ではない。(但し、秀吉その他の武人の作には、連歌師や、堂上方の歌風の影響を受ける所が多く、獨自のものを生み出す事がなかつたのは遺憾であつた)。さうして、同じ武人であつても、細川幽齋など、その流れが堂上家に出てゐる如き人は、むしろ專門歌人といふべきであり、此の人々も亦、作風は因襲に從つてゐるに過ぎなく、大きい變動期なる此の時代の和歌の更新を企圖すべき資格はない。むしろ桃山藝術を、美術の世界に完成した秀吉以下の武人達によつて、和歌の轉換も亦、自然に進められた如くである。もとより歌人としての自覺が、その歌風の新しさを庶幾せしめたといふのではなく、素人らしいみづみづしさと、因襲に捉はれる必要のない、拘束から解放せられた素人としての特權が、むしろかくあらしめたといふのである。木下長嘯子の如き、なほ幾分專門歌人の傾向もあつたが、それはむしろ閑地にあつたが爲めの閑暇がもたらした餘技に過ぎないのであつて、幽齋などに比べれば、彼はあくまでも、素人の傾向が强いのである。

長嘯子の詠風は、不羈奔放である。併し、必ずしも、秀作は多くないが、轉換期の歌人たる資格は備へてゐる。彼は西行の如く隱逸の生活を送つてゐた。世間的名譽を顧慮せず、たゞ歌を樂しんだのである。又、實朝の如く、武人の出でもあつた。力强い歌風ではないが、無造作な詠みぶりに素人くささがあるといふ事は云へるであらう。

四

轉換期の第四は、もとより、江戸時代末より、明治維新の時代を以て、これにあてるべきである。此の疾風怒濤の時代は、單なる文藝の世界だけでなく、あらゆる思潮、文化を搖り動かした。さうして、多くの有爲の人物の活動を促がしたのである。その結果は、ある者は傷つき、ある者は倒され、ある者は自から死んだが、青年の情熱は、それらを越えて、ますます時代を押し進めて行つたのである。此の時代こそ、和歌の世界に於ても、たゞ江戸時代だけと云はず、長い和歌の歷史を通じて、獨自のものを生み出す、多くのすぐれた歌人が輩出した。良寛がある。元義がある。曙覽がある。言道がある。これらのすぐれた歌人は、殆ど皆、專門歌人を以て目すべからざる人々である。(言道の如きが、稍々それを志したに近からう。)當時の歌壇は江戸派や桂園派の專門歌人に隨斷せられてをる時、すぐれた歌人は、それらの舊套墨守の專門歌人の中からは現れないで、むしろ歌壇外にあつて、ひとり自からを高しとするか、或は、たゞ隱遁の生活の中に、ひとり歌を樂しんでゐた、さういふ人々の間から見出されたのである。

此の人々と並んで幕末志士の歌がある。その多くは、專門歌人ではなく、武士の出の人が多いが、一身を國家に捧げて、奉公の誠を致すうち、その歡喜、憂苦が、烈しい情熱を以て、詩情を呼びさます時、おのづから凝つてすぐれた一首の和歌をなすのである。何らの技巧もない、たゞ眞情のまゝを、自由率直に詠み下したに過ぎないやうなものが多いのであるが、しかも、かゝる作品に、むしろ、轉換期の和歌にふさはしいものを見出す。純朴にして眞實、しかも、時代の變動と相應ずるが如く、將來の、和歌の展開を示唆する作品に富むのであつた。

吉田松陰の

親思ふ心にまさる親心けふの旦づれ何ときくらむ

を誦むと、業平の「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため」の歌が思ひ出され、梅田雲濱の

君が代を思ふ心の一筋にわがみありとも思はざりけり

を誦すると、實朝の「山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心我あらめやも」が思ひ出されるのである。必ずしも內容、表現に共通のものがあるといふのでもない。聲調の類似の點があるといふわけでもない。それにもかゝはらず、眞情の流露と、對象の捉へ方とに於て、同一の情感を呼びさまされる。まことに、業平も實朝も轉換期の歌人であつた。雲濱や松陰の如き幕末志士も亦、同樣に、轉換期の歌人ともいふべきであらう。しかも、その專門歌人らしからざる點に至つては、業平や實朝にも增して、最も遠く距離のある人々である。此の人々こそ、最も轉換期の歌人としての資格を備へてゐるといふ事が出來る。いや歌人といふのはふさはしくない、志士である。維新の志士の和歌は、この眞情と情熱とにおいて、すぐれた獨自の和歌の世界を開いてゐる。その自由と率直との點においては、萬葉調に近いものも見られる。併し、その內容に至つては、一個の私事に屬するよりも、公憤を發した、大乘的精神のものが多いのがある。國家と和歌とは此所に至つて緊密に結びついてゐる。

和歌が國事に奔走する情熱によつて、すぐれた作品を多數得た場合は、これより先、吉野時代の吉野方の作品がある。就中、宗良親王をその代表者と申上げる事が出來、又多くの武人も詠懷を殘してゐて、まさに、これらも一の轉換期といふ事が出來さうに思はれる。併し、私は、此の時代を以て、和歌の轉換期と見なす事が出來ない。轉換期であるからには、和歌の歷史を分つ劃然たる變動が生じなければならぬ。吉野時代を境とする、その前後の鎌倉時代と室町時代とは、和歌の歷史の上で、全く何らの變動を起してはゐない。たゞ、鎌倉時代の終に近くして現れた、京極家を魁首とする、清新な萬葉風の歌風も、やはり、專門歌人の一小變化に過ぎず、しかも多くの成長を見ないで、何らの實も結ばずに終り、自後は、やはり舊來の歌風の繼續に過ぎないのであるから、これを轉換期といふ事が出來ず、吉野方の歌人を以て轉換期の歌人に擬し、京極家の歌風を以て、新風の完成と見る事は出來ないのである。轉換期の和歌は、必ず、これと時を同じうして、或はその後に、新興の傾向の勃發するがあり、或は、新しい歌風の完成の伴ふを見なければならないのである。

五

以上の如く、過去の和歌の歷史の流れを見て來て、さて考へるのであるが、一體、轉換期といふのは、どういふ意味であるか。それは大きい社會の變動の時期を意味するのであらう。併し、かう

した變動は、人心の熱烈な欲求によつて、惹き起される場合と、社會情勢の自然の變化が、むしろ人々を搖り動かして、變動の時期を形作る場合とがある。此の二つのものは、似てゐるが如くであるが、實は大きい相違がある。後者の場合には、人々は、自からの使命を自覺せず、たゞ自然と環境に鞭打たれて、われ知らず走り廻つてゐる、競馬馬の如きものである。併し、前者の場合には、一つの目的を意識し、その理想に向つて、歩を進めて行く。これはむしろ騎士の如きものである。最もよい變動は、すぐれた騎士が良馬にまたがつた時に行はれるものである。明治維新の如きは、まさにさういふ意味の變動期であつた。源平時代や戰國時代の如きは、まるで競馬馬の走るが如き變動であつた。

さうした變動期が、文學の更新するのと一致する場合、これを文學における轉換期として取扱ふ事も可能であらう。文學が行きつまつて、マンネリズムに陷る時、その更新が要求せられる。更新の叫びは、作家自身のやむにやまれぬ欲求として叫ばれる事もあらうし、社會が舊套にあきたらずして、更新を激しく求める場合もあらう。さうして、文學の更新は、一般の社會の變動より、稍遲れて行はれるといふ事が、大體、文學史の常識になつてゐるやうであるが、併し、それは必ずしもさうは云はれないのであつて、さういふ社會の情勢を敏感に反映して、むしろ、文學の方の更新がさういふ大きい變動を近い將來に豫測せしめるやうな場合もある。それで、社會の變動の期間に比して、文學が全き轉換を行ふ期間の方が、却つて甚だ長いといふ場合もあるのである。即ち、社會の變動が急激に顯著に行はれるやうになる以前、文學の方では、既に、さうした轉換の萠芽を示しはじめ、さうして種々の迂餘曲折を經て、その更新の全脫皮は、社會的變動の遙か後に認められる事になるから、文學上の變動期とか、轉換期とかは、甚だその期間が長いわけである。尤も社會的變動も、その遠因などにまで溯つて、遠く遙かなる萠芽までも求める事になれば、社會は常に進展し、變動してゐるとも云はれるのであつて、極めて茫漠とした事になるから、社會變動は、先づその顯著なものについて見なければならないのである。

さういふ轉換期を和歌の歴史の上に求めて來て、以上の如く、奈良時代から平安時代に移る際に、又、平安時代末から鎌倉時代にかけて、又、戰國時代から江戸時代初にかけて、又、江戸時代末から明治時代にかけて、最も顯著に、これを見る事が出來たのである。これらは、社會的變動の時期が、文學、むしろ和歌の轉換期に相應してゐた時代である。此の以前、大化改新時代はどうで

あつたか、その點は、現在殘されてゐる和歌の材料が少く、且確實性にも缺ける所があつて　はつきりした事はわからない。

六

轉換期は、大きい社會革新の時代である。情熱の盪搖する時代である。さうして、理想の建設が、人々の希望に應へる時代である。さういふ時代の和歌が、力强い感情を滿へ、燃えたぎる熱情に滿ちたものであるべきはいふまでもない。社會のすべての人々が、それぞれの持場において、マンネリズムを打破して、革新の時代にふさはしい生活や精神の進展に努力してゐる時、歌人こそは、その時代の息吹を豐かなる詩情を以て歌ひあげるべきであつた。かくして、革新の時代には、技巧においては、未だしいものがあるとしても、その情熱と誠實とをもつて、强い迫力を有する作品が、しばしば見られるのである。

現代も亦、一の轉換期であらうか。時は昭和維新が叫ばれてゐる。劃期的な大事變の眞只中にある。短歌においても、舊套に墮する事なく、因襲を乘り越えて、まさに更新の企圖せられなければならぬ時代である。いや、さういふ叫びも起つてゐる。たゞ忘れられてならない事は、上記の如き轉換期の和歌が常に不羈自由の點において、率直素朴なる點において、情熱によつて呼びさまされた力强さの點において、素人らしさの面影を、多分に滿へてゐた事である。轉換期の歌人は、新に、素人として發足し直さなければならないのである。でないと、既に完成された舊來の歌風の打破は困難であらう。かくの如き轉換期の素人歌人の輩出によつて、歌風は更新され、短歌は、別種の新しい詠歌の完成へと推進せしめられる事であらう。もう明治時代の短歌ではなく、昭和時代の歌風が樹立せられてもよいのである。現代も亦、和歌の轉換期として、新しい歌人に期待する事が、甚だ多いと思ふ。

愛國和歌概説

愛國の和歌と云つても、その中には、種々の要素があるであらう。これを廣く云へば、日本國家の大道に叶つた歌は、皆愛國の和歌といふ事が出來る。萬葉集の中に見える、大君をほめまつり、國都をたゝへた歌など、やはり此の意味での愛國和歌といふ事が出來るであらう。

併し又、狹い意味での愛國の和歌には、そこに、自覺せられた精神が見出されなければならない。卽ち、國家意識といふものが、自覺せられた精神のもとに、表現せられた作品でなければならないと思ふ。さういふ自覺は、一つには、對外的な危機に際して起るものであり、又一つには、思想の進歩と敎養の向上とによつて、自然に發するものでもある。從つて、かういふ意味での愛國の和歌は、可成り時代が下るまで、これを和歌の歷史の上で見る事は、甚だ少いと思はれる。

萬葉集の名高い防人の歌

今日よりは顧みなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は

の精神は、實朝の

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめやも

に相通ずるのであるが、かやうに、大君に忠誠を誓ひ奉る精神は、古代より、わが國民が自然に抱懷してゐた所で、これは、敢へて危機の感によつて誘惑せられたやうなものとは違ふ。從つて、かういふ意味での愛國の和歌ならば、種々の作品があげられる。さうして、大君に仕へまつる至情は、もとより、愛國の精神の中の、最も重大なる意義を有するものであつて、愛國の和歌の最もすぐれた作品も、此の點において、最高の國民精神が發露せられた和歌の中に見出されなければならないのである。

危機の感によつて、愛國の情の發せられた作品は、從來の和歌の中には、必ずしも多くないが、併し、さういふ意味の作品の中に、畏れ多くも、元寇に際して、詠み出で給うた、鶴山天皇の御製

世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照らし見るらむ

を拜する事が出來る。併し、此の役に際して、公卿以下の人々の國を憂へる和歌が却つて殆ど見出されないのは、甚だ遺憾である。

日本が對外的に大きいショックを得た事件は、長い歴史の間にもさう多くはなかつたが、國内的な擾亂は、もとよりしばしばであつた。さうして、さういふ際にも、萬葉集に出てゐる、藤原仲麿の作

いざ子どもたはわざなせそ天地の固めし國ぞ大和島根は

の如き、感情の高潮した作品も詠み出されてゐるのであるが、併し、此の作も、一面には、奈良時代の亂にからまる私黨的な感情が裏にひそんでをりはしないかといふやうな作歌の事情を考慮に置く時、純粋にわれわれの胸に入つて來る事を妨げるものがあるのである。

それより、むしろ吉野時代の亂に至つて、かゝる意味での愛國の和歌には一層多くの價値あるものが、多數作り出だされてゐる。さうして宗良親王の、

君のため世のため何か惜しからむ捨ててかひある命なりせば

の如く、眞情を吐露せられた御作も拜するのである。

對外的な意識の愛國の和歌は、幕末の志士の作品を得るまでは、わが國では、眞實に詠み出だされなかつたのだと云ふ事も出來るであらう。

尤も幕末の時代は、一面外國の脅威を感じた時代であつたが、一面それは、國内的な擾亂とも結びついてゐた。さうして、勤皇討幕の精神と攘夷の精神とが結びついてゐた如く、外國の脅威によつて、危機を感じ、愛國の情が自覺せられ振起せられた時、それは、必ず大君に仕へまつらうといふ忠誠の眞情に伴ふのであつて、此所にも、わが國における愛國の和歌の眞實の意義が明かに認められるのである。それで、此の點からいふと、かの萬葉集の防人の歌の如きも、必ずしも、自覺せられた愛國の和歌といふ事が出來なくても、それが愛國の和歌の大道を示すものである事は明かである。國民が國家の爲めにその眞情を和歌に託する時、自覺の有無にかかはらず、その作品は眞實の方向を示して誤らないのである。此所に、わが國民のすぐれた國家的精神の傳統を見る事が出來る。

從つて、幕末の志士の歌、例へば佐久良東雄の作の

幾千たび命死ぬとも大君のおほみためには惜しからなくに

の如きは、萬葉集の防人以來の血統を引く、眞實の愛國の和歌である。

多分眞實の愛國の和歌は、和歌を玩弄とし、和歌に沒入してゐる人々の間からは、多く生れない

のではないかといふやうに思はれる。それで、東雄は

人丸や赤人のごといはるとも詠歌者の名は取らじとぞ思ふ

とも歌つてゐるが、しかも亦一方では

わが國の手ぶり知らずばかゝる時世を儚きと思ひ捨てまし

といふほどに和歌に慰めを得、和歌を愛してゐた人である。かゝる人にして、はじめて眞實の愛國の和歌を詠む事が出來るのである。

和歌は又國學と結ぶことによつて、その價値を發揮する。これこそ眞實の愛國の和歌であらう。

本居宣長は、玉勝間の中で、かう云つてゐる。

風雅集に、後宇多天皇の大御歌、

天つ神國つやしろをいはひてぞわがあし原の國はをさまる

これぞ道の意にはよくかなへる大御歌なりける。人の國のごと、くさぐさこちたきわざはせさせ給はざりしかども、たゞ神をいつきまつり給ひて、天の下のいとよく治まりつるは、神の御國のすぐれたるにて、上つ代はまことにしかこそ有しか。同集賀部に、花山院前内大臣、

我君のやまと島根を出る日はもろこしまでもあふがざらめや

これも道の意にかなへる歌なり。

御製は申すも畏多いが、花山院前内大臣の歌のごとき、まことに雄大な氣宇を包藏した秀作で、この國學の見地より見れば、和歌に對する評價のごとき、大いに變つて來なければならないであらうと思ふ。少くとも、客觀的な詠風の歌のみをもつて、すぐれた作とするのではなく、國家に對する憂憤の情を吐露した信念の歌の中に、あらためて價値が見出されるのである。さういふ意味で、幕末維新の志士の情熱に豐かな作の中に、眞のすぐれた歌があるのであつて、これを單に抽象的な觀念の歌とのみ云つて、斥けてしまふことは出來ない。前記の東雄の歌のごとき、その他、さういふ性質の歌は甚だ多い。例へば、平賀元義の、

今日よりはみかど尊みさひづるやから國人にへつらふなゆめ

のごとき歌は、宣長の言をもつてこれを見れば、全く國學の道にかなうた歌と云はなければならない。かういふ國學の精神の中に、愛國の至情は生きてゐるのである。

明治以後、日清、日露の役の如く、非常なる危機に際會して、愛國の和歌も詠まれ、山櫻集、忠

烈歌集の如き歌集も出てゐる。併し、愛國精神が、わが國風なる和歌によつて昂揚せらるべき事、此の度の事變の如き、好機會はまだなかつたと云つてよい。なぜなら、日清、日露の役の時には、未だ舊派の全盛時代で、新派和歌の勢力は微弱であつた。その後、今日の如く、新派和歌が、隆盛を見るに至つて、はじめて、此の危機に際會したのである。それ故、新派和歌が、眞の愛國精神といかに結びつくかは、此の時に際して、歌壇に與へられた一つの大きい試金石であると云つてもよからうと思ふのである。

尤も、その間、かつて中河與一氏が紹介せられた、悲願集の如き、維新志士の愛國の和歌にも相交はる歌集も出てゐるのである。或は、幕末時代におけると同樣に、眞の愛國の和歌は、かゝる「詠歌者の名」を取らない人々の間から生れるのであるかも知れない。

併し、新派和歌は、その最初において、與謝野鐵幹の如き男性的、さうして、國家的な點で、愛國精神の和歌にも、共通するものを有する歌人が現はれてゐた。正岡子規にいたつては、一層その點が明かである。私は、子規が日露戰爭の時まで生きてゐたら、一體どんな歌を作つたであらうかといふ事に興味を感じるが、或は泰然として動かなかつたかも知れない。とにかく、新派和歌は、此の事變を契機として、精神的に新しく生きる道が考へられなければならないであらう。

愛國の和歌は、現在において新しく生かされる事が、最も必要である。

近世和歌史概説

二條家の舊派歌風は、一時凋落してゐたが、細川幽齋が出でて、再び近世和歌史の上に、堂上歌人を通じて、綿々たる流れを傳へるに至つた。

此の歌風が、古今風の雅馴で、掛詞緣語の多い、主情的な傾向を追ふものである事は云ふまでもない。

のどかなるかげを契りて春の日のおつれば落つる夕雲雀かな（衆妙集――幽齋）

これに對して、自由の境地から歌を詠んだのが木下長嘯子であつた。併し、その稍ひとりよがりに墮した歌風は詩情少く、且、時代にも入れられなくて、孤立に陷り、殆ど後繼者もなくして過ぎたのは、平安時代の曾根好忠や源俊頼に類するものがあつた。

なけやなけ秋の半ばを松蟲もかたぶく月はさぞ慕ふらん（擧白集――長嘯子）

堂上派に對する新風興起の自覺が起つて來たのは、江戸時代的生活理念の旺盛に勃興した元祿時

代に近づいてからである。さうして、關西の下河邊長流、關東の戸田茂睡らが、さうした革新の聲を上げた最初の人ではあつたが、作品そのものは、必ずしも、それらの意見に相應してはゐなかつた。それにしても、二條家歌風に對する新しい歌風の基礎として、萬葉的なものを求める心は、既に、これらの人の作品に現れてゐるのである。

近江より朝たち來ればたづのなくやすの川瀨に氷りゐにけり（晩花集――長流）

又、茂睡の歌風は佶屈たる點で、長嘯子の歌風に類似するものがあつた。

秋の色のながめにかへて此の頃は高根のあらし麓のしぐれ（鳥の迹――茂睡）

かやうにして新しい歌風の最初の足迹は印せられたのであるが、觀念的な舊派歌風の墨守に對抗するに觀念的な新派的傾向の主張を以てするのみでは何らの發展性もない。そこに、もう一度和歌の歷史を顧みて、その發展して來た源に立ち歸り根本から出發するとともに、古典の研究に沈潛して確固たる理論と信念とを身につける必要があつた。

此所に、契沖・春滿等によつて、萬葉集の根柢的な研究が試みられる機運が起つたのである。ただ、契沖の歌はあくまでも舊派的な桎梏を脫する事が出來なかつたのに比すると、春滿の歌は、自

由な點で、新しい傾向に一歩進んでゐたのは、さすがに時代の進歩に伴ふものであつた。

花を思ふ心は山に春霞かゝりし日よりかゝりそめてき（漫吟集――契沖）

霜をへてもろからむよりきほひ散れよしや冬たつ風のもみぢ葉（春葉集――春滿）

萬葉研究の作品に對する影響は、賀茂眞淵が出る時まで待たなければならなかつた。併し、その眞淵の作も、初期のものは、「物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまに通ひて、はなやぎたよわきさまなりしを」（賀茂翁家集序――橘千蔭）晩年に至つて、漸く上代歌風に到達するを得たのである。一度しみ込んだ舊殼を脱する事は、眞淵の情熱を以てしても、困難なのであつた。

信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな（賀茂翁家集――眞淵）

眞淵の歌は、春滿に比すれば全般的に雄勁で、且華麗である。春滿が古今風に微少の新古今風的な所を加味してゐると云へば、眞淵は、その新古今風が強くなつて、古今風が僅小となり、やがてこれに萬葉風が次第に加味されて行つたのである。しかも純粋に萬葉風である所からは、遂に遠かつたと云はなければならない。併し、眞淵の複雜な歌風と、その詠作に對する變遷は、その一々の部分が多くの有力な門下によつて踏襲され、近世和歌の大きい流へと發展して行つたのである。殊に眞淵が希求しながら、なほ舊風から離脱出來なかつた所を、その門弟に至つては一層徹底させて、遂に純粋の萬葉歌風にさへ到達する事が出來た。かくて眞淵の門下は、萬葉派、新古今派、及び江戸派の三派に分れる。江戸派は古今風と新古今風とを調和した優美華麗な歌風であるが、これが眞淵の歌風を最も忠實に墨守したものといふ事が出來る。たゞ眞淵よりも幾分優雅纖細の趣が增してゐる。併し眞淵の希望は萬葉派によつて遂行され、又、新古今派は、むしろ眞淵に反對した分子であるが、しかも眞淵自身の内部に、此の新古今的な性向が、ひそかに隱されてゐた事を、眞淵自身知らなかつた。その知られなかつたものを門下によつて表面に露出せられたのであるといふ事が出來る。萬葉派に田安宗武、楫取魚彦、新古今派に本居宣長、江戸派に橘千蔭、村田春海がある。

昨日まで盛りを見むと思ひつる萩の花散れり今日の嵐に（天降言――宗武）

天雲のむかぶすをちのわだつみの霞めるかたゆ舟ぞ見え來る（楫取魚彦家集）

影うつる色もおぼろの山櫻花に風待つ春の夜の月（自撰家――宣長）

尤も、宣長の新古今風の主張は、理論としての意見であつて、その歌風は、むしろ古今風の平凡

なものが多かつたが、別に上代風の詠歌を試みて、古道精神を詠んだものにはすぐれた作がある。

花見むと分け入る山の路もせにふりすてがたき初蕨かな（うけらが花――千蔭）

大比叡や小比叡おろしの音さえて木の葉ふきまく志賀の辛崎（琴後集――春海）

春海の歌は力強いが觀念的な作が多く、千蔭の作の方に景情相具してすぐれたものを見る。

萬葉調は、眞淵によつて理論的基礎と、發展の機會を與へられ、遂に田安宗武を出したのであるが、眞淵の門流が歌壇的地位を固めるに至つて、反對の烽火があげられたのである。

長流・契沖に始まり、眞淵・宗武に至る當代歌壇の主流は、二條家歌風の舊派に對し、新しく萬葉歌風の提唱によつて、その確固たる地歩が築かれたのであり、その二條家歌風は、古今風を根柢とする堂上派によつて墨守せられて來た所であつた。當然、眞淵派に對する反擊は、此の舊派の系統を引く側より起らざるを得なかつたのであつて、それは、地域的には、眞淵が江戸を根據とするに對し、舊派の牙城たる京都を根據として起り、又、歌風的には、萬葉風に對し、古今風を主張する事により、舊二條家歌風を、新しく甦生させたのであつた。たゞ、二條家歌風の舊風を、そのまゝ再現するのでは、到底、現代的生命をかち得る事が困難であるのは明かであつたから、それに新しい理論を與へて、更新させる事が必要であつた。此所に、たゞこと歌の主張や、しらべの說が生れて、古今集の流暢な聲調や平明な表現を理想とする歌風に、新しい理論根據が與へられ、萬葉派に對し挑戰するに至つた。

此の主張を稱へた小澤蘆庵、香川景樹、いづれも舊派的な教養、或は舊派の師家より出でて新時代に活躍した歌人である。

神まつる卯月來ぬらし山もとの森の榊のしめはへてけり（六帖詠草――蘆庵）

鶯のなくはつ聲の嬉しさにひとりおきつる朝ぼらけかな（桂園一枝――景樹）

蘆庵の歌には理知的な所があつて、歌の調子もまだ十分渾然とした所に入つてゐないのに比すると、さすがに、景樹の歌は、聲調の流麗と、自然平明な表現とをもつて、此の派の主張の完成された趣を、その歌風からも受け取る事が出來るのである。景樹の門下の中でも、能谷直好と木下幸文とがすぐれてゐたが、直好が、景樹の古今風の忠實な繼承者であつたのに比すれば、幸文の方は、萬葉風の所が見えてゐて、景樹から云へば異端者であつたらうが、實は、景樹の歌の中にも、その自然平明の調子では、萬葉集の影響を受けた作もあるのであり、殊に時代全般の空氣が、萬葉調の

影響を受けるものある時、幸文が、その困窮の生涯よりして、自然に萬葉風に傾くのは、自然の勢でもあつたのである。景樹の門には、幸文を得て、盡龍點睛を得たのであつた。

池水に見えてのみふる春雨は音きくよりも寂しかりけり（浦のしほ貝――直好）

さかしらに貧しきよしといひしかど今日としなればこゝらすべなし（亮々遺稿――幸文）

景樹の古今風は、堂上歌風の甦生であつたから、自然、此の歌風は、宮廷に入るのに最も適してゐたので、遂に、舊二條家歌風と新陳代謝して、桂園派が宮廷に入れ代り、此所に、現在の御歌所派、舊派歌風が、これを基礎として築かれるに至つた。それで、二條家歌風は、完全に桂園派の古今風と合體したのであるが、同じ、堂上歌人であつても、千種有功の如きは、雄勁な表現で、萬葉派に近く、少くとも、時代感情に近いものを持つてゐたのである。

かみつ代の涼しき風を傳へきて葛湍ふくらし大和國原（千々廼屋集――有功）

それよりも、純粹の萬葉調は、師傳に頼らず、自ら歌を樂しみ、自然の感興、詩情によつて歌を作つてゐた人々により、立派な實を結んだのである。これは眞淵の眼に見えざる偉大なる薫化であつた。それとともに、その人々が、江戸とか京都とかいふ都會地でなく、田舍に多く出でたのも、萬葉調の精神が地方的なものと結ばれてゐた事を考へさせられるのである。越後の僧良寛、岡山の平賀元義、福井の橘曙覽、熊本の和田巌足、土佐の鹿持雅澄等があり、萬葉調ではないが、自山なる詠みぶりで、それに近いものに、福岡の大隈言道等があつた。

さす竹の君がみためと久方の雨間に出でて摘みし芹ぞこれ（良寛和尚歌集）

月よみの光さやけみ鉾とりて男さびするますらをのとも（平賀元義歌集）

天皇の大御使と開くからにはるかにをがむ膝をり伏せて（忘濃夫廼舎歌集――曙覽）

いせの蜑のかづく白玉たまさかに逢ひ見ることよの更くらく惜しも（和田巌足歌集）

鶯のかよふ岡邊のつゝじ花いざ家づとに手折りて行かむ（山齋家集――雅澄）

しぶ〳〵にまが引く小田のことひ牛うたれぬ先に歩めと思へど（草遥集――言道）

江戸の歌人ではあつたが、井上文雄も、此の自由の歌風を理想とするもので、縣門派でもなく、桂園派でもなく、自由に表現したいといふ欲求が、當時のすぐれた歌人には共通してゐた。

小山田のせとの榎に落ちかゝる夕日さびしく百舌の鳴くなり（鵬鶴集――文雄）

殊に幕末維新勤皇志士が、切迫した魂の琴線に觸れて、自由に表現した歌風は、萬葉調、或はそ

れに近い素朴な詠みぶりの中に、強く人の心を動かすものがあつた。その點では、やはり、前記自由派の諸歌人に共通の礎地に養はれ、共通の特色を持つものであつた。その中でも、佐久良東雄、平野國臣、女性では野村望東尼等がすぐれてゐた。

まつろはぬ奴ことごと東の間に燒き亡さむ天の火もがも　（東雄歌集）

青雲の向伏すきはみ天皇のみいつ輝く御代になしてむ　（平野國臣歌集）

阿蘇の山燃ゆる思ひにとこ岩も碎けて輕く飛びまろぶかな　（向陵集――望東尼）

吉田松陰その他。精神の昂揚せられたすぐれた歌は、なほ數々見出だされるのであるが、今は省略に附する。

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂　（吉田松陰全集）

信州の二歌人傳

乏しいながらも、火鉢の埋火に手をあぶりながら、私の趣味に叶ふ本に親しむのが、せめてもの冬の樂しみである。

この頃相次いで讀んだ書物の中に、信州の歌人を傳した二冊の著を見出す。一部は松本近傍の歌人なる内山眞弓のことを記した「歌人内山眞弓」で、他の一部は、下伊那の勤皇家として名高い松尾多勢子のことを記した「松尾多勢子」である。前者は、矢ヶ崎榮次郎といふ人の著で、昭和十二年の十月に、松本市なる、本書の刊行會から出したもの、後者は、下伊那の鄕土史家として名高い市村咸人氏の著で、昭和十五年の六月に、飯田の山村書院から出てゐる。この山村書院は、鄕土研究の書を種々出版してゐるといふ點で、地方文化に貢獻したところ少からざる書肆であるといふことを、書き添へておきたい。「松尾多勢子」は、大正二年に出版せられた舊稿を增訂したもののよしで、當代の國家的な自覺の時代の脚光を浴びて、新に印刷刊行せられた書である。前者は、四六版

三百九十頁、後者は菊判二百八十六頁、それに系圖、年表等の附錄がつき、又、兩方とも、肖像、筆蹟等の口繪が多い。「歌人內山眞弓」の方は、附錄に、眞弓の著書や歌集の飜刻があるが、(但し、歌集は選抄)、「松尾多勢子」は、それらの著書、歌集の類は別冊として追つて刊行するとのことで、本書にはついてゐない。この兩書の著者は、いづれも齡古稀に近い老學究で、永年を、鄉土研究に從はれた篤學者の著として尊敬に値する。なほ一寸ことわつておきたいのは、鄉土研究といふと、この頃では民俗學のことと間違はれやすいが、私はさういふ狹い意味で、鄉土研究と云つてゐるのではなく、民俗學の他、歷史學、考古學、社會學、さう云つた鄉土の文化を弘く研究する學問のことをすべて含めて、鄉土研究と云つてゐるのである。

何だか本の紹介でもするやうな廣告めいた文章になつてしまつたが、もとより私の心持はさういふところにあるのではなかつた。ただ地方で、かうした研究の書が出ても、世にひろく知られるところがなくて、いたづらに埋もれるやうでは甚だ殘念であるといふ氣持も手傳つて、これにつき紹介的に書いて見たいといふ考が、何ほどか、心の中にひそんでゐることも確かである。併しそれよりも、私は、今新しい日本の文化が考へられてゐる際、それは、地方の文化の振興といふことと相俟つて、欝築せられるのでなければ意味がなく、さうして、地方の文化の振興といふことは、決して、都會の文化、中央の文化を、地方に押しつけるところから起るはずのものではなくして、むしろ、地方が持つてゐたそれぞれの文化的な地盤を檢討するところから自然に盛り上つて行くべきものであるといふことを考へてゐるから、從つて、地方の風習慣行とともに、その地方の文化を振興し指導した人々についても調べ、その行つた實績や殘した影響がいかなるものであつたかを知るといふことは、やがて、これを現在及び將來の文化に關聯させて考へる上に、甚だ大切な研究であると思つて、その方面の注意も、なるたけ怠らないやうにしてゐる關係上、かうした地方の種々の研究書については、多大の興趣を寄せてゐるので、今これらの書物に接するにつけても、何か感想を書いて見たい心持が涌然として起るのである。

それにつけても、この頃は別段地方の研究もなくして、農山漁村何とか會や、或は、中央の大きい新聞社などで、又々何々音頭、何々節、何々踊の類をつくり、これを地方に押しつけようとしてゐること、かつてのレコード會社の東京音頭や櫻音頭に類する催しが起つて來たのに、私は、實ににがにがしい思を抱いてゐるのである。地方の人々の聲を、かういふ企圖をする人たちは知つてゐ

るのであらうか。もう中央の文化の押しつけは御免だ。殊に都會文化の糟粕を嘗めさせるやうな眞似はしてもらひたくない。かういふ眞摯な聲を、どう聞いてゐるのであらう。何か、見てくれのよい、世間の注目を引く派手な仕事をしなければ、仕事をしたやうな氣がしないのであらうか。それこそ舊時代的な觀念である。東京音頭も櫻音頭も、もうどこかに消え失せてしまつた。新體制に便乘してやらうといふ、何々音頭、何々踊も、やがて同じ運命に陷ることであらう。それが決して地方に根をおろしはしないことは明かである。それはたしかに豫想が出來る。なぜなら、それに關係してゐる人々が、地方の研究を殆ど何もしてゐないといふことが明かであるからだ。そんなはかない仕事のために、大向うの喝采をねらつて、精力を費してゐるのである。そのために浪費せられる費用もムダなら、それを押しつけられる地方こそ大迷惑である。さういふ費用があるなら、なぜもつと地方の研究に力を注ぎ、地方の篤學なる研究者をして實をみのらしめるやうなことが出來ないのだらう。

たとへば「歌人内山眞弓」のごとき、その出版には隨分苦心をしてゐるやうだが、それは當然のこと、かういふ著書が樂に出版出來るものではない。だが、私たちは、さうした研究なり、又、地方に埋れてゐる有用の著の書なりを選んで、これを出版することに費用が與へられるなら、輕薄なあゝした試みよりも、もつと地方の文化に貢獻することが少からざるを知つてゐる。少くとも、地方の人々に、研究や仕事の大きい興奮を與へ、これを元氣づけ鼓舞することが出來るだけでも、大した効果がある。しかもそれは懸賞募集といふやうな投機的功利的な効果とは大分違ふのである。近頃では、文化映畫に、地方の眞實の姿が見られること、これだけが一番いゝ仕事と云はれる企劃なのではないか、などと思つてゐる。世事の慨嘆から筆があらぬ方にそれた。私はしづかに、これらの地方で出版せられた本に戻らう。さうした本を讀んでゐる方が心樂しいのである。

内山眞弓は、香山景樹門下の中では、有數の歌人で、特に「歌學提要」の著をもつて名高い。私が、佐佐木先生の「和歌作法集」に收められたこの著を讀んだのは、もうかれこれ二十年も以前であつたらう。その時から、心にとまつてゐるこの歌人について、とにかく、生涯の大體を、この書で知ることが出來た。ただ敍述に前後不揃の所があつて、傳記としては十分とは云へないが、田舍に塾を開いて餘生を送つたこの歌人の、一時都に出たり江戸に出たりして、花やかな生活を送つてゐた當時のことも知られる。この書の附錄の中に、信州桂園派の人々といふ一項があつて、景樹門

下の信州の歌人たちのことが記してあるが、その中には、今の藤森成吉氏の祖母に當る上諏訪の女性、藤森弁子といふ人の名なども見えてゐる。その中に、下諏訪の今井信古といふ人のことが出てゐて、八雲琴に堪能で、八雲琴譜の著書があるといふやうに記してあるのが、私の注意を引いたが、八雲琴譜の著書があるといふのは誤で、八雲琴譜の中に、その詠じた八雲琴の歌が出てゐることが誤傳せられたものであらう。

松尾多勢子の方は、眞弓よりも一層名高い。又、歌人としてよりも、女性ながら勤皇家として活動したことが世の注目を集めてゐる。傳記としても、眞弓のそれよりも讀んで面白いのは、生涯に變化があるからで、傳記の内容も歌人としてよりは、むしろ勤皇家として、乃至人間としての多勢子の生涯に中心が置かれてゐる。數々の逸話に富む生活が語られてゐるのは、現代に近くて、多勢子を知る人も數おほくあり、それらの人々に親しく、多勢子の風貌、性行を聞くことが出來たからである。眞弓の方には、さうした彼の人間に觸れたものが極めて少ない。

面白いことには、多勢子の歌の師、福住清風は、鈴門に屬する歌人で、下伊那では、甚だ勢力のあつた人であるが、これが桂園派とは、正反對の立場にあり、從つて、眞弓が清風をやつつけてゐることである。清風は飯田の人、飯田は名古屋の影響を受けるところの多い土地で、清風も名古屋の植松茂岳の門に入つて歌を學んだ。從つて本居宣長の孫弟子に當るのである。尤も、多勢子の親類に櫻井春樹といふ人があつて、これは、桂園派の相當の歌人であつたから、多勢子も、この人について歌の手ほどきを受けたことがあるかも知れないが、併し、多勢子が直接に學んだことの明かなのは、遠江の石川依平、江戸の小林歌城、それに鄕黨の清風で、いづれも眞淵、宣長の系統を引く人々であり、桂園派とは對立の立場にある歌人であつた。清風とは、住む土地の近いせゐもあつて、特に親交があつた。

この清風の說を悉く論駁したのが眞弓の著の「榜示杙」で「歌人内山眞弓」の附錄に、飜刻せられてゐる。私はこれを甚だ感興深く讀んだ。清風は師の宣長の說を受けついで、新古今主義であつた。「萬葉古今の詞にも、とるととらざるとあり。詞あしければ歌の意もいやしく聞ゆるもの也。よよの勅撰の中にも新古今集ばかり歌のしらべのうるはしきはなし。歌は此集にならひてよむべきこと也」といふ立場から說いた歌論の書が「呼子鳥」で、それに對し、古今主義の桂園派の立場から一一駁論を加へたのが眞弓の「榜示杙」である。この論、大體において眞弓の說の方に首肯される點

多く、清風の說は未だしと思はれるところがあつて、特に古歌の解釋や語法の說明にいたつては、清風の說くところは甚だ間遠ひが多い。それを眞弓は一々指摘して訂正を加へ、「註者靈妙の調べはさて置、辭理をもよく明分ることなし。變風の歌よみ人也」と言葉鋭く切り込んでゐる。

例の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の笘屋の秋の夕暮」の新古今集の定家の歌について、清風は「うらのとまやの秋の夕暮の哀成けしきには、花も紅葉も及ばず、といふ意をつよく明せて、なかりけりといへり。二三の句いひしらずめでたし。花紅葉は何にてもなかりけりの心也」と、普通の註釋に見える解釋をしてゐるのに對して、眞弓は、强くこれを非難した。「此歌を本居宣長、上の句に浦のけしきなしと難じて、三句を難波がたと直せり。此をぢ、國學に博くわたり侍て、一家をなせしかども、歌の本意にはこと〻く疎くして、韻調の妙所をしらず。されば今の大御代にすたれはて、、取あつかふことなき萬葉集中の語、或は古字をのみ雅なりとして貴び、平語を俗言と賤しめてとらず、なほ緣語にのみかかづらひしもの也。故に、此卿の、たとへば難波の浦にもあれ、外の海邊にもあれ、そこに至りてよみ玉ひし實地を思はざるが故に三句に四句の緣語を置り。其所に居て何ぞこちたく其名をいふに及んや。思ふべし。よりて、伊勢人宇治久老、是を批判して、三句なかりけりとあるに、淋しきけしきうかめるもの也。難波がたとして感あらんや、と宣長をそしれり。尤さるべき事也かし。然るに註者は、秋の夕暮のけしきには、花も紅葉も何にてもなかりけり、の心也と云り。歌のさまをしらぬも程こそあれ。己が勅撰中第一也といへる歌集の歌を、かく似てもつかぬことにときなすを思へば、笑ふはさて置、餘りにあきれかへりぬ。此歌の意は、九月はつる頃にや有けん、彼浦に至り、遙に見渡し給へるに、笘屋のほとり花もなく紅葉もちりはてゝあらざらんめれば、一きはつよくなかりけりと詠じ給ひて、浦の秋夕の淋しさを歎じ給へり。其調べあはれにして殆涙もさしぐまれ侍り。然るに、註者己が見なれし秋夕のけしきをも忘れ果てゝ、花も紅葉も浦の秋夕のあはれに及ばず、花も紅葉も何にてもなかりけり、などとおもへるはいかなる情の註者なりや、更にはかりしられず侍り。」なほ以下に、大いに氣焰をあげてゐるが、この解釋の相違は、「歌人內山眞弓」の著者の云つてゐるごとく、齋藤茂吉氏と谷鼎氏との論爭のあつたことに考へくらべて見ると、一層感興の深いものがある。さうして、この歌の解釋のみならず、他の歌の解釋に就いても、私は、清風の說よりは、その誤を指摘した眞弓の說の方に、贊同すべきものを多く見出すのである。

かういふ著書をも殘してゐる眞弓である。勤皇家としての多勢子の薫化は、更にそれよりも一層強いものがある。かういふ人々によつて、地方の文化や精神が育成せられ、指導せられて來たといふことを忘れてはならない。さうして、桂園派の歌が入り込み、又は、宣長や篤胤の精神が入り込んでゐたといふのは、信州の文化の一つの特性でもあつたのである。それは又、他の地方と同樣に考へられてよいことではない。

地方の文化の性質が、これらの地方の研究家のものを讀むとよくわかるところがある。尤も、一から十まで讃美の念をもつて書かれたものには、可成りの割引を必要とし、そのつもりで批評を加へなければならないのだが、それにしても、その中から眞相を引き出すことが出來るのは、何と云つても、中央の大ざつぱな研究とは又遙ふものがある。私は、地方のすぐれた古典學者の傳記の研究が續々と出てくれればよいがと願つてゐる。飛驒の田中大秀、岡山の藤井高尙、さうした人々の大きい傳記的研究や著書の飜刻が次々にと出てくれる方が、何々音頭や何々踊の宣傳に浮身をやつすより、よほど地方の文化のためにもなるのである。かういふ研究や出版のために、費用を出さうといふ機關が今の時世には、一つぐらゐはあつてもよささうなものだと思ふ。いくら新體制の御時世だからと云つて、すべて世間受けの人氣をねらふ仕事だけが文化の興隆であるといふわけではあるまい。地方の文化は低俗なもので、これに中央の高い文化を注入してやらなければ眞の地方の文化は起らないなどといふやうに心得てゐるにいたつては、文化そのもののためにも心細いかぎりである。

婦人の生活と文學

慎しみ深くて、貞操のかたい事は、日本婦人の美德として、世界に誇るに足る長所であるが、併し一面に於て、日本婦人には、藝術的趣味教養に著しく劣る所があるやうに思はれる。學生時代には可成りさうした方面に趣味を持つてゐた人でも、一度家庭の人となると、殆どさう云ふ趣味を捨てたかの如く、ひたすら家庭内の雜事にかまけて、單なるおさんどんたる事に甘んじてしまふ。

これは家庭内を美的趣味でうるほす爲めにも、子どもの正しい教育の爲めにも、悲しむべき事である。

殊に、學生時代の文學趣味などと云ふものは、極めてセンチメンタルな、程度の低いものであるから、それをそのまゝ根を枯らしてしまふと云ふ事は、却つて害のあるもので、さう云ふ婦人に往往間違ひの起り易い事を見掛ける。それで實生活の人となつて、婦人はその文學的教養を一層修練して高める必要が生じるのである。

平安時代は女性の文學的教養が男性を壓倒した時代である。男子にもなか〳〵すぐれた人が出たが、寧ろ婦人の方に一層立派な業績を殘してゐる人が多い。

紫式部の源氏物語や、清少納言の枕草子は、世界に於ても、匹敵する作品が少い程の女流文學の傑作である。

學問の點に於ても、漢學や、古典に對する造詣が深くて、男子も及ばない程であつた。これ程に、女性の擡頭した時代は世界に於ても類が少ない。

それは一つには、今日よりも樂で、殊に宮中に仕へてゐた婦人達には、いろ〳〵な必要上より、自然文學的才能が育まれ、文學的教養を高めたと思はれて、世界でも甚だ珍しい例ではあるが、併しかつてさうした時代もあつた如く、今日でも、女性が文學的教養に於て、決して今日の如く甚だ低下する筈はないと云ふ事を想察する例證にはなる。

家庭内に於てこそ、一家の主婦は、もつと〳〵文學的教養を高める必要があるであらう。

私は、多數の子女を養ひ、夫の爲めに、炊事や針仕事にいそしみ働きつゝ、しかも文學の製作を怠らず、且つ、御飯の煮えたつ僅な時間、針仕事の僅な合間に書籍を開いて思想を深め、思索を凝

らしてゐる數人の婦人を知つてゐる。

日本には、幸ひ短歌とか、俳句とか云ふ極めて短い詩形の間に、含蓄を籠める事の出來る詩がある。これらは日本人として誰でも作る事の出來る國民詩形である。男子でも、その專門的作家と云ふ人は少くて、銀行會社員から、農夫商人、職工の如き素人の作家が、自ら勞働しつゝこれを作り樂しんでゐる。さう云ふ素人作家が多い。

同樣に婦人でも、かう云ふ短詩形なら、充分に炊事や針仕事の間にも作つて、ノートに書き付ける事が出來、又、腦中で自作を添削しつゝ、清らかな樂しみを充分に味ひ、且つその間に自らの文學的敎養をも深め、精神を高め、又、家庭をうるほす事も出來るのである。

私は歌人や俳人に、男性以上のすぐれた且つ多數の素人作家が、婦人の方面に於て現れる事を期待してゐる。さうして、これらの傳統藝術を製作してゐる間に、日本婦人としての自覺を深め、强くし、自然古典藝術に對する興味を覺えて、古典的敎養をも身につける結果となる。

我が國民が古典の敎養に乏しい事は、外國人に比べて最も短所であると思はれる。婦人の生活に於ても、此の方面の文學的敎養が高められる事は望ましい事である。

學生と短歌

男女の中等學校の校友會誌を見ると、短歌の盛んな事驚くべきものがある。僕等の學生時代の校友會誌とは、まるで樣子が違つてゐる。これは、學校で、作文の代りに、短歌を必ず作らせてゐるからと思はれる。すべての學校がさうであるといふ事は出來ないが、多くの學校がさうである。中には、短歌誌を、校友會誌のやうにして出してゐる所もある。それで、各學年別に、短歌の作品を掲げて、それに、先生が批評を加へたりしたものもあり、中には、純眞でなか〳〵すぐれた作品も見られるやうである。

かやうに、中等學校で、半分は强制的にであるが、短歌に對する趣味を誘發し、その根を下すやうにつとめてゐるといふ事は、大變結構な現象であると思つてゐる。僕等の中學生時分には、全く短歌の夕の字も知らなかつたのだが、友達の中に、一寸ませた男があつて、その男から、歌に對する感化を與へられたのである。歌以外にもいろ〳〵な事を敎へてくれた。さういふわけで、中學生

の時に、既に歌に對する知識が多少あつたので、高等學校に入つて、此の方面をもつと學ぶ事も出來たのだが、さういふ機會でもなければ、ずつと遲くまで、歌を知らないでしまつたかも知れない。さういふ有樣に比べると、現今の中等學校の學生は仕合せである。さうして中等學校の卒業生が、將來、國民の中堅になることをおもふと、國民の中堅の大部分には、とにかく短歌に對する知識と、ある程度の理解が存するわけであり、その中の幾分が、相當歌に對する熱意を持ち得るとしても、以前よりも、今後において、一層歌が盛んになる可能性がある。それで、現在歌に携つてゐる人々は、此の青少年に植ゑつけられた歌の若芽を、何とか育て上げるやうに努めて頂きたいと思ふ。地方に居る歌人は、かういふ中等學校の現狀と連絡をとつて、地方歌誌を、その爲に誌面をさくやうにするのも一つの方法ではないかと思ふ。

所で、高等學校になるとどうかといふと、大分違ふ。大體高等學校では、自由にその思想をのばさうとする傾向があるので、此の年頃にありがちな、反抗的な色彩を帶びて來る。それで、從來の中等教育においてあたへられたものから、何か知ら、反撥しようとする傾向がみとめられ、傳統的な短歌などに對しても、否定的な態度を取るか、嘲笑してかゝるものが多い。併し、一方その中にも、熱心な短歌愛好者が、小數ながら、どの學校にも存在する事は否定出來ない。不思議に、此の熱心な短歌の愛好者が、級の中、一二を占めるやうな優等生か、でなければ、級のどん尻に居るやうな所謂怠け學生に多い事を興味深く思ふ。いづれにしても、短歌愛好者は、どちらかに徹底した學生の中に認められるのであり、その愛好者は、又、どちらかと言へば、くすんだやうな、あまり榮え〳〵としない色彩の個性を有する人々の中に多い事も、面白い現象だと思ふ。

所が、此の高等學校時代に相當秀作を示して、歌に熱心だつた人が、大學に入ると、全く歌に對する興味を失つてしまふのをしばしば見る。つまり、中等學校から上に行くほど、歌作を續ける人が少くなるわけで、最後に、その中の小數の者が選り殘されて、歌人となるといふ結果を見るのである。

上に行く程、歌作を續ける人が少くなるのは、その導かれる機會が與へられないといふ所にも、重要な原因があるやうである。中等學校から高等學校に入るが、皆新しい人ばかりで誰が歌に對する同好の士かも分らず、學校にもさういふ機關がなく、うつかり歌が好きだなどと言へば、輕蔑されさうな氣配さへする。そんな事で、早い時に、歌の若芽を枯らされてしまふ。又、高等學校三年

間で、やつと歌の芽を育てられた人でも、大學に入ると、一層その組織の茫漠さから、同好の士なども得られず、全く歌に對する興味を失ふやうにもなるのである。

それで一番よい事は、早く何かの結社に入るか、雜誌でも出して先輩、後輩の連絡をつけるとともに、相互の勉强機關にすればよいのであるが、後者は、經濟的に困難であり、又、學友會（現在では報國團）あたりから補助を得てゐる短歌會などは、まだどこの高等學校にも存しないと思ふ。それで前者の方法をとる方がよいが、どうも餘りに歌が拙いので躊躇する。併し、時々校内でさゝやかな歌會を開いたりして勉强してゐる中には、三年位になると、見違へる程に上達するが、その時には既に卒業といふ事になつて、その機會を逸してしまふのである。

そんな事で歌の若芽を埋め腐らしてしまふのは大變殘念な事と思つてゐる。何とかよい連絡機關でも設けるやうな方法はないものか。中等學校の校友會誌に見られる盛大さや、歌を作る若々しい才能の素晴らしさを思ふ時、どうもこれは遺憾至極な事である。歌壇などでは、もつと積極的に、短歌作者や愛好者を育み生したてる方法、つまり短歌教育論について、一つ熱心に考へて貰つたらどうかと思ふ。その方が短歌の爲にもなり、國民教育の爲にも大いに貢獻する所があるであらう。

芭蕉の學識

芭蕉の學識が和漢にわたつて、弘く深く、單に俳諧に遊び諸方を行旅して風雅に一生を送つた人といふだけではなく、讀書の消化も豐かで且確かであつたことは、芭蕉の書いた奥の細道その他の文章を見ても知られることで、さすがに一道の根元となる人は違つたものだと云はなければならない。この點が今日の俳人とは違つたところである。「嵯峨日記」には、机上においた書として、白氏文集、本朝百人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集があげてある。萬葉集以下の歌集がこの中に缺けてゐることは遺憾であるが、（松葉集は、名所和歌集である）、それはたまたま、その時にこれを持たなかつたまでの事で、芭蕉が多くの歌集に通じてゐた事はいふまでもなく、その事は、他の芭蕉の書いたものによつても明かである。

その事について、此所に芭蕉が貞享三年に註した初懐紙の評語その他により、これを檢討して見よう。「はげたる眉をかくすきぬ〴〵」といふ句に、「伊勢物語に夙（つとめ）て殿守づかさの見るになどいへる

も、此句の餘情ならん」とあるのは、伊勢物語の流布本の六十五段、「昔おほやけおぼして仕うまつる女の色ゆるされたるありけり」の條に出てゐる文句である。次に「葉わけの風よ矢筈切に入る」の句に註して、「或は中將なる人の鷹すゑて小野に入、うき身を見付たるなどのためし成ん」とあるのは、源氏物語の手習の卷に見える、中將が小野に隱れてゐる浮舟を慕つて、「八月十日あまりの程に小鷹狩のついでにおはしたり」とある條にあたるものと思はれ、「うき身」とあるのは「うき舟」の誤ではないかとも思はれる。

次に、「筑紫迄人の娘を召連て」とある句の註に、「松浦が御息女をうばひ、或は飛鳥井の君などを盗取たる心ばへ、おのづからつくし人の粧ひに便りて、餘情かぎりなし」とある。「飛鳥井の君などを盗取りたる」は、いふまでもなく、狭衣物語の飛鳥井の姫君を、筑紫に連れ行かうとした話に違ひないが、「松浦が御息女をうばひ」が一寸わからない。この文章は二樣に解されて、一つは、松浦の御息女を奪つたといふ意味、もう一つは、松浦といふ者が御息女を奪つたといふ意味に解されるが、句に「筑紫まで人の娘を召しつれて」とあるのに照し合せると、此の文章は、九州の松浦といふ者が、都の公卿などの御息女を奪ひとつて、九州まで連れて行かうとしたといふのであらう。かういふ話を記した物語を考へて見たが、一寸頭に浮かんで來ない。平安時代の物語や、鎌倉時代の説話集、さては、室町時代のお伽草子の類まで調べて見たが、これに當る話は見えないやうに思ふ。これは博雅の御示教を得ることにして、今は宿題にしておかう。

「鵙の一聲夕日を月にあらためて」の句には、「夕日さびしき鵙の一聲と長嘯のよめるに、西行の柴の戸に入日の影を改めてとよめる月をとり合せて、一句を仕立たる也」と註してゐて、此所には、長嘯の歌と西行の歌とをあげてゐる。木下長嘯の歌は、擧白集の秋の部に、

のべみれば尾花が末に打なびく夕日もうすしもずの一こゑ

と見えるもので、芭蕉のあげたのとは、文句に多少の相違があるのは、記憶の誤であらう。江戸初期の新派的な傾向の歌人長嘯子の歌に、芭蕉などの、當時の俳人が通じてゐたといふのは興趣が深い。

次に、「西行の柴の戸に入日の影を改めて」とあるのも記憶の誤があつて、この上句に似た歌詞を持つものとしては、新古今集に清輔の作として

柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるる山邊なるらん

といふ歌が出てゐる。又、山家集には、「入日影かくれけるまゝに、月の窓にさし入りたりければ」と詞書があつて、

さしきつる窓の入日をあらためて光をかふる夕月夜かな

といふ歌が見える。勿論、芭蕉の意味してゐるのは、この山家集の歌で、それは、句に「夕日を月にあらためて」とあるのもよく叶つてをり、新古今集の清輔の歌では、この句と全くあはないが、芭蕉はたまたまこの清輔の句も覺えてゐて、兩者を混同したものが、この文章の中の歌詞となつたのであらう。芭蕉の書いたものには、かういふ錯誤がしばしばあつて、それは芭蕉が、學者のやうに一々原典に當つて調べて書くといふのではなく、記憶のまゝで、筆を走らせるので、かういふ間違ひも起つて來るのであらうが、併しそれは一面において、芭蕉が、いかに多くの書を讀み、且又、いかにその多くを記憶にとどめてゐたかといふ證據にはなるであらう。尤もその記憶の正確不正確はおいて問はず、多讀の人には、この程度の記憶の誤、むしろ記憶の混同はありがちのことで、芭蕉とても鬼神ではないから、さう隅々までを確實に頭に入れておくことの出來るはずはなく、かうした誤も、時として生じるのはむしろ人間としてやむを得ない當然の現象であらう。

延寶八年に刊行せられた「田舍の句合」の中には「ほとゝぎす家隆のうそや蚤」といふ句に對して、「家隆のうそとは、ほとゝぎす聲も絶にし垣根より忍びねに鳴きり〳〵す哉と讀る心にや、誰まことより此うそを用ひんか」と記してゐるが、この家隆の歌は、勅撰集には取られてゐないやうであるが、その家集壬二集には、この通りの詞で出てゐる。

この「田舍の句合」の姉妹篇である「常盤屋の句合」には、「山賤の垣ほのさゝげともよめるや」の句に對して、「右の句も又、山賤の垣ほにはへる青さゝげ人は來れども言傳もなし、とよめるは、古今集籠どのゝ下女のよみたるうた成べし」と記してゐるが、この歌は、古今集には、籠の作として第三句が「青つゞら」となつてゐる。尤も、これは決して芭蕉の記憶の誤であるのではなく、芭蕉は、この古今集の籠の歌を、はつきりと覺えてゐたのを、わざと、「垣ほの青つゞら」を「垣ほの青さゝげ」とし、判詞においても亦、この古今集の歌を「青つゞら」ではなく、「青さゝげ」と郢びたものにして、これを「籠どのゝ下女のよみたるうた成べし」と作者までも下女にしてしまつたのは、勿論、俳諧の文章なのであつて、郢びた趣にしたててかやうに作りなしたものである。この次に、「五月雨のよそに蓉の葉ながら蓮の池」とある句に對して、「たえまなき五月雨のそら、庭上忽池

邊の思ひをなすに、彼遍昭が、何かは露を蓮とあざむくとよめる心もをかし」と書いてゐるのと同じ筆法で、もうこの歌になると、原作の「何かは露を玉とあざむく」が、あまりにも有名であるから、その諧謔の筆が明かに知られる。前の「青つゞら」を「青さゝげ」としたのも、これと同じ筆法であるが、この歌は遍昭の歌ほど有名ではない。併し又相當に知られた歌でもあつたから、これを用ひたのであらう。

私の最も興味をひいてゐるのは、「續の原　四季の句合」に、「親と子の霜夜をかこふ野馬かな」の句に對して、「ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかや親の子をおもふ、とよみ給ひし、このうたに便して、野馬の子をいとふさませつ也」と記してゐることで、こゝに源實朝の有名なこの歌が用ひられてゐるのである。この實朝の歌は勅撰集には取られてゐない。それも當然であつて、この萬葉ぶりの特徴ある作は、當時の勅撰集の歌風とは全く違つてゐたから、勅撰集の中に用ひられるはずはない。この歌は實朝の家集、金槐集の中に出てゐるのである。さうして、金槐集の價値は、江戸時代に賀茂眞淵が發見し、明治時代に、正岡子規によつて强調せられて、今日の定立を見たのであるが、しかも、この特徴ある歌を、早く認めた俳人があり、芭蕉も亦、これに通じてゐたといふことが、私の興味をそゝるのである。しかも芭蕉は、「右の句、さもあるべきながら、左の句、秀逸なればまけ侍らんかし」とて、この左の野馬の句を勝としてゐる所にも、間接にではあるが、實朝の作を、甚だすぐれてゐたものと認めてゐたことが諒解せられる。かういふ點にも、芭蕉の鋭い觀識眼が認められるとともに、又、かういふ金槐集にも通じてゐた彼の讀書力にも驚かされる。金槐集のこの歌の註には、このことを注意しておいてもよいことである。

なほ、これに關してつけ加へておくならば、實朝は、かつて、室町時代における反二條派の驍將で、冷泉派のため、二條派を相手に、大いに戰かつた今川了俊をして、その著辨要抄には「鎌倉右大臣の歌ざまをみるにこそ、みるもものうく侍る。おそらくは、人丸、赤人の歌に書交へたりとも、不レ恥や侍らんと定家卿申されためり。歌の本體か。されども及がたければ、是をめでたしともも、へたの心には不レ存なり」と放言せしめた、その實朝の歌が、芭蕉によつて、

木節問、中頃の歌人は誰なるや。翁曰、西行と鎌倉の右大臣ならん。

と認められてゐた（俳諧一葉集、遺話の部）ことを、前の、續の原の四季の句合の評と照らし合せて見る時、いよいよ芭蕉の實朝に傾倒してゐたことは、誤またざる事實であると考へられる。

又、芭蕉以前では、却つて、二條派の細川幽齋が實朝を認めてゐたらしい。それは貝原益軒の「和歌紀聞」に、「鎌倉右大臣實朝、常盤井相國、衣笠内府、此三人は、定家卿の門弟の内、殊に上手といへり。玄旨說」と出てゐるので、さう考へられるのだが、幽齋閒書には、どうあつたか、未だ明かにしてゐない。尤も、幽齋の認めてゐた實朝は、萬葉風歌人としてではなく、二條家の始祖として歌の神とも仰がれる定家の親近な門人として、可成り流俗的な意味での認め方らしいが、併しそれにしても、やはり幽齋が實朝の名に、ある尊敬を示したことは事實であるに違ひない。新派の了俊が實朝に露骨な批評を下し、舊派の幽齋が却つて因襲のまゝに實朝を尊敬してゐる。萬葉風の歌人としての實朝の眞價を認めたのは、一體どちらなのか、興味のある現象だと私は思つてゐる。芭蕉の事を離れて、實朝論になつてしまつたが、川田順氏の「源實朝」などでは、中世の歌人の歌學書には、全く實朝に觸れてゐるものを見出すことが出來ず、これを無視してゐるやうに記されてゐて、さう云つた考が漠然と行はれてゐるのではないかと思はれるところもあるので、その事にも、聊か觸れて見たまでのことである。

この「續の原」には、「鈴鴨の聲ふりわたる月寒し」の句に對して、「すゞかもの聲ふり立る秀句かぎりなし。一句安らかにして、嚴寒のけしき盡たり。かの妹がりの歌を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと書けん、さることにや」と書いてゐるが、妹がりの歌は、いふまでもなく、古今集に出てゐる貫之の歌、

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり

を意味してゐるのであらうが、この歌を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと書いたのは誰の文章であらうか。學白集の中にもかういふ文章は見えないやうで、今直ぐには思ひつかない。

かやうに、芭蕉が種々の古典、歌文に通じてゐたことは明かで、しかも、それが、句の評註判詞のごときものの中に、自由に思ひ浮べられ、隨所に引用せられて來るといふのであるから、この點から見れば、芭蕉の博學多識とともに、記憶力の旺盛であることも、驚嘆に値するものがあつて、確かに衆をぬきんでた俳聖と、句作を別としても、仰ぐに足る人物である。

併し芭蕉でも、時々は失策もやり、又誤もある。「幻住庵の記」の中に、「黑津の里はいとくろう茂りて、網代守にぞとよみけん、萬葉集のすがたなりけり」と記してゐるが、萬葉集には、「網代守にぞ」などと詠んだ歌はなく、これに似寄りの歌も見えない。「幻住庵の記」には、三通りの文章があ

るといふことであるが、他の二種の文章には、この「網代守にぞとよみけん萬葉集のすがたなりけり」の句はなく、たゞ一種にだけこれが見えてゐるのは、最後にいたつて、ふと思ひついて、この句を書き添へたものかと思はれる。併し、このいかにも尤もらしい句は、實は跡方もない根無ごとのやうであるから、うつかり芭蕉にだまされてはいけないといふことも注意しておく必要があるのである。何しろ相手は俳文であるから、自由な想像が、相當奔放にかけめぐる惧れも充分にある。

現代歌謠の再檢討

一

近頃、漸く民謠に對する關心が、一般的に稍高まつて來たやうである。放送協會あたりで、民謠視察團を派遣したりしてゐる。さうして、ある新聞社で募集した歌謠の作曲は、民謠調と、洋樂とを完全に渾和させた立派な作品であるとのことである。併し、私はその曲を見て、なあんだと思つた。この種の歌謠なら、もう昔から、たとへば寶塚少女歌劇あたりでも、その舞臺でうたはれたりしたやうなもので、今まで出たレコードを通じても、歌謠曲などに、類似のものは幾らでも見出すことが出來るのである。

しかも、これは農村のための歌謠のやうである。近頃では、又、地方文化の振興、生育といふやうなことも稱へられて、そのために、地方、特に都會地でない土地に、文化的なものを植ゑつけるため、いろいろの方法が考へられ、試みられてゐる。そのための、一つの方法として、かうした歌

謠を通じての地方的な關心を示し始めたのであつて、右の新聞社の歌謠も、やはり、地方に對する植ゑ付けといふやうなことが、目的の主なるものになつてゐるらしく、その他にも、新聞のほかには、農山漁村文化協會などといふところでも、やはり農村歌謠といふやうなものを發表し、これに振付までも、舞踊家に委囑して、つけてゐるのである。

かうした近頃の傾向を見るにつけても、私は、そゞろ寒心に堪へないものがある。何といふ誤まつた方向に向つてゐることだらう。根本の間違ひは、地方に、殊に素朴な田舍に、さういふものを、そのまゝ押しつけようとする考へ方である。今までにも、民謠調を取り入れた洋樂とのまぜものが、歌謠の方では、よく現れて、中には、相當行はれたものがあつた。從來、何々音頭などと云はれた歌謠曲、レコードによる流行唄、又、地方小唄の類は、大抵この種のものである。しかも、今日、地方文化に關する注目が高まつて來たとき、結局、この從來の線に添うて、その民謠調であることを强調しようとしてゐるのである。

この民謠調と洋樂との渾融といふことが、根本の問題になるのである。さういふ歌謠が今までにも盛んに出たが、一體これまでさういふ作品で成功したものが、どれだけあるのであらうか。藝術的な洋樂の作品で、民謠調を取り入れたものも、近頃段々出て來たが、それらも必ずしも十分に成功してゐるものとは云ひがたい。この場合、外國の民謠は、音樂家の作曲に取り入れられても、決して不自然ではなく、反對に、その作品の民族性を强調にする爲めに、有效に働くのである。ところが、わが國にあつては、なかなかそれがむつかしい。といふのは、根本的に、洋樂の性質と、わが國の民謠、その他の音樂の性質が違つてゐるからである。旋法も違ふ、旋律も違ふ。およそ、油と水ほどに違ふ。その全く混和しない油と水とを、一つにしようとして苦心してゐるのであるから、成功するはずはない。これには、どうしても、化學的發明の天才が、思ひ切つた方法でもとるのでなければ、まづ當分は、油と水とは、どう工夫して見ても、やはり離ればなれになるより他には仕方がないであらう。

和洋合奏といふのがある。日本の樂器と西洋の樂器とを一緒にして、わが國の俗曲の類を演奏するのである。これは先づ、音樂の上では最も低級なものに屬する。ところが、又別に、新日本音樂と稱するものがあつて、わが國の樂器に少數の西洋の樂器を交へたりして、新作の曲を奏するのである。ところが、その作曲法は、洋樂の眞似であつて、箏をピアノの代用にし、尺八をクラリオネ

ツトかフリユートの代用にし、三味線は又、バイオリンか、せいぐ〜マンドリンの代用にでもしようとする方法を取つてゐる。代用品は粗悪なものときまつてゐるが、私どもは、さういふ新日本音樂なるものをラジオなどで聞いても、何の感銘も受けないどころか、腹立たしくなることさへある。洋樂家や音樂批評家が、この新日本音樂なるものを問題にしないのも、當然であると思ふ。

尤も、その間にも、極く少數のすぐれたものが出たことは確かである。併し、それらのすぐれた作品は、箏をピアノの代用とせず、箏としての長所を生かして、つまり從來、箏曲が取つて來た方法を、稍現代的にして用ひてゐるからであつて、他の樂器についても亦、同樣である。かやうにして、今まで、邦樂が傳統として育成せられて來たところを生かし、この地盤の上に立つて、作り出されたものが、始めて、眞實の價値を持つて來るのであり、聽く人を感動させることも出來る。たゞ盲目的に、洋樂風のものを取り入れても、それは何の役にも立たないばかりか、むしろ效果を減殺し、長い間の歴史で洗煉を重ねて磨き上げられた邦樂を混亂に陷し入れるだけのことである。

たとへば、所謂二つのものの渾融が、かういふことになつては、甚だ困ると思ふ。洋服のズボンだけをはいて、その上に絆纏を羽織つた恰好のもの、かういふ姿を、西洋人がとき〳〵してゐるが、甚だ滑稽に見える。或は、洋服の上着に、モンペをはいたやうな姿でも、見つともないであらう。かやうに眼で見るものは、その美醜や善惡が、大體直ぐに判別出來るが、耳で聽く音樂になると、それが容易にはわからず、ごまかされやすいのである。今までの民謡調と洋樂との融合といふのも、これに似たもので、それは二つの融合といふよりも、木に竹をついだやうに、或は水に油を注いだやうに、別々のものが混り合つて入つてゐるだけの現象である。根本的には、決して渾然とした融合の感じを與へてはゐない。それゆゑ、かやうな歌謡が、妙に低級な感じを與へ、卑俗な感じを與へたりするものすらあるのである。

二

私の考へてゐるところを率直に云へば、民謡調に洋樂を混へ、或は、兩者の渾然たる融和を作り上げようとする試みに、根本的な誤がひそんでゐるのではないかと思ふ。それはむしろ、新しくすぐれたものを創造する結果にはならないで、反對に、すぐれたものとして存在してゐた事物を、傷つけ破壞することになるのを恐れる。

洋樂は洋樂として、その道において生かし、その特質に從つて、特色を發揮させ、進歩をはかる

やうにした方がよいのではなからうか。それが自然に、日本的に化して來るなら、その時節のおのづからなる到來を待つてもよいであらう。併し、急激に、人工的に、作爲的にこれを作り上げようとしても、藝術の世界では、決して成功するものではない。まして、前にも一寸觸れた、西洋樂器の間に三味線を交へる和洋合奏なるものの低級なことは、誰でもわかるであらうが、その又逆も、明かに同じことが云はれるのである。さうすれば、所謂新日本音樂なるものの價値も、おのづからにして明瞭であらう。

歌謠の場合にも、これと同じことが云はれるのであつて、なまじ、民謠調を融合させるといふやうな試みより、外國の音樂の性質にふさはしい曲を、作り上げた方が賢明である。愛國行進曲の成功は、その點にかかつてゐるのである。日本化さうとあせる爲めに、日本音樂の調子を出さうとしても、却つて失敗に終る場合が多いのではないかと思ふ。併し一方では、この愛國行進曲を、三味線でひくやうなことが、ある社會では盛んに行はれてゐるが、これもおろかな話で、かういふ曲は、まるで三味線には乘らないのである。それゆゑ肝所なども餘程無理をしなければ、ひけもしないし、又たとへさういふ無理を冒してひいたとしても、決して、この曲の心持も感じも、三味線では出せないのであつて、日本の樂器では、根本的に旋律感が違ふのであるから、どうにもなるものではない。

かういふ間違ひをするよりも、日本音樂とか民謠とかいふものは、それ自身の本質を生かして、これまた、やはりその方向において、進歩發達をはからなければならないのである。今日の世に行はれてゐる、所謂民謠といふものは、いづれも、地方で起つたものか、或はその土地で成長したものであつて、たとへ他の土地から輸入した歌謠であつても、これが土地の民謠化するためには、それに必要な條件が備はつてゐたのである。その土地になじまないやうな歌謠は、決して、たとへ一たん入れても、これを長くとどめるやうなことはしなかつた。

かうして成長した民謠も亦、時代を經るに從つて次第に多少の變化を來たすのは當然である。ただ、純粹の土地の民謠といふものは、いかにも土地の香が高いかはりに、一面必ずしも一般的ではないので、他の土地の人には、一寸受け入れられなくなつてゐる。それで、これを一般化するためには、その土地の純粹の程度を多少和げて、これを改作する必要も起つて來るのである。かやうにてし、一般に行はれるやうになつた民謠は、その土地の純粹のものに比べると、可成り違つた結果

とたつてゐるが、さうして、土地の人に云はせると、だから、他所でうたふ唄は嘘で、自分の土地のものが本當だと云つて、非難の語氣をもらしたりするのだが、さういふのは却つて狹い土地自慢ともいふべきで、むしろ一般化したものの方が、歌謠として洗煉せられ、或ひは心に入り易くなつてゐることは確である。

歌謠が民謠を土臺にすることによつて、民族性を强調にするためには、實に、かやうな方法によつて、その效果を期待する方が、確かに希望をかけることの出來る賢明な道である。上から、中央から、都會から、これを地方に及ぼすのは、むしろ反對であつて、下の方にひそみ、地方に隱れてゐるものを引き出して來るのである。或は、種々の土氣や夾雜物が混つてゐるものの中から、その眞實にすぐれたもの、國民の間に普遍するものを見出すのである。さういふ民謠をなるべく數多く發見することが第一の道であり、更に、これに基づいて、その國民の間に共通する歌謠の本質を明かにし、これによつて、一般の國民の口に上るべき歌謠の作り出だされることが第二の道である。併し、この作り出だすといふのは、むしろ、從來に存在してゐた民謠を改作して、これに一層の磨を加へ、更に一般的な性質を持たせるために平易化するといふやうな意味に解してもらつた方がよい。

とにかく、洋樂の手法による歌謠、民謠を土臺とした歌謠、この兩者は、はつきり區別しなければならないのである。この兩方を曖昧に混ぜ合せた鵺のやうな歌謠が、今日までの歌謠であつたし、これからも、まだその方向に進むことによつて、何か新しいものが創造せられるやうな妄想が、今なほ抱かれてゐるやうにも思はれる。併し、今日最も必要なことは、むしろ兩者を峻別することによつて、各の特色を明かにし、その長所を發揮させた、それ〴〵の曲の出現することである。

さうして、洋樂の方の歌謠については、今までにも、可成りすぐれた作が出てゐる。事變後の愛國行進曲や、古くは瀧廉太郎の作曲になるものなど、その代表的なものであらう。これらは、洋樂風の中に、民族性の本質が、しみ出たやうな作である。民謠調によらなくても、民族性は十分に表現出來る。併し、民謠調のものになると、それとは反對に、新作のもので、これらに匹敵するすぐれた歌謠は、殆ど出てゐないと云つてよい。その代りに世に行はれた歌謠は、それ〴〵の地方から出た民謠をアレンジしたものであつた。おけさ節とか伊那節とか鹿兒島小原節とかは、かやうにして出現した歌謠である。それは當然、さうあるべき道理であつて、これらの民謠に基礎を置いた

歌謠が、わが國民の心に浸み通る深さを持つてゐるからである。それは、新作の、しかも洋樂の手法で不純にさせられた民謠調の歌謠などの淺さ、低さの、たうてい及ぶところではないものがある。

かやうな民謠調の歌謠は、同時に三味線に乘るものでなければならない。ピアノやオルガンではひけても、三味線や尺八には滿足にのらないやうな、又たとへ、これらの日本に昔からある樂器で演奏することが出來るにしても、甚だ無理な不自然な演奏法をしなければならないやうなものなら、もうそれは、十分に失敗の作であるとしなければならない。むしろ、ピアノやオルガンでは、少々不自然であつても、十分に三味線にのる曲であることを必要とする。三味線を賤しみ、これを無視しては、とにかく日本の音樂の根柢となつてゐるものを、生かすことは全く不可能とならざるを得ない。併し又それゆゑに、日本の樂器と西洋の樂器とを入れ混ぜにする試みの愚なることを述べたごとく、民謠調と洋樂風との混融といふことが、結局失敗に終らざるを得ないことを、考へなければならないのである。

古い例でいふなら、今日では同じ雅樂といふ中に入れてゐても、わが國で最も古くから用ひてゐた和琴を、神樂や東遊のごとき、純粋にわが國の古樂としての特色を持つてゐるものと思はれるもの、少くとも、わが國の歌謠としての香氣の高いものには用ひるが、外國から輸入せられた舞樂の中においては、これを用ひることなく、和琴と、舞樂の樂器とを混じることのなかつたやうな歴史は顧みられてよいことであらう。

三

最近、文部省の檢定を通つた音樂の教科書を見て驚いたことは、女學校あたりでは、西洋音樂については教へるが、日本音樂については何も教へてゐないといふ事實である。その教科書に載せてゐる曲は、すべて西洋の曲か、又は、極く少數の日本人の作曲した洋樂の曲ばかりである。それのみならず、その教科書には、音樂史的な種々の參考材料が繪入で出てゐて、音樂家や樂器や樂譜などの歴史的變遷まで說いてゐるのであるが、それらがすべて、洋樂に關することのみで、日本音樂については全く觸れてゐないのである。この教科書に出てゐる、日本音樂の旋律の曲と云へば、國歌の君が代くらゐではないかと思ふ。

しかも、その教科書の中の西洋の曲には、外國の民謠が甚だ多いのである。スコツトランド民謠

やアメリカ民謡やドイツ民謡や、多くの民謡が出てゐて、それらは、わが國にも古くから入つて來たものなので、有名な曲が多いが、しかも、日本の民謡は、これ又、全く見えないのである。尤も、かういふことを云ふと笑ふ人が多いであらう。螢の光とともに、木曾節を女學校で敎へて見てはどうかと。全く、これはをかしいといふ氣持がする。併し、それならなぜをかしいのか。それは、日本音樂の體系的取扱ひが全く無視せられ、たゞ洋樂のそれのみに終始してゐる中にぽつりと、さういふものを入れるからをかしいのであつて、さういふ感を與へるのはむしろ現代の音樂敎育の缺陷にあるのではないか。

昔の小學唱歌集には、却つて箏唄風の純日本的旋律の曲が可成りあつた。今、普通今樣と云はれる曲、九州の博多地方の民謡の黑田節といふ民謡などにも取り入れられてゐるあの曲は、雅樂の越天樂の旋律から出たものであることは知られてゐる通りだが、かう云ふものを通じて、雅樂の旋律に親しませることがいけないのであらうか。現代の音樂敎育が、なぜ、西洋の音階、西洋の樂器、西洋の曲の理解、知識だけを與へることにとどまつて、日本の音樂については、全く觸れないのであらうか。平安時代の雅樂や、江戸時代の三曲などについて、國民の敎養としてでも、これを說くことが、何故全く除外せられなければならないのか。一體、自國の古來の音樂或は音樂文化を全く無視した音樂敎育などがあつてよいものであらうか。それが本當の敎育なのか。私は、この敎科書を見て、堪へ切れない痛憤を感じたのである。併し、文部省の音樂敎育の指導の方針がこれなのである。かやうなことでは、日本文化の現代的創造を、古來のすぐれた日本文化の傳統に卽して行ふべきであるとする、われらの主張など、當局が、一方では、さういふ精神に同意してゐるやうでありながら、この音樂敎育の一例でもわかるやうに、實際問題としては、全く無視してゐるのであるから、役所などといふものは、いゝ加減なことをやつてゐると感じたのである。

もとより西洋音樂を基礎とした敎育は結構であり、又、將來、歌謡の方面でも、この點から、立派な作が、わが國民の手によつて、世界に誇るべきものの生まれ出ることが期待せられるなら、それは喜ぶべき現象であつて、そこにも、優秀な創造的なわが民族的性格といふものは表現せられるのであるが、それ故、日本音樂については全く無視せられ、お箏、三味線は家庭のお稽古だといふやうな舊時代的觀念をそのまゝに受けついでゐてよいといふはずはない。

音樂敎育の上で、洋樂とともに、日本音樂體系を樹立することによつて、その理解を授けるべき

必要がある。今こそそれが行はれる時であると考へる。歌曲も、この態度の上で撰ばれ、音樂教育の方法も內容も、この態度の上に建て直しをして行はれるのでなければ、音樂の上で眞實の國民的自覺に到達したといふことにはならないのである。たゞ、ドレミハの音階の代りにハニホヘトの音名を採用した程度で、日本的になつたと、得意になつてをられては甚だ困る。

西洋文化と日本文化とを對立させるところから止揚させるべきであるとするのは、辨證法理論を、そのまゝ机の上で喜んでゐる議論であつて、かつて進步的と云はれた、西洋理論の觀念論者によつて主張せられたことであるが、これは、なかなか實地には困難な問題で、われらの意見は、むしろ、西洋的なものの輸入は、そのまゝに成長させ、同時に、純粹の日本文化をも護持して、これをます〳〵洗煉して行く方法をとる。兩者の野合ではなくして、純粹なるものの姿の中に、それぞれの特色を生かし發揮させて、位置を占めさせるのである。日本間と西洋間とをつなぎ合せたやうな、安つぽい所謂文化住宅式のものを、すべて放逐するところから、現代文化の淸掃は始められなければならない。この際、低俗な折衷と妥協とを排斥するのである。歌謠の方面でも、かうした根本意見から、この論が出てゐる。

特に、音樂教育については、洋樂一點ばかりではなくて、是非日本音樂についても、一貫した方法と組織のもとに、洋樂と並んで相共に授けることが必要である。日本音樂の教育といふことについても、是非當局及び識者の反省、考慮を促してやまない。不當な日本音樂の無視、壓迫、默殺、卑俗低級視は、この際、强く改められ是正せられなければならぬ。日本民謠に對する眞實の理解、國民に對する浸透もそこから起つて來るであらうが、これが先づ始に根本的に考へられるべき問題なのである。

第四章　國語に就いて

國語運動に對する希望

國語運動は、わが國家の歴史と國民性とを無視しては、結局效を奏しもしないし、又、これを强制しても、決して有益ではなく、かへつて有害でさへある。それゆゑ、價値のすくない因襲は打破しなければならないが、正しい傳統は、出來るだけこれを生かして、革新運動の地盤としなければならない。もしすべての革新運動が、この點を根據としないで、歴史と國民性とを異にする外國のそれを、鵜呑みにして、わが國においても、これを適用しようとし、わが國家の歴史と國民性とを無視するものであるなら、それは甚だ危險な試みとして、反對せざるを得ない。

この意味で、國語運動も亦、以上のやうな根本精神の上に立つて行はれることが、甚だ必要である。それはたゞ、實用的利便の問題だけで考へ、功利的な尺度だけで測られる事からではない。もつと深いところに、精神の奥處に、解決の鍵がひそんで居るのである。

ここで、わが國家の歴史と國民性が示す特色の著しいものとして、あげておきたいことは、同化融合の傾向を持つて居るといふ點である。これについては、今更あらためて說明するまでもなく、多くの人々によつて說かれたところであるが、國語運動においても、この特色に留意する必要がある。さうして、國語の純潔を保つとか、國語の統一をはかるとかいふことが、かうしたわが國の特色に反して、いたづらに排他的となるやうであるなら、それはむしろ國語の純潔ではなくして、國語の貧困を招くものであり、國語の統一ではなくして、國語の退化を來すおそれあるものとして、十分に警戒する必要がある。

國語の問題から、ちよつとはづれるが、わが國の固有の信仰としては、太古から神道があつた。その後に、佛敎が輸入せられ、又、宗敎とは云はれないが、儒敎も入つて來たし、おくれてキリスト敎も亦入つて來た。これらの外來の宗敎なり思想なりは、非常な影響を與へるとともに、中には完全に、國民生活の中に同化せられたかと思はれるものもある。かりにこれを建築物についてみても、神田明神あり、湯島の聖堂あり、ニコライの會堂あり、又、はるかに淺草寺や本願寺の見えると云つた、お茶の水や湯島あたりの風景を、矛盾や混亂に滿ち滿ちて居ると云つて、必ずしも非難するものはないであらう。むしろそれらは、その所を得て、今は落ち着いた調和の中に、その場所

を占めて居るやうな感じさへ與へられる。

かういふ例を、食物とか衣服とか、卑近なものについてあげると、際限がないほどに出て來るが、これらをとりすべて云へば、わが國には、外來のさまざまな事物が、精神的なものであつても、形態的なものであつても、とにかく何らかの足跡を殘して、それがわが國民生活を豐富にして來たのである。それらの中に、もし國民生活に不都合なもの、わが國家と相容れない消化しがたいものがあるなら、いつか消滅して、影も形も見せなくなる。併しとにかく、外國の文化のすぐれたものを多く取入れて、わが國は成長して來たし、又、わが國の文化の歷史に貢獻した偉大な足跡は、長く、その歷史の中にこれを保存して、亡失し去らないのが、又わが國の特色でもあつた。それゆゑ、神道、佛敎、キリスト敎は、今日も合せ行はれて居るし、又、神社、寺院、敎會堂がいたる所にある。さうして、神社の建築物に、上古の住宅建築がしのばれるなら、寺院の建築物には、中世の住宅の面影を殘して居るものがある。つまり現在殘つて居るもの、行はれて居るものを、たゞ横に平面的において、矛盾を感じない調和した結果に到達して居る現狀のまゝで眺めるだけではなく、これを立體的に、縱に並べて見るならば、それは長い長いわが國の歷史の縮圖ともなるのである。むしろ、それが歷史の眞實を保つて居るから、現在これを横に並べておいても、矛盾が感じられず、調和が與へられる結果になつて居るのである。能樂や歌舞伎や新派や新劇や映畫やが同時に行はれて居る、わが國の劇界についても、雅樂を殘し、謠曲や三味線や箏や洋樂やが行はれて居るわが國の音樂界についても、皆同樣の現象として、これを理解することが出來る。その間に勢力の消長はあるであらうし、主となるものと然らざるものとの區別はあるであらうが、一が他を全く驅逐してしまつてこれを滅し、乃至は、單一なものによつて、これを統一し、他を全く顧みないといふやうな現象は、わが國では、甚だ稀にしか起らない。むしろ主要な部面について見れば、その多くのものを保存して、現在にまで傳へて來るといふのが、わが國の特色であつて、それがわが國の文化を一層富ましめる所以であり、同化融合の傾向といふことも、この特色と關聯して理解せられなければならない。

國語の問題にもどつて、私は、わが國の國語についても、同じ現象を認め、これがわが國の歷史や國民性が示す特色と、共通して居るもののあることを考へたいのである。

文字は漢字があり假名があり、又ローマ字も行はれて居る。假名にも漢字の草體なる平假名と漢

字の略體なる片假名がある。漢字自身にさへも行書や楷書の別がある。われわれは、これらの現在行はれて居る文字からだけでさへも、これを材料として、わが國の文化の歴史の一面を形作ることが出來るのである。

同樣に言語には、古來のやまとことばがあり、漢語も甚だ多く行はれ、その他の外來語も、各國のものが入つて來て居る。文章でさへも、神前で奏せられる祝詞や文語文、口語文、手紙の候文、その他種々の場合に行はれる各種の文章を綜合すれば、縱の長い歴史を、われわれの現在の生活の種々の部面に、一つの縮圖として見出だすことが出來るのであつて、わが國の文化の豐富で、且奥行の深いことをかうした方面から解釋することも可能であると、私は考へて居る。消化力に富むわが國の特色は、今後ますますこの奥行と巾とを增して來るであらうし、それだけの強靱な彈力性を有して居ると云つても差支へあるまいと思ふ。

以上に述べて來たことによつても、大體私の意向は察してもらへると思ふが、國語の問題についても、たとへば文字のごときを、平假名なら平假名、片假名なら片假名、乃至はローマ字だけにして、全部を單一な文字で統一する、といふやうな國字の問題にしばしば見られる、一部の論者の意見のごときには、全く同意しかねるのである。

漢字がわが國語を混亂させたことも事實である。しかし又、漢字がわが國語を豐富にし、一般にわが國の文化を發達させた功績も認めなければならない。明治の初に、歐米の文化が急激に輸入せられた時、なぜ歐米の言葉を飜譯して漢字で現す必要があつたのか。それは、漢字が意味を現す文字であつたから、歐米の言葉や文字、又はわが國の假名で書いたのでは、明瞭でないものも、これを漢字で現すことによつて、ある種の觀念を文字が直接に示すことが出來たがためである。勿論そのために、一方では却つて言語や觀念の混亂や誤解をもひき起したところがあるが、しかし一方では、早く歐米の文化が理解せられ、消化せられる效果を示すことは出來たのである。

假名や或はローマ字のごときもので、わが國語が統一せられて居たなら、教育上に手數の省けることが多く、從つて、知能の進歩は、より大なるものがあるであらうとは、よく云はれるところであるが、しかしさういふ考へ方には、煩雜な漢字を多く用ひ種々の文章の行はれて居る明治時代を通じて、歐米の文化を吸收し、殆ど歐米の水準にまで到達することが出來たといふ驚異的な歴史上の事實を見落した點がある。併し、それゆゑに、もつと文字や文章が簡便であつたなら、學術上の

進歩はより以上に著しかつたであらうといふものがあるかも知れないが、その程度に至つては疑問であるといふの他はない。

以上のごとくして、國語運動は、決して歴史的に、わが國の文化を高め、豐富ならしめて來た國語なり、國字なり、文章なりを、單に功利的な利害の考へのもとに、全く廢棄し去り、ある單一なものによつて、これを統一してしまはうといふやうな、國民文化を低俗ならしめ、貧困ならしめ、さうして、國民生活を單調ならしめ、無味乾燥ならしめるやうたものであつてはならない。さうした試みは、わが國家の歴史と國民性にも反するところであることは、既に上來述べて來た通りである。

それでは、國語運動の目的はいかなる所にあるのであらうか。これを、今まで例に引いたものでたとへて云ふならば、神道や佛敎やキリスト敎やの、それぞれの持場や用ひ方やは、それぞれの特色をもつて自然に限定せられ、規定せられて來る。又、神社、寺院、會堂等の建築の形とか、寮圍氣とかについても同樣のことが云はれる。國語運動といふのは、かうした、それぞれの歴史なり特色なりを明かにすることによつて、現在のそれぞれのものの置かれる持場なり、與へられる用法なりを規定する所にあるのではないかと思ふ。國字の問題にしても、漢字、平假名、片假名、ローマ字は、それぞれに使用せられる方法なり、働かされる職場なりは、各々の特色や歴史に應じて明瞭にせられて來るはずであり、又、わが國のいかなる方面において、國民のいかなる人々が、そのいかなる種類のものを、最も多く必要とするかといふやうなことも考へられなければならない。これは用語の問題についても、文章や假名遣の問題についても同樣である。かくて、優位性を持つもの、主となり中心となるものと然らざるものとの段階、順序なども、自然に設定せられて來るであらうし、そこから國語・國文の統合、整理の機運も導かれ、又、自然淘汰の傾向も起るであらう。これらについて、正確に、調査、設定し、しかしてこれを施行することが、國語運動の重要な使命ではないかと思ふ。

もとより放任のままにおくことが、國語を不純、混亂に導くおそれがあることはいふまでもないが、しかし、簡捷な統一が必ずしも最上の狀態に導き、國語の眞實相を保持するものとも云ひがたい。假名遣においても、歴史假名遣と發音假名遣とは各の特色によつて、それぞれの持つ職分があるはずである。歐米人がラテン語のごとき古典語の知識の收得と語原的理解などよりして、國語の

科學的認識にまで到達して居る國語常識の廣さ深さが、科學的發展に直接間接に寄與して居ることを考へてみても、わが國における歴史假名遣の意義や職能や價値の重要さが明らかに考へられるであらう。しかし、又一方では外國人に日本語を敎へる場合とか、辭書その他の索引などにおいては、發音假名遣の方が便宜であるといふやうに、その效用を發揮させる方法が各の特色に應じて自然にきまつて來るであらう。功利的、物質的、實用的な面からだけで、單一な統合のみを考へることは、反對に、國民生活を科學的常態におき、物事の考へ方を科學的常識で處置しようとする結果にはならないのではなからうか。むしろ、それよりは、その各を、それぞれの特色に應じて存置せられ、活用せられる方法が考へられてよい。それは決して煩雜と混亂に導くものではなく、その巧みな整備・配合は、智能の訓練と情操の陶冶と、そして文化的水準の向上とを、これによつて、一層高めるものがあるであらうと考へて居る。さうして、自然科學者が、わが國家の歴史と國民性とを破壞しないやうな、もつと正しい、精神的、又歴史的認識と理解のもとに、國語運動に參加してもらふことをも希望したいと思つて居る。

國語の純化運動

時勢の要求に應じて、國語の改良の必要が叫ばれ、その運動も次第に顯著になつて來た。つまり、「やまとことば」で云へば、「ことばなほし」或は「ことばあらため」が、盛んになつて來たのである。

最近この方面で、先鞭をつけたのは、軍部であらう。軍隊で用ひられる言葉の中には、隨分むづかしいものが少くない。それで、「兵器名稱及用語ノ簡易化ニ關スル規程」を定め、それによつて、從來の兵器用語を改正して、決定した分から世に發表しつつある。更に、東京日日新聞では、適譯を募集して、既に行はれてゐる外國語（歐米の言葉）に、適當な譯語をつける試みを發表して、これが話題となつてゐる。厚生省でも運動競技の用語に、適當な譯語を用ひようとする傾向がある。かやうに官省方面でも民間でも期せずして、この種の試みを公にし、或は調査したりしてゐるのは、やはり時代の狀勢がもたらした自然の勢であらう。

軍部の規程が、兵器名稱及び用語の簡易化と云つてゐるやうに、ことばを簡單明瞭にし、一般に理解しやすくするのが、その最も重要な目的であらう。特に、從來用ひられてゐた軍隊の用語の中には、一般の用語とは全く違つた、特殊のものが多いので、はじめて軍隊の教育を受けるものは、その用語を覺えるのに大いに苦勞するといふ話はよく聞くところである。それでさういふ特殊な用語をやめて、その代りに、なるべく一般的な言葉を用ひて、軍隊の教育上の手數を省かうといふのも、この改正の目的の一つになつてゐることと思ふ。

兵器用語の改良の實例を見ると、世の國語改良論、乃至、東日の所謂適譯などの試みに對して、種々の示唆を與へるものがある。從來の用語には、難かしい漢字を用ひた、全く特殊の言葉が多いが、それらの漢字の代りに、もつとわかり易い一般的な用語を取り入れてゐる。そのためには、外國のことばであつても、既に一般化してゐるものは、これを用ひて、むやみに漢字、漢語に還元するといふやうなところはない。從つて、從來の言葉に比すると、外國語が甚だ多くなつてゐるやうに見受けられる。例をあげると、調帶、或は調革をベルトに改め、駐楔、或は駐鍵をキーに改め、轉把をハンドルに改め、制轉機、或は制動機をブレーキに改めた類で、殊に機械の名稱にこれが多い。これらの例によると、從來の名稱よりも、今度改められたものの方が、たとへ外國の言葉であつても、一般には通りがよくて、わかり易いのは事實である。

それで、中には、日本の普通の言葉を西洋の言葉に改めたものもある。潜水機に用ひられる袴をズボン、襦袢をシャツ、袴下をズボン下とした類で、袴といふ言葉の持つ概念が、潜水機具のそれとは全く違つたものであるから、さういふ觀念の混亂の起らないやうに、これを分別して、袴とか襦袢とかいふ言葉を改めて、ズボンとかシャツとかいふことにしたものであらう。

かういふ行き方は、國語改良の上に、大いに參考せられてよいことだと思ふ。西洋の言葉であるから用ひては悪いといふ理窟は成り立たない。それは西洋の品物であるから、用ひてはいけないといふのと同じで、さうなれば、衣食住のすべてにわたつて、大變な混雜と不便とを惹き起すことになるであらう。西洋の言葉であるから悪いといふのは、その言葉の用ひられる對象や環境や狀況や内容やさまざまの特殊な條件を考慮においた上で始めて決定せられることで、一般的に西洋の言葉なるが故に悪いとは云へないことである。それで軍部の行き方は、この點に、大きい一つの示唆を投げかけてゐると思ふが、それは結局、東日などで募集してゐる、適譯の試みとは反對の現象にな

るのであつて、既に一般化してをり、その物その事がらと離して考へることの出來ない言葉に對して、改めて所謂適譯を與へることは、結局無意味な特殊の用語を新たに設定する結果に陷るのではないかといふ疑問が起つて來る。それで次のやうな矛盾した實例さへ生じることになる。軍部では、從來傳聲筒と稱してゐたものを、今度一般の名稱に從つてメガホンと改めた。この軍部で採用した言葉に對して、東日で募集した適譯においては新たに擴聲筒といふ譯語を與へてゐるのである。もしこれが採用せられたとすれば、軍部ではその特殊な用語を改正して一般の用語を取り入れようとしてゐるのに、一方では一般の用語に、所謂適譯を與へることによつて、軍隊で用ひてゐた特殊の用語に還元させようとするやうなもので、堂々廻りをやつてゐることになる。これではいつまでたつても收まりがつくわけはない。私は軍部の進歩的な意見に敬意を表する。

むづかしい漢字を改めて、假名で書き現すことの出來る平易な用語にしようとするのも、この軍部の用語改正の一つの主眼であるらしい。それで、喞筒がポンプとなり、鞏がさやとなり、挺子がてことなり、柄杓がひしやくとなり、又、握把が握りとなり、節動輪がはずみ車となり、木螺子廻、或は轉螺子、或は轉螺器がねぢ廻となり、擴大鏡が虫めがねとなりといふやうな例は、何れも言葉が平易化してをり、漢語漢字の代りに、假名を用ひ、「やまとことば」さへも用ひられてゐる。

次に、軍部のこの用語改正では、從來の曖昧な意味を持つ言葉に對して、正確な意味を持たせようとしてゐるやうに解されるところがある。つまり用語の科學化である。併しこの點については、從來一般普通化してゐた言葉の代りに、稍特殊な、或は今まで一般にはあまり聞き馴れない言葉も用ひられてゐるやうである。寒暖計が溫度計となり、氣壓計が壓力計となり、その代り晴雨計が氣壓計となつたのは、かういふ科學的な意味を持つ言葉の改正であらう。

以上見て來たやうなわけで、軍部のかういふ試みは、大變結構であるとともに、又、言葉の純化といふか、改正といふか、或は言葉の淘汰といふか、整理といふか、さういふ問題に有力な方向を示すものと云つてよからう。それは西洋の言葉であるとか、さうでないとかいふ事が決定の標準とはならず、簡單明瞭で解り易い言葉、一般的に用ひられてゐてよく通じる言葉、それと同時に一方では科學的な正確さを相成るべくは滿たすことの出來るやうな言葉を用ひようとしてゐるのである。

この言葉の簡易化といふことは、今後の一つの目標になつてよいことだし、又、日本語では自然にこれをやつてゐるのである。かつて流行した言葉で言へば、モダンガールを略してモガと云つた

り、國民精神總動員といふ長たらしい言葉を略して精動といふ言葉を作つたりするのはジヤーナリズムの發明かも知れないが、かういふ事は、昔から行はれてゐた。人名でも、さき頃薨去された西園寺公は、一般に園公で通つてゐる。みんな二字くらゐにしてしまふのである。併し一方では、さういふ略語、造語が安つぽい卑俗な感じを伴つてゐることも否定出來ない事實で、いやな感じを與へる場合も多い。モガとはいかにも野卑な感じを與へる言葉であつたし、精動に至つては、支那などでは緩な意味に解される言葉であるといふ。園公でも、これを公園の逆の意味の園公を聯想すれば、淺草公園の隱語となつて、あまり品のよい語感を伴ふものとはならない。だから、自然のまゝに放任して、勝手な略語、造語の横行に任せるのは、もちろん宜しくないことで、この場合、不愉快な語感を伴はない、品位のある文字や言葉が考へられ、選ばれることが必要である。

明治の始には、蒸氣車とか岡蒸氣とか云つてゐたものが、自然に淘汰されて汽車といふ二字の語になつたが、かやうに國民の間で自然淘汰されて一般化する現象が、割合に正しい方向を辿るものであるといふ事も考へておいてよい。同樣の事がらであるが、以前にはよく活動寫眞と云つてゐたのを、今では、かういふ言葉は古くさくなつて、一般に映畫と云はれてゐる。これも言葉が次第に變遷して簡易化する現象の一例で、かやうに、簡明ないい言葉なら、これを採用して一般に行はせるといふことも取られてよい方法である。併しそれは飽くまでも改惡でなくて、改良、改善でなければならない。映畫の原語のシネマを、今更持ち出す必要はないが、トーキーはどうであらう。カメラはどうであらう。これを音畫と云ひ、或は光畫とか寫眞とか云つた方が簡易化されてゐるか、或は原語のままの方が通りがよいかは問題であると思ふ。併し、かういふものこそ、譯語によつて統一することが必要なのではないかといふ氣がする。

バスを乘合自動車と云つたり、バスを定期券と云つたりするのは、言葉の簡易化にはならない。併しバスの方は、定期券といふ言葉が一般化されてゐるので、そのままでもよからうが、バスを乘合自動車といふに至つては、少し長たらし過ぎる。これなどは原語を保存しておいてもよいものではなからうか。尤も、田舍の人は、バスとバスとを混同して、ある土地では、乘合自動車をバスといふのが一般化さうとする傾向がある。かういふのは混亂を來して困るから、何とかして、正確に用ひるやうに計らひたいものだ。

運動用語は昔から譯語の用ひられてゐるものがあつて、これも長たらしい原語を、普通二字くら

ゐの漢字で現してゐる。ベースボールが野球、ローンテニスが庭球、これに倣つて、近頃では、ゴルフを芝球、ヴアレーボールを排球、ホツケーを杖球といふ譯語が現れ、殊に、排球のごときは漸く一般化さうとしてゐる。フツトボールを原語通りに足球と云はないで、蹴球と云つたのは、わが國に昔からあつた蹴毬（けまり）に似た文字を用ひたものであらうが、近頃では、これと區別するために、アメリカン・フツトボールを鑑球と譯したといふ話である。これなどは長たらしい名稱であるから適當な譯語を與へた方がよいにきまつてゐる。先頃行はれた二千六百年記念の厚生省主催の神宮體育大會では、運動競技の名稱に大抵譯語を用ひてゐたやうであるが、ただラグビーだけは、ラ式と稱して別に譯語は出さなかつたやうだ。同じ運動用語であつても、ボートを端艇とか漕艇とかいふのは少し文字がむづかし過ぎる。これなどは原語の儘でもよいものではないかと思ふ。

漢字漢語を用ひるよりもむしろ「やまとことば」を使へといふ要求もある。これが可能であるものは、さういふことになる方がもちろん望ましい。東日の適譯で、スマートをすつきりと譯してゐたなどは、同感出來る。ただ、どうかすると、「やまとことば」は簡單明瞭になる代りに、複雜で冗長になるおそれがある。時計を、「ときはかるうつは」、或は「ときはかり」などといふのでは、やり切れない。二三字くらゐの漢字を用ひた方が、やはり簡明に表現せられるものであるが、ただむづかしい漢字や表現は出來るだけ避けなければならない。東日の適譯には、さういふ意味からは、大分贊成出來ないものも見受けられた。

用語の改正には、簡易化一般化といふ原則の他に、精神的な意味を持たせなければならない。さうでないと徒らに物質的な外形的改良になつてしまひ、どうかすれば改惡にもなる。左翼の盛んな時代に、左翼の用ひた言葉を、そのまま今日でも使ふとすると、どうかすれば左翼的觀念を伴ふので、何とかして別の言葉を使ひたいと思ふことがある。言葉は同じでも、內容を變へればよいではないかと云はれるかも知れないが、物の感じといふものはさう簡單に行くものではない。

それとは方面が違ふが、同樣に精神的な意味で、今まで馬術と云つてゐたものを、劍道、柔道、弓道に並んで、騎道といふ名稱を、軍隊の方面で取り上げ、神宮體育大會でも、これを用ひてゐた。劍術とか柔術とか馬術とか云へば、單なる技術のやうに聞える。併し、これらはさうではなくて、その底に武士道と同じ意味の道義的な精神が横たはつてゐるといふ解釋である。それでわが國では一般に武道と云つてゐる。騎道もさういふ意味で、用語を改正したわけだが、これによると銃

劍術も、銃劍道といふやうに改める必要があらう。又、角力も角道などと云つた方がよいといふことになる。この角力を又相撲とも書く。これなどは是非漢字をどれか一つに（一般に角界とも云つてゐるし、簡明でもあるから、角力と書く方に）一定したいものである。

もう一つ、この問題について考へたいのは、日滿支いづれも同じ漢字を用ひて種々の名稱を現してゐるのであるから、將來、同一の事物は同一の漢字で書き現すやうに、何とかして、統一が實現出來ないものであらうかといふことである。映畫を支那では電影といひ、會社を公司といふなどはまだよい方で、わが國の自動車が支那では汽車であり、わが國の汽車が支那では火車であるといふことになると大いにまごつかせる。たとへ口でいふ時には言葉が違つてゐるとしても、使用する漢字については同一の名稱を使ふといふことになればやはり便利であらう。もう長い事、それぞれの言葉を使つて來たので、今更變へるといふのはむづかしいことであるかも知れない。併し滿洲や支那では、日本語の教科書を用ひて日本語を教へて行かうとする今日の時代だ。日滿支が一體となる時、用語の方面からも、同一の文字で同一の事物が現されるやうになれば、文化の理解の上でも、交流が非常に容易になるのではないか。これはひとりさういふ卑近な事物のみではなく、哲學、醫學その他の學術用語についても、用語の整理統合が、單に日本國内ばかりではなく、同じ漢字を用ひる諸國にわたつて、實施せられることが望ましいと思ふ。

國語問題より見たる新語

根本の問題

根本的にいふと、國語の中に、新語が生じるといふことはやむを得ない現象である。いな、新語が增加するといふことは大いに歡迎すべきことである。何となれば、新語が增加するのは、その國語が豐富になる所以で、國語が豐富になることは、卽ち、國家の發展することを實證してゐるからである。

國家が發展し、國力が充實して來れば、それに伴なつて、各方面に新しい事物が生じる。思想の上でも、物質の上でも、新しい事が造り出され、又、古いものが更新せられる。それらの創造と更新に伴なつて、必然的に新しい言葉が必要とせられるのである。それゆゑに、新しい言葉が盛んに出現することは、當然に起らなければならない現象である。

これを反對に云へば、新語が現れず、國語が固定してしまふといふことは、國家の成長を停止したのも同じことであつて、それはむしろ、國家が衰亡への道を辿つてゐるものと云つてもよいのである。さうして、いたづらに、死語、廢語に近い言葉を殘存させてゐても、國語の力は、國家が偉力を持たないのに應じて、次第に衰退するの他はない。國力の喪失が、やがて國語の創造力をも奪つてしまふのである。この意味において、新語の出現を忌み嫌ふことは誤である。新語の盛んに造り出だされるところに、生き生きとした國家の活動が國語に反映してゐる事を知るべきである。

從つて、問題は、新語の出現することを、肯定するか否定するかといふことにかかつてゐるのではない。それは、當然肯定せられなければならぬ事實である。要は、新語の現れ方に問題がある。又、新語の造り出された結果にも、考へるべき問題が存する。新語の現れる方法と、その狀態について、考へて見なければならないのである。

新語の現れ方

新語が出現するためには、その言葉が伴なはれるところの實體がなければならない。今まで存在しない新しい事物、或は抽象的な事がらについても、新しい思想、精神、さういふものが起つて來るか、知られて來るか、考へ出されて來るかすると、これには必ず新しい言葉が與へられ、新しい

言葉によつて表現せられなければならない。これは實體に伴なふところの言葉である。かういふ現れ方が、一ばん自然に新語を存在させてゆく方法である。それとともに、その事物、その思想が廢棄せられ、又、變化してゆくと、新しい言葉も亡失し、又は變化せられ、或は他のものに轉用せられて殘存するやうにもなる。

明治以後に、非常に新語が現れ、そのために一方では國語が混亂を極めるやうになつたと云はれるのも、それは決して、ひとり國語そのものの罪ではなく、明治以後の時代における國家の急激な發展、國力の急速な充實のために、かういふ結果を呈するやうになつたのであつて、それは一面において、明治時代以後の文物、思想の、さまざまな混入、雜多な紛亂の反映であるといふことが出來る。つまり、社會萬般の制度、設備、文化、各方面のものが無軌道、不統一であつた結果が、國語に影響を與へたのであつて、それはひとり、國語の責任を問はれるべき問題ではないのである。それとともに、國語のみを整理し、統一して、それでよき結果が得られるといふ性質のことではなく、むしろ、それは不可能に近いか、或は何らの効果も得られないことであらうと思はれる。社會のすべての文物なり、又、思想なりを、混亂、紛擾から救ふのでなければ、たうてい所期の目的は

達せられないことである。新語に對しても、この點から考へるのでなければ、いたづらに新語の雜然としてをり、輕薄であることを責め立ててても、仕方のないこと、何の役にも立たない。

右のやうに、社會の實體に相應して現れた新語は、とにかくこれを肯定しなければならぬものと考へてゐる。たとへ、その現れ方が間違つてゐるとしても、それは、事物なり、思想なり、その言葉を伴なふ實體が責められるべきであつて、實體から切り放された言葉だけが考へられてはならないことである。

ところが、時として、實體の伴なはない新語がある。實體が伴なはないといふのは語弊があるかも知れない。言葉は、とにかく何らかの觀念に必ず伴なふものであるから、さういふ人間の心の働きから、全く絶緣せられた言葉といふものが、あらうはずはない。併し、今云つてゐるところは、勿論さういふこととは違つて、言葉が、實體と遊離した、或は實體に相應しない、乃至は、實體を僞はつた存在として、新しく作り出されることがある。云はば觀念の遊戯として、言葉の弄ばれる場合も少くないのである。このやうにして出現した新語は、大いに檢討が加へられなければならない。